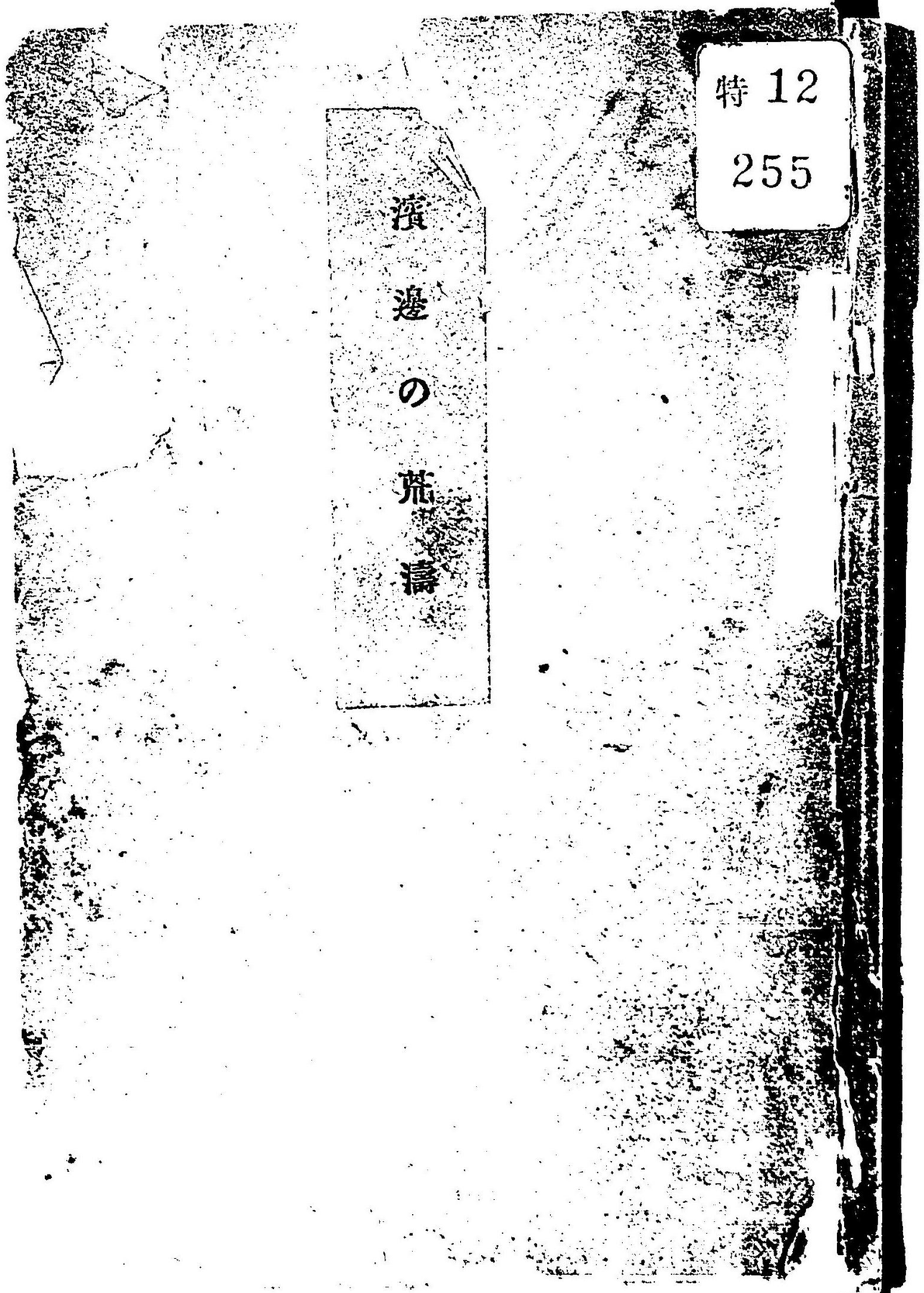


特 12
255

091278−000−4

特12−255

浜辺の荒涛

日吉堂

M22
DBN−2137

№17661/22

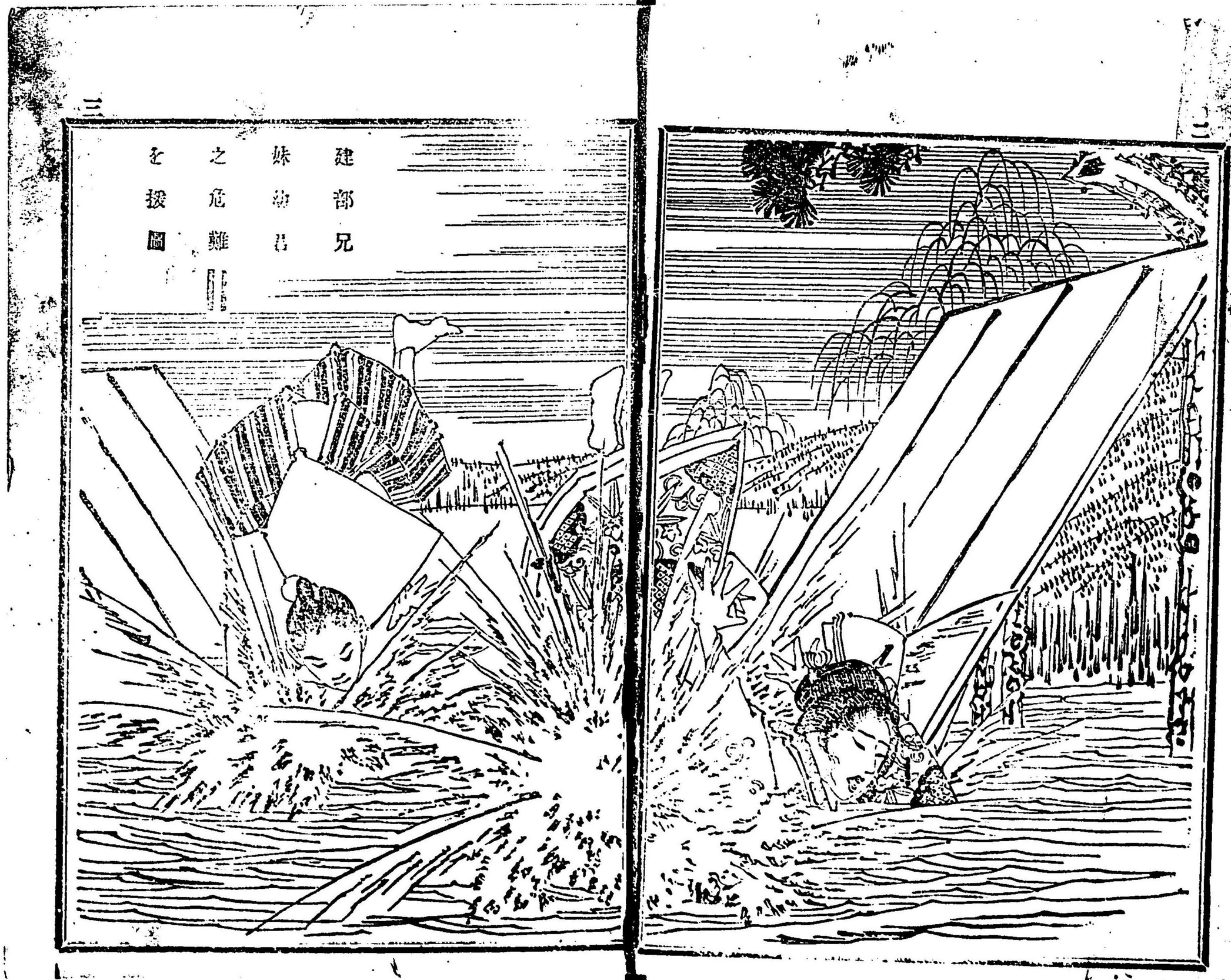
○濱邊の荒濤序

逆臣佞計を進ら[illegible]て主家を囲圄倦せんと企て[illegible]ぶも離つて形場の露に鮮る亡人となり忠臣時に精忠を尽し徹するの千差万別なる其顛末を忽ち起し忽ち記しぬるは稗史に倚らざるを得んや然れども漸次開化の道中に進む今の世の中へ古説を現せとは少も反對と思ひ是れ將た彼の臨機應變古くも先頃文明の囂囂に音沓て濱邊の荒波の顛末を因ひ中島座が演じたる活歴史の評判も彌高かりし實説を洩らしたる事と思ひつゝこの一冊の梓弓延へて諸君の御覧にと人は知らざれは本意なき事と思ひつゝこの一冊の梓弓延へて諸君の御覧にと人より思ひも書肆が利久當算略客容諸君も其お積りで御分永晉々々御斧鉞玉はらんとを紙書念ずる抔の言葉に似た節を冠せるはなんぞ恐しみ玉ふ[illegible]

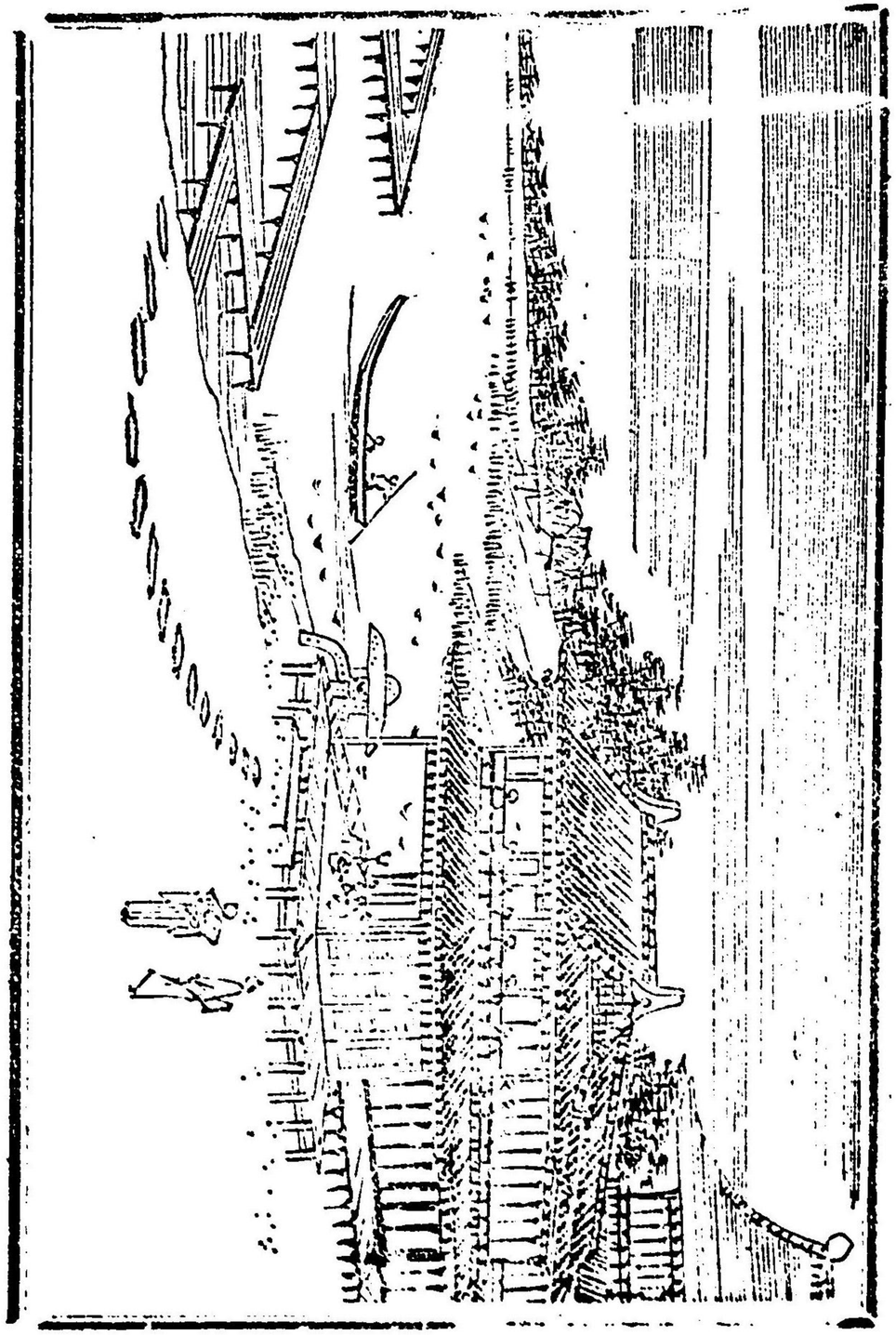
丙戌の夏汐留街僑居中にて

春永情史のふる

建部兄妹幼君之危難を救圖



特12
255



○、濱邊の荒濤

其一

人の道を行ふ何事か最も前なる只利義を辨ずるにあり夫れ義は天理の當然にして利は人慾の私なり日用の間一念の發る必ず利を棄て義を取り其利とする處特り富貴を求るゝ其利心なる事皆同じ故に義理分別の際に於て其機を失へは毫釐を差へて誤るに千里を以てし其濱邊害測るべからず豈慎まざるべけんや慎まざるべけんや茲ゝ話説を一編の物語は文久年間の頃がとい山陰道の某諸侯は二豎の爲めに世を逝玉ひ此に思ひたつ矢の石見潟濱邊の鄉の幼年ながら一子富丸を圍て家督相續の願を上しゝ速かゝ聞届けの沙汰ありけるにぞ一藩の者は稍く愁眉を開き中に先君左近將監の令妹花子と云へるゝ本妻ゝ賜りてより其威權一藩中に藤さし花咲岩隱塞と云へるが獨快々として之れを慨ぶの色なきは抑も如何なる所存なるや其事かゝ吉凶に至は是花子との中に一男子を擧け名を幾之助と稱ひ當年四歳なり正是先君左近將監殿の孫なれば今富丸をさへ滅はゝ幾之助を以て當家の嗣子となし俺も榮利を娛まんものをと先君在世の時は忠臣義士よと稱へられて堅き精神の岩崎なれども子故の闇ゝ迷ひろめ逆意の時をかためしは寔ゝ古語に云へる北斗の星を指る花子が他に出てたるなるべし是よりして藤夫婦は彷ゝ富丸を奥き者にせんと世て金錢を與へて同意ゞせし石戸主計海野金十郎横田和三郎高木半藏等と謀合せ當主富丸を江戸表へ召されゝる内を奇貨とし領分の濱邊に一の別殿を新築し其庭園へ猿と鹿やかなる池を堀り彼三河國ゝありしと聞

六

し八ッ橋の古事を寫して富丸君が遊覽の當日は橋碎け池中へ陥入り主人聘妻樂を池中へ投じ喪はんものをと甚恐ろしくも巧計ゐたる此惡謀を遂げるや否亦是よりして如何きる物語かある升い次回は解分べし

共　二

再説姦臣岩崎擧は領分河邊の地を選みて新に土木の工事を起し後へ別殿の建築に着手したり然れども其目的とする處は庭園内に架渡したる八ッ橋破碎の一事にあれば此工事を掌る職人は豫て已が謀計に同意させすしては繕調ふまゑと出入の橋梁の中甲乙と撰抜するに植木職六番組の取締なる鹿田屋忠五郎と云へるは自分か幼年の頃の乳母なりしお千代と云へる者の夫にして從來邸へ出入も繁く特には妻の主人なりとて其勤め方も他の職夫とは異る耳か氣象も頗る濶發なれば之れぞ屈竟の味方なりと竊に忠五郎を呼び寄せ如何説つけしか竟に同意をさせたるゑぞ庭地の工事は渾て鹿田屋一手の負擔となし其他も夫々持場を割つけ頻りゑ工事を急きゐたり爾れは恁る謀計のある作事ゆゑ建築落成までは諸人夫とも外出をとゝめ其自宅へ要向ある譴は掛役へ申し出て掛役より之れを執計ひ得さするの規則なれば出入其他とも嚴重なる事云ふばかりなし還は孰れも工場ゑ來たりし後言渡さるゝ事にして陰に不平を鳴すものもあれど所謂地頭と泣子の比喩また詮術もあらざる故工事の竣を待つ耳なり斉の中ゑ彼の六番組なる鹿田屋の人夫ゑ限りては始めよりして詰切の受負仕事と云へる事を承知の上にて入場し只管勉勵なし居るにぞ工事も追々捗取て最早彼八ッ橋中の機械の場所に及ひしが某日岩崎は海野主計の吩咐鹿田屋の部屋を始め一同へ連日の勞を慰

そる爲なりとて酒肴を與へ此上共出精して速ゑ竣功致すべしと傳へし故一同當日は早職止となし頃日の勞を慰むに中に鹿田屋忠五郎は部屋にある彌之助と云る植木職は年齢ざ二十四五にして渡世に似合ぬ艶姿且又性質も温厚ゑて義なれと同社會の者も賛ぬ者とてなかりしに本藩中なる河窪幸太夫の娘登代と云者が早晩彌の助に春憔し私に駒は焦すと雖も原來堅き作法なる武家の娘の事なれば了得に打つけて云ひ出しかね忍ぶ色音を下女のれ目が敏くも其れと推してや彌之助の來度毎ゑ曉れよかしゑ謎わかくれと吏に感する体ぞなきう

濱邊の荒藩

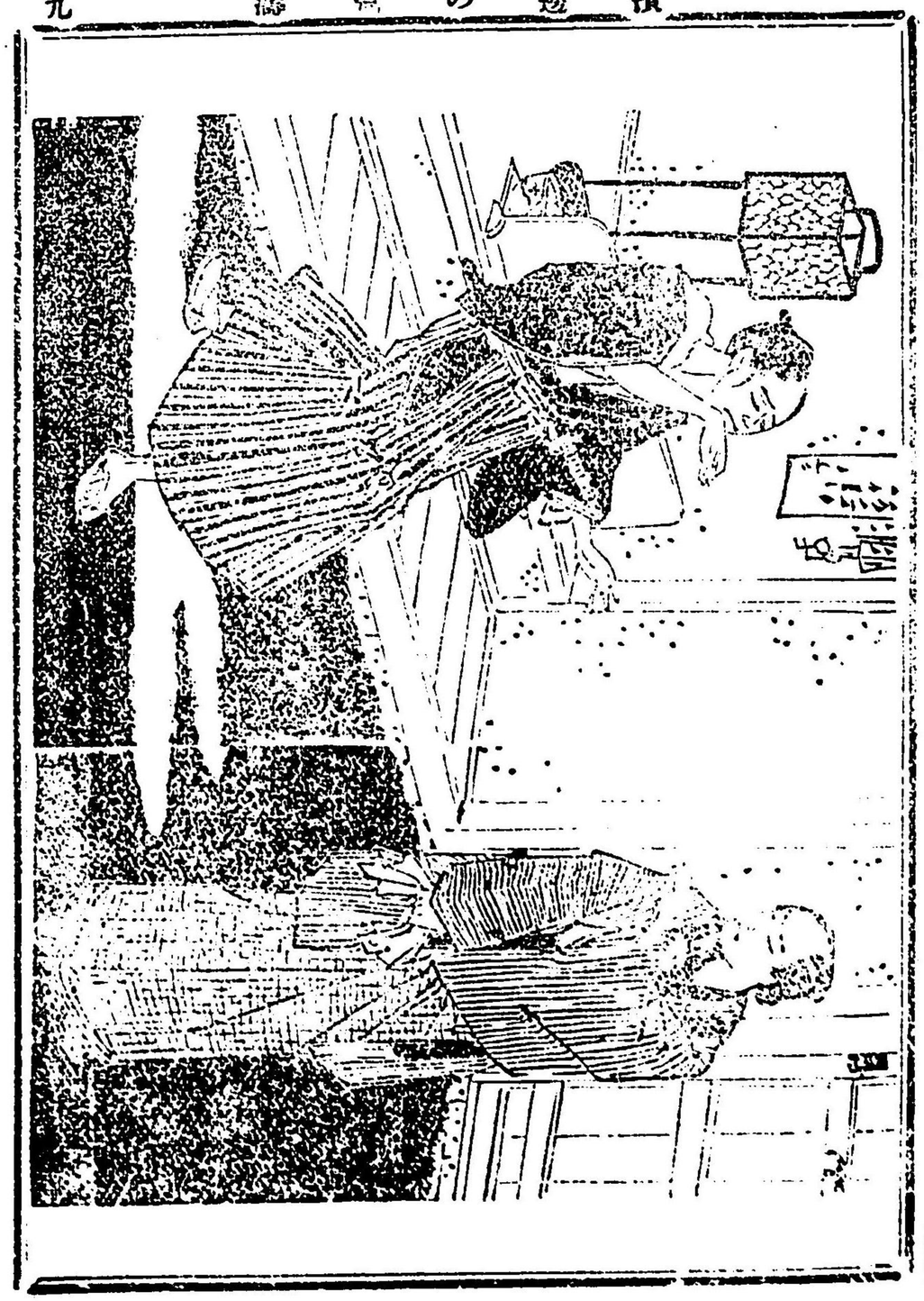
ち作事御用の人夫となり小屋ゑ入たる共後共河窪方へも來たらざるゆゑれ登代は思ひゑ提へかねて只鬱々として塞しまずふ作はふ登代の心を量り或日れ登代に思ひのたけを認めさせて作事小屋なる彌之助が許に赴きしが容易ゑ面會協ねば脚を空しく歸るのみ此事何時が掛役または計會の職人が聞き出たして機かなあらば彌之助ゑ告げ愚弄せんと思ふ折から今日の酒宴に酔ゑ乘して一個が云へば直くに傍から口を添へ寔ゑ彌之助い果報者よ絶治郎よと囃さるゝを正直一徹の彌之助なれば顔を赧らめ遜惑氣に共れは全く根もなき事私い左右河窪様へ共様な噂さが知れてはならぬ何卒戯言は止して下さゐと頭に制めて居たりけり

折から小家頭忠五郎が入り來たりしゆゑれ登代の噂も共れ限りにして止みはしたれど彌之助は最と心ならず私に壯の内にて思ふやう今仲間の者が右や左云つたを根もない事と云ひ消ては居るものゝ先頃かられ作どのがお嬢さんからの言傳だと云つて度々割な事も聞たが

共　三

七

素より眞個と思はれず非除眞個ね事ゑもせよ身分違ひな武家と職人萬一其様な噂が江湖へ



八立ては己が方よりも河羅樣の御名に係る事なればと心を勞めて居る折から疾くも誰の口から出たやら前刻の樣に仲間の閒風此うへはお作どのゝ逢つて篤と賀否を聞糺し先頃話した事が眞なら御娘樣へ御意見申し世上の沙汰を取消さねば此方の身分が卑いゆゑ誘ふた樣に思はれては親方へ對しても分疎なしと一徹に思ひ立つたるより根が正直の心から片時も落居る事ゝ出來ねど外へ出づるを暫く控せし工作中の規則なれば詮方なくも小家に飯りて枕ゝ就けども此事が心に懸りて眠られず疲れたる趣わがつて小家を出て徐々門口の邊へ來しに門番の侍士も宵に酒のありしと見え酩酊の狀にて臥しゐたり彌之助は門を出づるゝ好き首尾なりと思へども飯りの頃ゝ見咎られては反て不都合を來たさへし其れよりは寧ろ酩酊を幸ひ欺して門を出づるに如ずと傍へ立寄り搖起せば門番は眼をこすりながら彌之助の顏を打眺め是ゝ〳〵好男子の彌之助か今時分ゝ何の用だと云さへ口の巡らぬ樣子ゝ彌之助は低聲にて他の事ではありませぬが何を包しませう私の母は當御普請の職人ゝ參りませぬ前から床に就ゐたる大病ゝて一個の妹ゝ看病を托して置きはしたもこの四五日跡から每夜の樣ゝ惡ゐ夢見ゝ心がゝりと思ふ矢先へ宵のほど便所の邊りに立つて居たゝ正しく母の御ゆゑ設や凶事ではあるまいかと何うも心ゝ懸りませすゆゑ一寸往つて病氣をば見舞て參り度御座りますが堅い御門の出入をゞ潛と明けてはなりませぬゆゑ熟慮して御願るをば起しまものは不遠慮と思ひながらも妨げました遲くも二時も經は歸りますから一寸御通りなすつて下さゐませ其代りには明日は乞度御謝儀は致しませすると眞しかやに賴む辭を正當正直律義なる彌之介なれば門番も僞りなりとは毫も思はず誠しも親は大切な者然ういふ事なら今

夜だけは私は大日に見て貰から努めともに夜の明けぬうち辰らつしやれと仔細なく許して
呉しは天の與と欣ひ頭で出て行きけり

其四

不題彌之助は慕せしと云た登代の父利右衛門太夫と云るは世々秋田藩に五十石を賜り[illegible]
吟味役頭取を勤めたり當代の孝太夫は幼已に知命に近く先年同藩池田金八郎の娘を妻に迎
へ其間に出生したる女子は乃ちこれ登代なり然るに妻は産後の腦み終に治療の効もなく空し
くなつたる其後は男の手にて女子の成育は覺束なしと親族の者等が勧めにより郡代行征間
賛五郎が妹道乃と云へるを後妻に娶りしに道乃は繼しき顔をもせでふ登代を實子の如く寵
愛しふ登代もまた實乃母に仕るが如く其中垣も隔なく最と睦まじく暮しゐたり孝太夫は性
得潔白清廉の士なれば巧言令色鮮きを以て本分とし折頃執政岩崎準か君徳を時りて上を
蔑し下を虐げ我成に募るの風聲を聞と云へども渠は名にたふ古老の職なれば輕卒なる諫言
もなし難しと私に心を痛めつゝ人なき節は時々に妻子の者にも熱間せ歎の安危を憂へる折
から這回別殿を新築せんとの結搆にて多くの人夫を傭入れ晝夜を分ず工事を急ぐは當主富
丸君が御遊覽と稱すれども其實已が別邸ともなさんの計畫ある故にや大工泥工に至るま
で殘らず自分の手より支配し惑しも御掛定方へ千預させぬは甚ぞ不審に思ひはしたれど索
より當主を害せんとまで逆謀ある事い夢にもしらねば何卒して深い事實を探索んものをと
心を勞とる折に幸ひ娘ふ登代が何時のほどにか植木職彌之助へ戀慕なし其文使ひを下女
のふさくに托する處を立聞きしゆゑ工事の樣子を聞き出だすには之れぞ屈竟の事成けると

一日竊にお作を喚び彌之助ふ登代の事を糺問した後恁々成と吩咐しよれさくはれ登代へ彌
之助を排約せんとしたりし事の孝太夫の耳ゑ入りしを駭くものからまた今更に論ずるなく只
管不呼を暗託入るのみ然れども怨々仕遂げたならば罪を赦してやるべしとの諭もあれば亦
諾なし難てれ登代より彌之助へ送る文を認めさせ日の暮るゝを待ちて屋敷を出で背面場へ
と赴く途中往來途絶し絲兵所の邊り近くまで來たりし折から向ふの方より四五人の仲間が
孰れも酩酊したりしと見る蹌踉ながらの出會頭ふ作を見るより喝き合ひ傍へ立寄り袂を插
へ。夜暝では緊と分らないが淫浮者のふり想な當世面の中年增斯んな淫しい往還を一人で
何處へ出懸けるのだと一人が云へば他の者もふ作を中に取卷て。微酔機嫌ゑ何も彼も浮氣
〳〵として堪らないが厥も骨も中々剛さうな塩五人や六人引受けても酌別陣ゑなるめへか
ら已等の木刀を後生ざ一本うけて呉んなと賭託るを背す四五人が手取足取り押へつけ既に
手込めにせんとする最とも危き其折しも小屋を抜け出で河濱の邸へ行かんと來蹴りたる彼
彌之助が測らずも通り合して夫れと見るより卒然に傍なる仲間が背後に挾たる木刀抜き取
りふ作が上に乗かゝらんと立噪ぎ居る一個の男を掴りつくれば不意に駭き悪視驚い手向ひ
もせで西と東へ遁げ散つたり

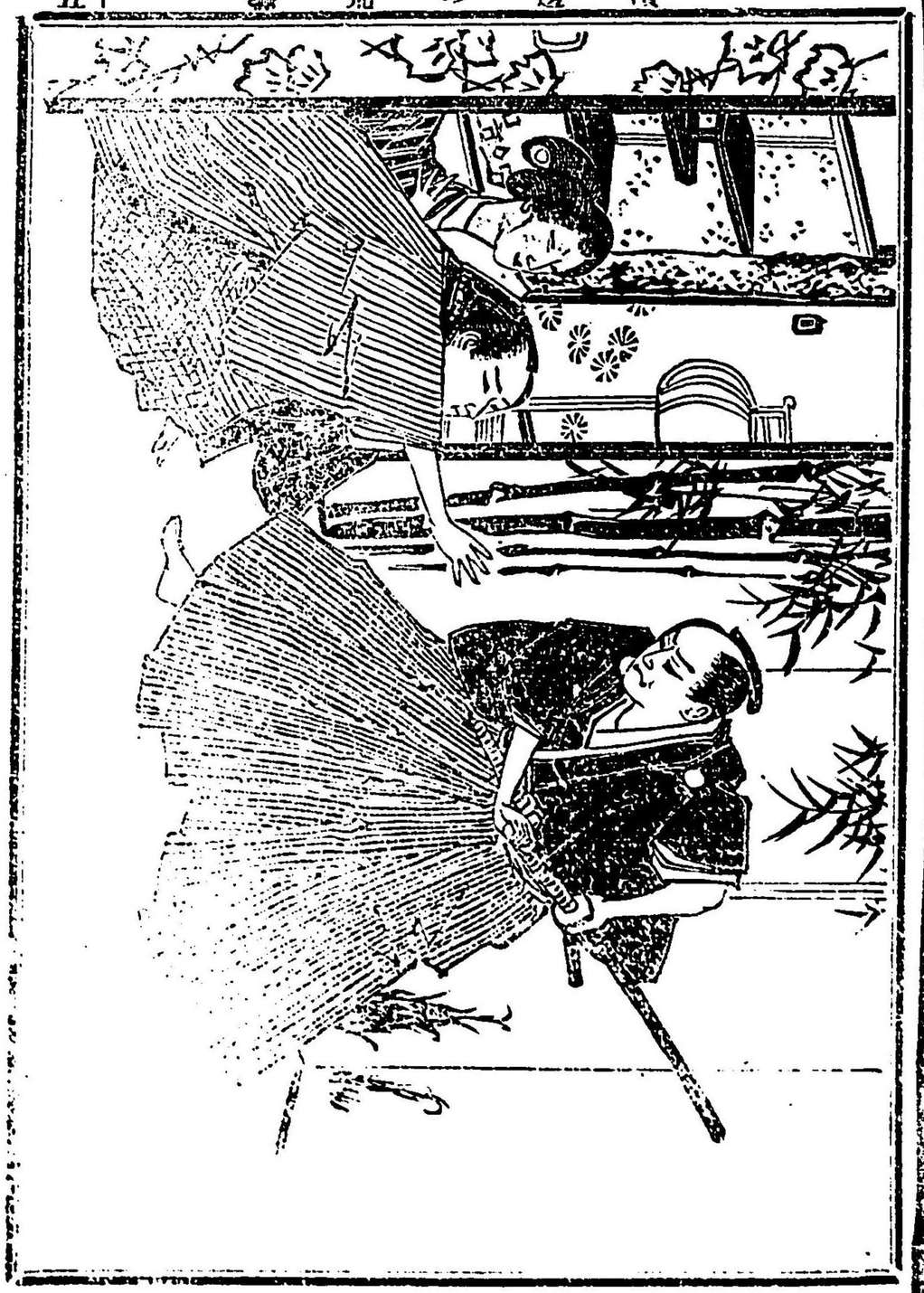
其五

彌之助は神間を追ッ撥して傍に寄り未だ夜か明けたと云ふではないが平常からして寂寞路
筋なれ人の一人歩行を見込み淫せうとは悪い奴等何處まで行きなさるのか知らないが此先
十
一とても氣を注けて努そ油斷をさつしやるなと云ふ聲聞くより下女れ作は然う云ふ郎公は彌

之助様かと問はれて此方もハッと駭きオ、其壁はおさくどの無提燈にて大膽な和女は何處へ行く氣だと云へばおさくは武藤になり何處へと云つて今時分斯んな所を行いも度々郎公よ話をしたお嬢さまの一件よて先ごろから七八度音信小家まで往つては見たれど親兄弟でも對面は許されぬとの厳しい中ゆえ密ごろなくなりはしたれどお嬢様は其れが爲めお食もすゝまず床よ就きふら〳〵病よ日那様やまた奥様も深い様子を御存じないので御心配妾も氣が氣でならないゆえ如何なんなりとして郎公よ逢ひ一寸なりともお嬢様の傍まで來てさへ貰うたうへ氣慰め文句を聞かせたなら其首は未通女の事なれば安神をして病氣も癒りて旦那様や奥様の御心配もあるまひと思つたので郎公を連れて來るとお嬢様へお話申てお庭口から密と微行で出かけて來たが測らず今の災難に妾は如何なる事もやと氣も魂も消入る心地恰好郎公が通り懸つて救けて下さつたも主人を思ふ妾か忠義に神佛が守護て下さる事でわらうが爰で逢ふたは丁度幸ひ直ぐに是からお邸へ一緒に往つて下さいと道へば彌之助打點頭「其れは私しも望處サト云ふ譯は先ごろから厚しい私へお嬢さまから軈しい文を下さるゝのは嬉しいやうだが丁簡違ひ素より武家よは堅い作法のあるとは常から聞いてもあるし殊よは一粒種のお嬢様が亦しい出入の職人と共様な浮名が立つた時には第一親公の御名の疵また私が身も旦那様の御立腹をうけ芝居でやる御手討なぞを興つた時よは一人の母や妹の歎きと氣が注いて見りや怖くて堪らず今日も小屋よて仲間の者が誰ぞとなく れ嬢さまの噂で私を悪非のは誰ぞよある人の口に戸の建てられぬ無實の汚名就中今度は大切なる職業を擔負嫁ぎ中に斯んな事が設御家老様の耳よ入つては私ばかりか河窪様の御身の大事共れゆゑ今夜門番へ親の病氣と偽つて稍く小家を抜け出したはに邸へ行きれ嬢さまへ蔦と御意見申さうと決心をして出かけて來たが和女も何卒此周旋は向後斷念止て下さいお嬢さまが大切なら其親公の旦那様やまた奥様は特更大切和女の忠義と思ふのは筋違ひな忠義だから今夜ゝ私と俱々にれ嬢さまへ懇篤な御意見申すが眞個の忠義今の様よ悪根の手込めに遭はうとしられたは道ならぬ周旋する是れも主人の罰だらうから能く分別をするがいゝと思ひがけなき彌之助の辭にお作も理の當然成ほど郎公のいふ通り恐い事とは知りながらッィ浮架〳〵と今日までは此ふ使を爲て居たれど向後は俱々に御意見申すが却つて忠義「其れでは得心して下さるか斯いふうちも心が急くから直ぐにお前が案内にて「些度も早うと下女お作は前に立つゝ元來し路へ脚を疾めて急ぎ行

其六

荒れ作とゝもに彌之助は纏て河窪の邸に來たり庭口の切扉より内に入れば座敷を離れし一室の障子に灯影の撮るは娘お登代が人さつ居室よとお作が辭よ彌之助は了得よ足慓はれ進み海かぬるをれ作は手を採り甲夜は旦那は御番の御不在奥様はまだ御不快にて毎の御居室にれ臥ゆゑれ嬢様の御座敷とは離てあるから大丈夫特には怪い譯でもなく俱々御意見をする事なれば非除後日よ知たりともれ歡びころなされ御立腹なさる筋はない切何越まて來ゐながら衛とてはまた度胸のないと勝されて彌之助も成ほど然うと微行よ障子の傍まで打連行くに作れはやをら障子よ手をかけれ嬢様〳〵後人ゝれ臨ですから一寸とお音を遊ばしませと十三披く障子の其内にれ登代にあらで父孝太夫が最厳しく座ゐたり緒の意外にれ作よりも彌



之助は仰天して通るにも通られず顔色變り茫然と差俯ば孝太夫は刀片手に睨立て直し「恁る事もあらんかと御番と唱へ家を出で其方ともに油斷をさせ置き前科如何なしたるうへ娘を糺し子細い听きぬ只憎きは彌之助なり汝先代の彌七以來吾郎へ出入し親子ともに吾般仁慈を垂け置し其恩義をば打忘れ主人に齎一吾娘と密道なすとは言語道斷今夜忍んで參りしころ天罰なれと諦めて速かに首を渡すべしまた周旋の下女お作も俱に免れぬ刀の倩武家の作法を犯しゝまば元來覺悟のうへなるべし不屈者メと以での外なる主個の憤怒に彌之助は膝をそゝませ聲ふるはせ「其れや旦那樣御無理で御座りますお嬢樣と不義を致す位なら今夜嚴しい門を脱けて熊々御意見には參りませぬ其仔細は私しより此お作どのが能く御存じ植木職人の身しい身でも我等親子が旦那樣に隷し御恩は忘れませぬば私心得違なお嬢樣へ篤と御意見申さうと思ひ過ごして夜中に來たゆえ御疑惑を招いたも無理なられど不義密通をした抔とい此身に覺えのない濡衣れ嫌さまもまた只の一度出會た中でもない私と不義をした抔と仰しやるのは從來度々下さつたお文の返翰を爲ないのを怨みに思つての嘘言かコレ作どの私が彼是いふまでもなし詳細事を知つてゐる和女の口から旦那樣へ此分疎をして下さいと道へばおさくも手を突いて只今彌之助が申し升る通り實は先頃よりお嬢樣が彌之助へ文を賜りし事いれど手にだに觸ず差戻し今晩もまた密かに文遣ひの途中にて是れより前に記したる縫の体爲を述べ了り恁る次第ゆゑ彌之助に於ては毫ほども不義の行爲は御座りませねば何卒今夜の儀は只管に御容赦なされて下さりませとれろ〳〵に述たりけり

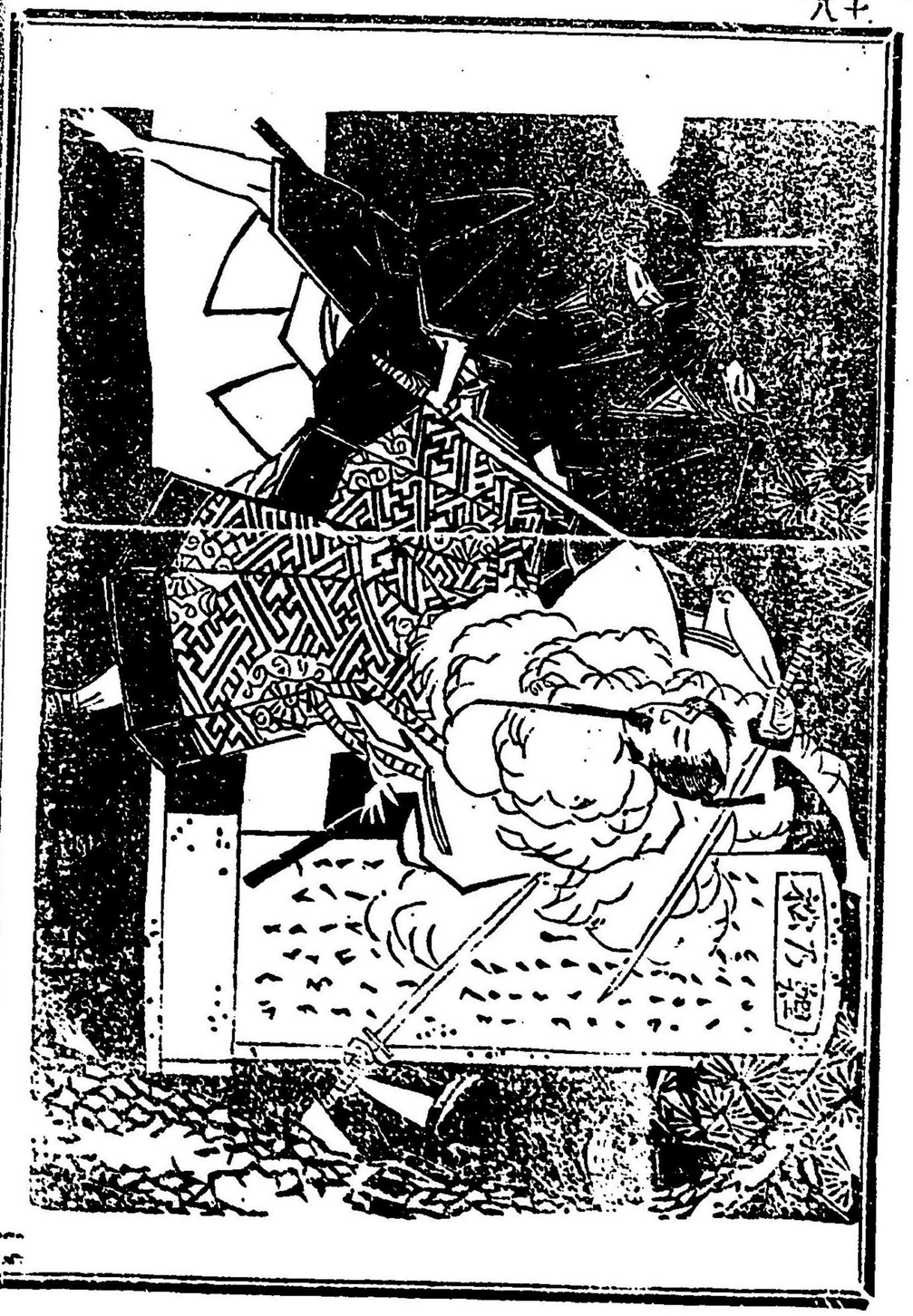
登時河内孝太夫はお作の勘解る仔細を聞くより打點頭て容体を正し「幼年の頃より吾邸に出入りし父彌七は以て篤實なる性根の者とは存せしかど尋思の外と云ふ詮言特には若き身のよゆへとの吾想像より不義者と思ひ詰しは過りなり實は娘も其如く道ふ背きて絶書は送れど一度も返翰をした事なき堅固の性に彌まして父母に心を勞さする病氣ごとではなりたるなりと賠詫る辭は確言ならねど何も實否を探り見て為め汝の來たるを待ちゐしなり今か作より過一に聽いて疑念は全く散れ堅固の性根を見拔く上は今更めて孝太夫が養子となし遲ては娘と配偶べし假に父子の詐せんか作準備と吩咐け遣り其場を斥け此へ〳〵と以前に變りし孝太夫の辭に彌之助いよ〳〵惑れ冥加に餘る仰せなれども御承知の通り私しには母と妹が御座りまそれば一應相談を致した後ゑ其御返事をと道ふをも峻たず否々其儀ならば心配致すな母は勿論妹にも承諾する樣小可より說論そべし安神せよと云ふ折からにか作が遲ぶ銚子土器熨斗昆布兩人が中に列べつゝ其身ゝ次へ立つて行く跡ゑ彌之助もぢ〳〵ど如何して宜いか吾身て吾身の心一ッを定めかね只茫然たる景狀を孝太夫は打瞰遣りて「卒彌之助杯言せんと土器把つて自分ゑ飲み干し三寶に載せ差出だされ今は辭もなり難ければ後日に如何とか拒絶の術もあらんと震慄ながらも謹く之れを手ゑ受けて緩の門式を濟ましゝは宛がら夢の心地せり聽て幸太夫は銚子土器を取片づけて聲を低め斯く父子の盞を濟ましたうへは渾ての事ゑ遠慮は入らず何事ゑまれ包み藏さず互ひゑ語合ふとうよけれ其れゑ就き且差當り尋問ひ度は別殿の工事なり聞く處によれば人夫の者は假令如何なる事故あり

ても場外へ出づるを禁したるよし扨は亦如何なる仔細ゑよりてか其方の職頭と聞きし彼鹿田屋忠五郎ゑ老職岩崎生が出入の者とか定めて事實は存玄てをるべし他言は致さぬ此孝太夫に包まず語聞かせよかしと問はれてギックリ彌之助は再ゑ父子の盞を重ひて侑めし所存の底は工事の次第を聞き出ださんとの深き巧計でありたる事か爾ればとて親兄弟へも他言せまじと誓し工事を恁々なりと咀られもせず告ずば飯れぬ此場の仕調進退維に谷りしかと正濱直一徹の彌之助は須臾途方に暮ゐしが心に決せし事やありけむ稍くにして顏を仰け「親妻邊子ゑも詰まゑと神文書た工事の標樣道へば忽ち血を吐いて奈落地獄へ墮るか知らぬと誓をした扇樣へ婿がお覽に入れる品あり之を閲玉へと差出をは新染中なる別殿の繪圖へ微細ゑ符牒を以て彼の八ッ橋の破碎器械を示しゝ品にてありければ孝太夫は餘りの事ゑ只吐息維のぐゞかりなり

荒

其八

岩崎肇か逆謀を始めて識つたる孝太夫は駭く色目を故と藏みて此企圖のある事は先頃竊に聞出せしものから容易ならざる一大事と今日まで猶豫致したるが其方の誠忠により此逆謀の確証を得たるは諄々も滿足なり其方もまた一旦は忠臣道等の爲めに脅迫され此都普請に係りしとは云へ今繪圖面を差出したに其功にめで遣はの罪は出當が乾度執成得させん何此後ゑも心注さし事あらば密々申し聞かせよかしと道ふ折からゑ床の室の時辰は丑刻を報じしゑぞ彌之助は小家への皈り必に懸れば暇を告げ驚て河岸の邸を出てしは之れゑ互ゑ一十七生の別ところは知れたれ抑も甲夜の事ゝ渾て孝太夫が計策にて普請小家の内實を聞き出だ



さん爲めなりしが其權謀曠しからで奸臣岩崎が逆意の底に搜り出だしたれば元來他聞を憚る儀なれば彌之助に尋問の間は家族の者を別間に斥け置しゆゑ工事の密謀を彌之助より聞識りしは主個幸太夫一人なれば彌之助を返した跡にて一個熟々思惟みるに所謂逆意を企つるうへからは豈夫擧一人の計畫ならず多少の同類ありての事と覺ゆれば親族縁者たりとも此一條は洩らされず如かず江戸邸に赴きて富丸君の御後見たる鳩翁公(分地某の領主)へ密告し同邸詰なる老職松倉丹後殿とも協議し惡人輩の根を斷つころよけれ今彌之助が物語に

濱邊の荒濤

ては工事の落成は速くも未だ三が月を經ぬべしとあれば只速かに江戸表へ注進するこそ上策ならめと忠義に凝つたる幸太夫は深き思慮なく妻子の者とまた妻の兄なる淀間貢五郎へ至急に思起事ありて京坂筋へ赴くとばかりの遺書を認め旅裝もろこ〳〵に妻子の來らぬ其うちと切屋口より立退きしを家族は更に知らざりけり恁て河筋は殺を急ぎて基下恐頭なる鯉の松の傍に來たりし頃は稍寅刻にも近かりしが今四五丁も走みなば怨を蒙ふに便なるべしとあやなき夜をば冒して行く鯉の松の碑の側より各々頭巾に面を包みし二人の賊兒顯はれ出で帶せし刀を拔くより速く物をも云はで幸太夫へ切つてかゝりし狼藉に不意をうたれて駭くものから碑を小樹に執り左右に氣配同じく刀を拔きあはせつゝ寄らば切らんと体を構ぬ(因曰此鯉の松と云るは往時天正年間當城の外壕へ其長丈に近き大鯉の屍体泛しを里人獲得て此地に埋めしが其側らに樹し松の僅一年にして巨大の幹となりしゆゑ

某好事家が此事を聞き當時一基の碑を建て鯉の松と號しなりとか)

登時河窪幸太夫は慣れる聲をふり立て「何者なれば埋不尽に行途を妨げ狼藉なすぞ必定盜賊混剝なるべし命知らずの奴們かなと云はせも果ず監視兒はから〳〵と打笑ひ「ヤア盜賊呼はり不穩なり吾々は汝と同藩而も御公味方に在る村瀬傳藏「前田左右七「また一人は御普請方高木判藏を知ざるかと道ふよ河窪いよ〳〵驚き「原來は奸盜岩崎の徒黨の者にてあるしよな此に待受け居しからには吾を切害なさんず所存か「云ふよや迫ふ吾々が謀計を知つたる汝なれば大望成就の血祭に先其の首を申し受くると云ふうちよ早作藏は問答無益と切つて懸れば心得たりと幸太夫は丁と受とめ火花を散し暫時のほどは三個を相手に相せず撓まず戰ひ居たり元來幸太夫は一刀流の奥義を極め一當中よ聞こゆる達人斯る鼠輩の三個四個はものゝ數とも思はねば太刀そし亂れず前に顯れ後に隱るゝ出沒自在三人とも薄傷を負ひ今は危ふくなつたる折しも何處よりか颯と音して飛び來る彈丸幸太夫が胸板射貫き剩れる丸は鯉の松の幹にぞ趾まりぬる憾べし河窪は宛も忠義膽の士なれど奸賊輩が毒刃の下に斃されまた惜しき事なりかし折から樹木の蔭よりして右手に鉄砲左手には含黐携へ徐々と立出る岩崎肇は見るより三個は聲齊一「思ひがけなや御家老よは再は後より此所へ「如何にも甲夜各位を招き逐一申上たる如く仲間共が途中に於て酒興に乘じ婦人を捉へ戲れし折拾ひし久は正しく河窪の娘より忠五郎の部屋よ在る植木職人彌之助へ送る艶書なり察する處密通なし往來もると推せしゆ名他の職人等と謀りて彼一大事の建築を明して委し忠五郎の下方なれば捨置れず早速小屋を探索さしゝよ果して彌之助の行方知ず小屋門番の申し立てを聞くに母の病氣と僞りて脫け出だしたるものならんと具に動靜を索りしものから綜あら立ては世俗よ云ふ毛を吹き疾をもとむる憂ひと竊に各々ト謀し合せ河窪方を窺はしゝに案の如く彌之助ありて幸太夫と密談のうへ屋敷を出てし其跡より旅裝を調へ孝太夫が出立したるは彼の彌之助が普請の密事を告たるゆへ江戸御在番の鳩翁公へ注進なさん爲なるべしと思へゞ猶豫ゝなり難く各位へは孝太夫暗殺の儀を御依賴申し吾はまた彌之助を直よ召捕り忠五郎へ詮議の事を委ね置けど但心安からぬは暗殺の一條にして河窪ころ當藩よて人に知られし劍客なれば設仕損なば膺を嚙むとも追ばぬ大事と存ずるゆ名後より參り樹蔭にありて曖ながらも月の光りに覘ひを見定め射つて發ちし只一發にて了得の武士も晩くも往生是れよて心に懸る雲なし各位勞をかけ申したと道ひつゝ手に持つ含煙よて幸太夫が死骸を見瞰り最と心地よげに微笑しゐたり

濱邊の荒藻

其十

有恁べしとは夢知らか河窪方にては妻と娘が彌之助を尋問するうちは決して座敷へ來る事無用と堅く禁められし事なれば幸太夫が裏口より抜け出でし事を更に知らず左右するうち東天紅と曉告る鶏の音に家内の者は不審み叱らるゝかは知らねども密と御動靜を窺ひ見よと母の醉よ娘お登代は徐々座敷へ來て覗くに内には三人の影だに見ゑねば這は心附ずと隔の襖を押披て四邊を見るよ父が机の上よある該遺書を見認めしゆ名打驚く事大方ならず聲高ゝよ母を呼び樣子を告げ母子俱々涙下して早速兄貴五郎を迎へ何よもせよ深き仔細のある事なるべし明けなば病氣の趣きに屆けを出すべしと推問は頓て歸宅したる折もころあれ以前同家の若黨なりし星野幸藏と云へる者息を切つて駈け來り鯉の松の邊に於て何者の所

爲よか幸太夫を切害し有しを城内より捕亡方か人夫を連來り死骸を舁き皈りし旨を告げたるにぞ母子は夢よ醒見し心地餘りの事よ涙も出ず茫然として居たりしが幸藏は涙を拭ひ吾偶へ一應御城内へ參り越し然と實否を聞き合しへうへ復度御注進をアわくべしと引返し行折俄頃よ外面よ人足繁く上使として用人國富角太郎案内もなく打通れば思ひがけなき上の使に泣きはらしたる眼を拭ひながら幸太夫の未亡人道乃ハ恭々しく是を迎へて上座に就かせ作法案さず禮をなせば國富は已が名を角臂張て嚴しく「然僞の樣子は幸太夫の定て知りたるならんが河筌幸太夫事御文庫金五百兩を盜み逐電の途中鯉の松の邊に於て何者の爲よか切害されしは爾よ出でヘ爾に皈るべれば追て御沙汰あるまで門戸を閉ぢ謹慎罷りあるべしとの上意なりと寢耳へ水の空賊沙汰乾へぬ袖にまた重なる涙の種の濡れ衣よ道乃は須臾返答だになくより外の事なきは道理切て哀れなり

其十一

話頭轉頭植木屋彌之助は義理に蔓まれ只得も普請の密事を河筌へ明して繪圖まで渡しヘは死を決たる心の覺悟爾れ共一旦母と妹に暇乞をと小屋へは皈らず已が住家へ赴かんとする途中に於て岩崎の配下の武士よ捕られ繩にかけられ小屋棟梁なる鹿田屋忠五郎へ引渡しとなりしが有恁べしとは思ひかけねば有繋に心安からで如何なる事よなるやらんと胸騒けぞ詮術なければ引るヘ儘よ工事小屋なる材木置場の内へ繋がれ居たり然て全く夜も明けて就業を報ずる柝の音に職夫們は持場持場へ出向て各組の小屋の内にも人影なければ忠五郎は

九郎藏と云ふ乾兒を連れ此所へ入り來る姿を見るより彌之助は差俯向辭もなくて居たりしが忠五郎は丸郎藏よ戸締させて傍に寄り「ヤイ彌之助汝は今度の御普請中に他出を禁められた事また御普請の模樣をば他言はせぬと誓文へ血判したるを忘れたか汝は親父が死んで以來職業が閑にて母親や妹の手前も氣兼かちだと歎いて居たのを聞いたゆゑ過分な工手賃で傭ひあげ正直ものゞと思へばこそ御家老から御紙みわりし大事の場所を委してある人夫の内へ加て置き首尾能御普請成就のうへにて母子樂々世を送れるやう御家老からは御褒美を下さると云ふ御内意は詳細話て置たるよ盡る御恩を打忘れ規則を破つて門を脱出で那の河筌のお國樣と不義をはたらき剰さい大事の普請を幸太夫へ明告たでわろうがな人間るまいと思つても御家老よは疾御存じ吟味をしろと吾が方へ直ぐ引渡しになつたのだサア彌之助昨夜小屋をば脱け出した後河筌の廊に入つて何を饒舌た明白に云つてしまへ嘗情張と汝計りか親や妹の爲めにもなるまい何うせ犯した罪ある身体苦痛せぬうち速く云へ丸「コレ彌之助今親分が云つた通り御家老の方にやア探索が行屆いてゐる此詮議知らぬと云つても濟無ェから其れよりやア眞直に斯いふ譯で斯ですと云つてしめへば親分から御家老樣へ御賠詫をして れ前の罪も輕くなり母親や妹も安心素直よ仔細を話をかいゝぜと猫撫聲にて問ひかけたり

其十二

死ぬる覺期も今更に胸轟さて彌之助は大事を明した其人は奸徒の爲よ鯉の松の露と消よし事を知らねば設卒爾に陳述ては假よも親子の盞を酌替したる孝太夫が忽ち憂目に遭ふ事

あらん所詮死をると決し、身なれば責殺さるゝも何條厭ふべきと漸く顔をふりあげて御恩となつた親分へ濟まない事とは知りながら頻に母が慈しくなり規則を破つて出かけし途中河窪樣の召婢おさくどのが惡漢等よ手込にさるゝ難義の場見かねて飛込み惡漢等を追散したうへ樣子を聞けばおさくどのさまから云々だと思ひがけない話ゆゑ堅く拒絶御意見を申して呉ろと云ひながら橘家の御門までは送つて行きましたれど御邸の内へとて這入ぬ私が何んて御普請の事などを申しませう御法を破つた罪は覿面綁縛られて此通り乾盆にまで知れましたからは何卒御存分よなされて下さりませ決して御怨みとは存ぜませぬと道へば九郎藏眼よ角立て「コレサ彌之助其樣な白化くれた事を云はず斯々した輝が、あつてッヒ恁々よ申しましたと云つてしまめへば濟む事ゞ我やァ乾盆はしめ此九郎藏を馬鹿に爲て嘯着氣か「如何して我が乾盆や兄貴を馬鹿に爲ませうぞ「馬鹿に爲なけりや痛苦せず實は斯ゞと吐かして爲まへ夫れぢやと云つて其事を「云ずば斯して吐かせて見せると傍にあり合ふ天秤棒よて骨も碎けと打もゆれで苦と叫びて苦むを忠五郎は警度見遣り「ヤイ彌之助其痛苦をさせぬ樣と優しく云へば宜事にして佛性なる吾等を涙よかけて欺かふとは面に似合ぬ太い野郎だ吐かさよや飽まで吐かす樣に器械よかけて云はせて見せると薪ふりあげて彌之助が額の邊を丁と打ば忽ち四五寸斜に切れ血い迸しつて宛然よ顔も衣類も時ならぬ輝血を暴せり恁る責苦も覺悟の彌之助打れ搗れ尋られゞ知らぬ知らぬと道ふ聲も辛くにして吐くのとならば元來短慮の忠五郎九郎藏に眼配して到底生ては置れぬ奴直ぐに吐かさぬ膜癒に彼處の堀へ吊ふろし弄殺しにしてくれんと慘忍猛惡極りなき辭の尾よ付く腹の九郎藏オ、合點と立寄て苦痛よ息も絶々なる彌之助の衣類を剝取り裸體とし慈悲用捨もあら縄縛て弄々縛り小屋の梁へグッと吊上げ吊下せば忠五郎は佩たる一刀すらりと引拔き右手に携へ徐しうは傍へ歩みより是れでも云はぬかサァ抜かせと所厭はず滅多切り苦しき中よも彌之助は兩の眼を赫と開き勿体なくも殿樣を殺さんとする大惡人の已等ゆゑよ慈悲を知らぬは素より覺悟を爲て居たれど餘りと云は非道な責め苦人よ怨のある者かない者かればいてゐろと宛も恐ろしく云ふが此世の餘波にて終には弄り殺されしは無慚といふも憐なり

濱邊の荒濤

濱邊の城下を四五丁離れて神谷村と云へる所あり當村靈頗よ軒傾き壁破れたる荒屋は彼の植木師彌之助が住居なるが母のおらくゝ去年の暮より重きといふにはあらねども病病よ臥て起もあがらず睦月の末なり彌之助は御用普請の爲め御別殿の建築小家よ寝食し吾家へとては皈ぬ妹お辰が病人の看護に如才なきものから元來石で手詰し如き貧苦暮しの其うへに醫師への謝禮藥の潤飼くれとなき入費勝よて彌之助が工料の内なりとて鹿田屋より廻し來たる賃錢耳にては兩個の口を糊するにも足らねばお辰は病人を介抱の片手間に洗濯物や縫針に聊かの賃を得活計の足しとなし居たり今日も終日母親の看護を勤め夜仕事も了て母が寐所の蒲團の端に脚を伸し暫く勞を憩んとすれど頻に胸噪きして眠れず母の病兄の事など思ひけし枕下なる行燈の灯は窓洩る風の吹入る度消なんとしてまた明を射す破れ屏風の二陰を誰やら居る氣息に駭きながら枕を搔け熟々見れば思ひさや兄彌之助が何時の程にか立五十三皈り來て座を体なればチャ兄さんかと道はんとすれど宛然口を閉ぢられし如く物いふ事も

ならざれば起上らんとするよ身動きならず切ては母に知さんと焦れど五體はすくみて自由を得ず此時兄は潸然たる涙の顔を稍うあげ父が死なれた其後は私よ腕がないために母親はじめ妹よまで苦勞を掛けた不孝者今度の御普請が成就したなら両個に安心させませうと思ふた事も奈麻與美の甲斐なき別れとなりまさしたが向後は吾よ代つて和女は母へ孝養頼む斯る憂目も殿様の御身に係る大事と知りつゝ母公を安心させやうと思ひしより心得違ひの天罰が忽ち酬ゆる地獄の責其苦も厭ひはなけれども母公の事心よ懸れば和女に諄々頼むぞやと云ひつゝ再も泣沈む兄の動靜を見聞よつけれ辰は彌よ心ならねば思きって壁をあげ其れは何ゆゑ如何云ふ譯でと身を焦りつゝ起上り兄の傍へ行かんとすれば是れ元南柯の一夢にして其身は依然母の傍に臥して身體びつしより冷汗に鳴海の單衣二重にまはせし細帶も解るばかりに胸轟きぬ

其十四

眼は覺めながら夢とし思はぬまでよあり〳〵と兄の姿を看しのみか聞にし事さへ忘れもやらねばれ辰は心安からず夜明けなば鹿田屋許赴きて様子を聞かんと漸くよ復度枕よ就きは爲たれど寐られぬ耳へ早晩よ聞こゆる鷄の聲よ驚き起上りて朝餉の准備母が眼覺めにつたなら夢の顛末を詳細告げ城下へ行んと竈の下へ火を焚つけて居る處へ彌之助と同じ植木職の卯太郎と云るが息急來りお辰どの宿に居らるかサア大變だ〳〵と聲かけながら内に入ゞ爾なきざよ左思右思案じ續けし折ならゆゑハット思ひて立ち出るお辰の姿を看るよりも卯太郎は眼を渾ひながら「コレれ辰坊必ず喫驚はせやいだが兄彌之助は昨夜普請小屋に於て切られて死んだサヽヽヽ其仰天は道理ざが且心を鎮めて聞くがよい昔て御前も知る通り此度御別殿の御普請に私も職業よ行等であつたが生憎持病の癇氣が起り所詮働も出來ない事ゆゑ拒把云つて宅には宅たれど此節は至痛したので人夫の御用を頼み度と昨夜鹿田屋乾盃の宅へ往つたよ忠五郎様は不在ゆゑ邪の九郎藏へ委細を頼み土產の印と菓子代よ袂に入れたる露金の目方は僅少な愛想であつたが重い効能よ逐つたものか平常は腹の九郎藏から竊に聞いた彌之助の事虛か實か知らないが何時の程よか河筋のお嬢様と通じ合御普請中は親子でさへ對面出來ず門外へは堅く出られぬ規則を破り其れ嬢様よ逢ひよ往つた事か御家老様の御耳に入つたとやらにて他の職人への懲戒よ重き罪科よ處る様よと嚴しい御沙汰に詮方なく今朝親分と吾が手よて憫然だが殺したうへ死體は小屋に三日間曝して他の職人へ嚴い規則を見せてあるが聞けば彌之助の母親は長い痴氣で居るとの事斯んな非業に死んだと聞いたら病病の障になるであらう然し到底は知れる事ゆゑ徐があつたらお前から報知てやつて斷念めさせよ又其跡へは親分へ談じお前を加へる事にしやうと信切らしう話したゆゑ肝潰れるまで驚いて顏を見るさへ恐ろしく暇乞さへ疎卒に宅へ歸つて直ぐに此事知らせに來様と思つたなれ共何んだか夜道は薄氣味惡く其れゆゑ鴉のカアを聞と其まゝ駈出し飛んで來たァヽ好人であつさのよ心からとは云ひながら非業な最期を爲た事たと涙をつまらせて飽迫あげたる卯太郎が話におたつい心消え絶入る計り泣倒るゝ屋風の蔭にも先刻より様子を聞きしか母おらくは病苦を忘れワッと聲あげ正体更よなかりしは道理切てぞ哀れなり

其十五

話頭復　題單表河達幸太夫は妻道乃は良人が非業の最期を聞き胸且潰るゝ折もころあれ上使として國富角太郎か入來り良人幸太夫が御文庫金五百兩を奪ひ逐電したるには家族の者にも追て御沙汰あるまでは謹慎を仰附らるゝ云々との嚴命なるにぞ母も娘も今更に只伏況み居たりしが上意を傳へて角太郎が歸城なしたる其跡へ實否を聞んと城中へ赴きし星野幸藏が立歸りて道る樣百般探索致しゝなれど何分事實は譯無禍れども索より潔白なる旦那樣が平生の御氣質御文庫金を盗抔とは全く讒者の所爲なるべし然それば旦那を暗殺したるも

荒藩

全く其奸徒の同類ゴて近時風聲ある如く御家を横領せんとする者の惡謀なられ此上は逆反の輩を探索して旦那樣が盗賊の汚名を雪ぎ玉ふが專一成べしと歎きゴ暮て正体なき道乃れ

三十一

發代を勸り慰め再てあるべきにあらざれば死骸引取りの儀を政廳へ願出でしゴ怪別の御憐愍を以て死骸は妻子へ引渡さるゝと雖も公然葬送を營む儀は成相ずとの沙汰なりしゆゑ蓮んで御受を申し贄五郎は死骸ゴ引添ひ歸邸せしにぞ一目看るより妻と子は疑り果たる死骸

に繼り他眼も恥ず歎き居たり贊五郎は両人を説諭し其夜假に香華院へ送り埋葬し翌日より
は上の御沙汰を如何有んと待つ折から其八日目に至り寂内を乞ふて入り來たるは家老岩崎
肇なれば妻子は駭き一室よ請じ羅應大方ならざりしに岩崎は席を更め偖御内々遺回は幸太
夫殿不慮の次第愁傷お察し申すなり平生談白篤實の聞ゆある河窪生が意外の挙動ありたる
い如何にも不審千萬なれば察そる處幸太夫殿に遺極ある者の所爲ならんと小司疾くも推せ
しものから何分議論紛々にて其家名を斷絶させ家族へ追放を仰付けらるゝが至當ならんと
申し出づる者の多き爲め小司が議論更に立たず不日御沙汰あるべし重々の不幸よて寔に當
惑もあるならんが何事も時節と諦め旦く歎きを禁められよと已が惡事を色にも出さず陽よ
飾る仁慈の辭大姦忠に似たるの古語は斯る比といふなるべし

其十六

己が逆意を洩れ听いたる河窪なれば活ては置かじと同志とゝもに斬殺なしゝ幸太夫の許よ
來て何故肇が斯く懇切に勸るかと索るよ未だ岩崎が先君左近將監の妹花子と婚儀整はゝる
前笹間贊五郎の妹なる道乃に深く眷戀し何卒して宿の妻に迎へ取らんと既に某人へ媒妁の
事までも休賜置し折から亡君の命よより花子を降して其身の妻と定められ太く一藩よ面目
を施しは爲たれど左右に道乃が事は忘れやらでありしち緑あつて河窪幸太夫の後妻よ嫁
しとの事を聞き宛然掌中の珠を奪はれし心地したれど亦今頃に只得と念諦らめ其後は花子
との中睦ましく謀反の原なる幾之助と云ふ男子をさへ設けしほどなるが幸太夫を切害して
より未亡人道乃を慕ふの念復度起り盛は少し過ぎたれど色香の失せぬ晩櫻手折つて眺にせ
んものをと初七日の經つを竣ち吊慰を假托信切らしくも入り來りしなるが爾る所存ありて
の事とは道乃は素より知るべき樣なく況てや現存亡夫の敵なりとは努思はねば今岩崎が仁
慈ある辭を聞き亡父が汚名を雪ぎ復讐の志願を達せんには此人に寄るの外はあるべからず
と女心に深くも依頼し亡夫が冤罪を訴へて何卒老職の御仁恤を將て幸太夫が身に降かゝる
惡名を撲き河窪の家名相續あるやうに御執成を願ひ奉ると涙とゝもよ掻口説ば肇は點頭道
乃を慰め孰れ明日出仕の上寛典の御沙汰あるやう盡力そべしと當日は佛室に回向などし飽
まで仁義の假聲にて歸邸せしが其れより日々同家へ赴き昨日の評義は箇樣〳〵なり今日
の御沙汰は恁々なりしなど已が心の欲そるまゝに陳べ渾て出一言よりて河窪の興廢よ干
る如く説示とよぞ了得婦人の思慮淺く只管岩崎を信ゑゝも當今國政を左右するかとまて威
の權高き名よ負ふ執政の岩崎と思へばなるべし肇は充分道乃よ望みを屬さしめて最早手に入
るゝよ難き事はあらじと一日の黄昏酒氣を帶しを奇貨に同家よ趣き坐敷へ通れば れ登代は
荒下女のお辰を連れ謹慎中なれば縁よ香華院へ參詣して家に在らず道乃一個が家の事を案玄
濱顔なる折からゆゑ機ころよけれと岩崎は遠くかけたる惡の謎も解かねば家の大事にも係る
如く袖を捉へて口説き立てたる肇の舉動は道乃は太く驚くものから今怒ひにふり放ては誰
邊よ縋りて亡夫の汚名を雪ん者もなき事ゆゑ肇を破つて操を立つる當藩の前の故事を倣ふよ
の あられぬ吾身一ッを棄なば家名も恙がなう相續の法あるよ寧らば妻子お登代の身の安穩
三十三 爾すれば前妻への義理も欠けずと不義と知りつゝ家と子を思ふ意の迷ひより竟に肇が更く
袖をはらひもやらで轉寐に怪しき夢を結びしは最と淺間しき事なりき恁る折から香華院よ

三十六

り立歸りたる娘れ登代が座敷の次まで來て聞けば母と肇が私語体ゆゑ折惡かりきと足を禁めて測ら動氣を立聞くよりハッと計りよ胸騒きし後の話説は次回よ記さん

其十七

春の夜の朧ながらに照る月の影を樂よ蹈跟と二の丸外の濠に沿ひ來結る両個の辯客ゞ孰れも兩刀帶したる年壯からぬ武士なるが頼みある中の酒宴かなと綱の諸も呂津い廻らず千鳥脚にて歩ひ來る折しも向の方よりして路を急いで斯來る娘が思はず碓と突當り心の焦まゝ迂架〳〵と思はぬ御無禮を致しました眞平御免下さりませと賠詫ど背ず眼よ角立て如何に夜路と申しながら大の男が両個連にて歩行を心注かぬとは以ての外なる慮外者と道へば一個も辭の尾よ屬き必竟吾儕両人を輕蔑致せし舉動なり其分よては了簡ならぬ何處の者か夫れ吐かせと云ひつゝ顔を瞥々瞰遣り誰かと思へば卿ころ河窪の息女れ登代どのでは御座らぬかと道ふに一個も打眺め成る程是れは河窪の衣通娘此の夜頃に供をも連れず特には遊だしい其の体にて何處へ御臨なさるゝぞと問はれてゐ登代はハッと思へど故と辭も慇懃に誰殿かと存じますれば大貫様に角田様御遊歩歸りで御座りまするか今晩母が暴れ病氣生憎下女も居ませねば只今御殿醫三住様をれ迎申しよ參る處失禮の段は幾重にも御容恕なされて下さりませ心も焦けば御免をと互捨行かんとする袖を左右より緊と捉へ御母公の病氣ならば醫者を招いて診察より老職岩崎聖殿の針を頼むが早病治また卿には吾儕が所持する針を一二本進らせるから俱よ來玉へと酒氣よ乘じて戯れかゝればゐ登代は流き振捨ゐ御申戯も時にころあれ母の病氣よ心配申其樣な淫猥を聞耳なし無禮な事をゞ仰しやるかと眼立しさに聲さへ荒く行過んとするを復引禁め然う堅造に云たとて兒孔母は其人の思ひの七々日さへ經ぬうち情夫を引入れ淫樂するを見て見ぬ振の卿が心は植木帥彌之助が殺されし後彼よ代つた好情夫と俱に密會するゆゑであらう爾それば到底淫行娘の汚名は免れぬ卿ゆゑ一個あるも二個あるも密男よ替りはなし而い至つて醜男なれども婦人にかけては信切者一針うつと可愛と云はせて見せると兩個がしなだれかゝるを右に除け左りよ避けて通んとすれ共軟弱女の悲しさは大の男に押へられ嗟咄叫の初花も此狂風に散らんとする最も危ふき其處へ通蒐りし一個の力士が迦に共れと見るよりも草駄天の如く走り來りゐ登代が帶に手なかけたる角田軍次が頂を摘み曳と聲かけ投つくれば是れはと駭く大貫猛が刀の鐺りを緊と把り力を極めて捻倒せば投つけられし角田軍次が己と云ひつゝ起上り看れば力士が仁王立に寄らば投んと身を搆へし其勢ひに辟易して脱だる草履を拾ひもあへず雲を霞と遁去

濱邊の荒けり

其十八

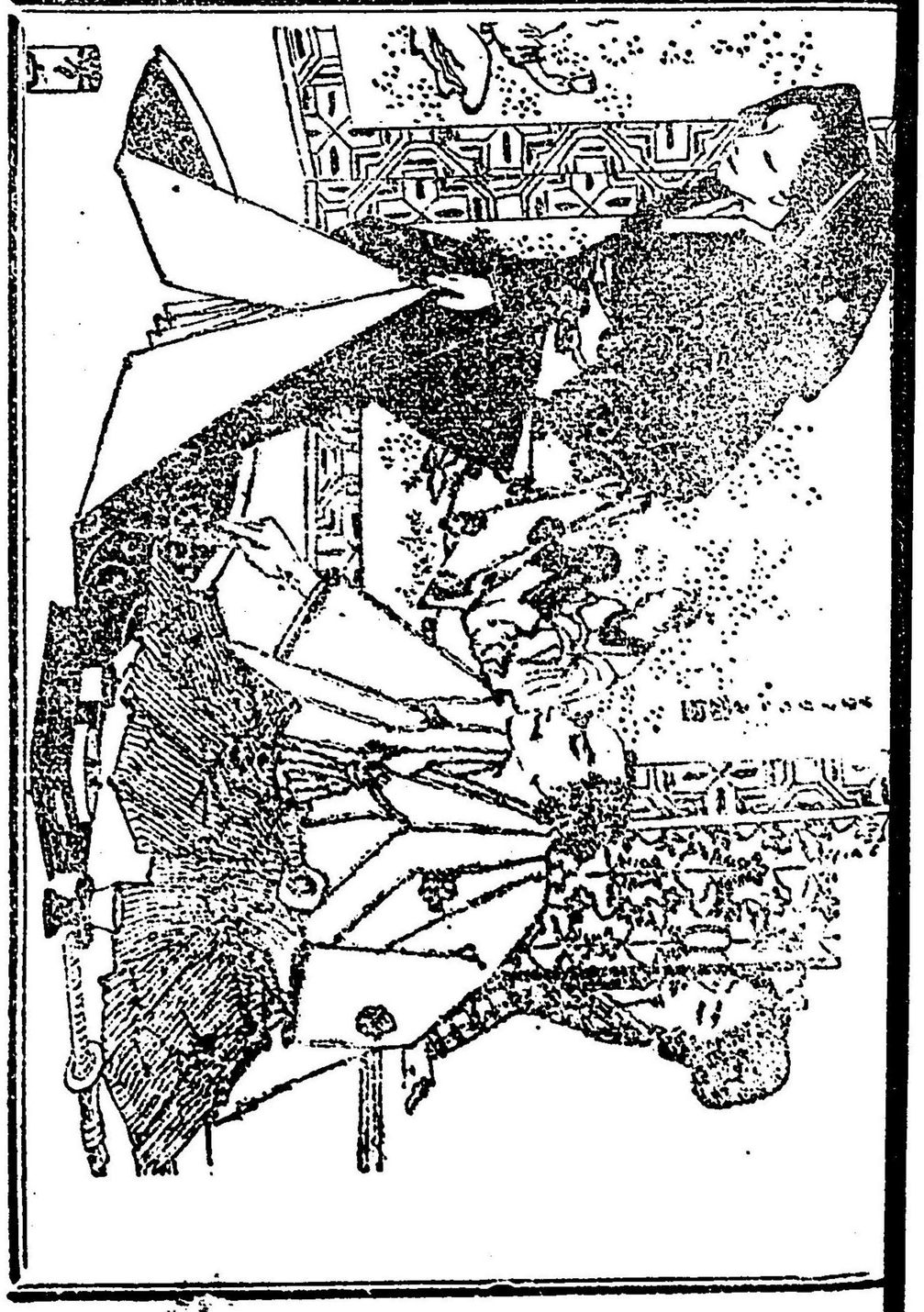
登時力士は亂されし姿をつくらう於登代に向ひ更たと思ふよは有られ共夜路を行に若い女中の一個は大膽千萬の恰好吾が通り掛り過ちのなかつたは卿の倖復度亂暴者の來ないうちよ速ぐ行のが宜からうと道へば登代い嬉しさよ力士へ諄々禮を述べ立起らんとする折しも雲退く月に思はずも互に顔を見合して句ヨ、卿は河窪のれ嫂樣か句其に共ゐは長の兄駒勇闘句然うしてマァお前樣には今頃何處へお臨の積り句サア是よは深い樣子があつて實は邸を脱出しました句其は飛んでもない次第其譯をゞ承まはり不肖ながらお協議にも

なりませう併し何をいふよも此事は往來何處で緩々お話説をと打連れたつて前よ立ち出て郭外なる丁子屋と云へる酒樓に誘ひ最と奥まりたる一室へ請じ再て仔細はと尋ねし登代は堰來る涙を拭ひ家の噂さはお辰から定て聞いてれた出であらうが父様の横死より引續いて家内の者へも嫌疑かゝりて聞門中如何なる天魔が魅入しか母様は御家老の岩崎筆と密會の淺ましい場を見認しゆゑ他事よしてれ諫申し〳〵共れが御意に逆ひしやら居るにも堪ぬ責打擲お辰が禁むれど俱々に其方は娘と肚を合せ穢しき母と見くびつて根もなき事を言觸し覓よは母を當夜から追出を積か爾もなくば自滅をさせる了簡であらうとか意辟みし無理難題強ては云へぬ義理の母様只あつて家の爲めなれば棄ては置れぬ不義亂行特よ相人は一落の上よ立べき御身分にて最と淺間しき擧動と思ひ次けて食事さへ咽へ通らぬ憂苦勞甲夜も寐くく諫めし〻に然う小蠅言れては生て居るより死ぬのが増と裏へ駈出し井戸の裡へ身を沈めんとなさる〻ゆゑ威しと知れど抱き留め最う此後い申しませぬと賠詫て稍う濟は爲たれど所詮直らぬ御行跡人よ指示笑はれんより冥途よ御座る父様の御傍へ行ひて分疎とたつよも知らせず耶を脱出し來る途よて今の様よ家中の者が捉て淫な事に及ぶもやつぱり母様と御家老様の暗を知つたゆゑであらうと思へば一層死が急かれ石見川の水屑となる妾の覺悟であるなれば死んだ跡にて其方からたつへも能きよ傳てたも遺書さへもせぬ事ゆゑ淫奔事よて身を投たかと思はるゝのも道慢く諄々其方へ頼みまするとの跡云さして泣沈めば駒勇は打跪き初て聞いた後宝様の御亂行特には平生の御氣質に似もせで卿を打擲折檻何うも合点かまいりませぬ吾等は素より何んにも知らねど御家老様との不義密會は深い動靜のある事でせう親公と家の爲を思ひ死なうと思召したのも無理ではないか死ぬのは早いマ左右も吾等の家さでお隨なされ母とも談合致したうへ如何とも御安心の方はつきませう夜の更ぬうち急ぐよと駒勇は人目を厭へば驚を儲ひて是にお登代を乘遷らせ國府町なる吾家を投て急がを途中札の辻の原の蔭より躍れ出でし兩個の男は驚の前に立塞かりて大音よ此駕やらぬと呼かけたり

其十九

邊濱

駕を遣らじと立塞りし兩個の漢を駒勇が何者なるかと看てあれば城下に名高き破落戸野晒熊次と其乾兒猩々徳といふ者ゆゑ駒勇は不審に思ひ。何用あつて和郎衆は吾の行途を禁めさつしやると道ば熊次はせゝら笑ひて。何用とは駒勇餘んまりしらを切過るな詳細譯は丁の子屋の裏から潛んで障子越よ悉皆種はあげて置た繼子苛めて遁出した駕の娘の那のお登代詩の語の道はずよ已に渡せと無法な辭に駒勇は駕を圍ふて身辨なし仔細も云はず理不盡よ荒れ嬢様をば渡せと云〻のは再は汝等は後室様からオ〻知れたこッた今夜娘か云々だから行方を探して遲て來よと未亡人に頼まれ出蒐けた路にて大貫角田の兩目邪よ行逢つて所きやア駒勇が其娘をば伴て云つたと嬢子を知つて突留た儲けの花の丁子屋にて母の慘訴の私語まで知つたうへよは計されぬ娘は此方へ貰つて行のだと兩個齊一棒鼻を押戻さんと立寄に駒勇は冷笑ひ。然う听くうへは尚の事汝等に渡して堪るものか夫れ共連れて行氣なら已の體を連れて行けと云ひつゝ前に進んだる猩々徳の胸の當りを右手よて突パ兵兵なから四五間向へ尻餅搗て轉れたり是を見るより野晒熊次は邪广な汝からしまつてやらうと腰よ帯



たる短刀を抜く手も見せず切つて蒐れば駒勇も心得たりと扳合して丁と受留め四五合計闘ふたゝび此時月はまだ雲に蔽れて闇となりけらし舁夫等も心を冷せばた登代は怖さ恐ろしさ今更其場へ出られもせず聲を立てんも如何かと駒勇の身を案じ居たり兩人は互に透し見れど駕に添へたる提灯さへ消て四下もさだかざるよぞ只手下をば氣遣ふばかり折から晴るむら雲に再度刀を打合せしか駒勇は舁夫に向ひ此首搏はねば其駕は少しも疾く吾が宅へと遣ふに心得行かんとするを投つけられたる猛々德が稍く起て後捧の帯際把つて引戻し頻に爭そひ居たりけり

其二十

不題植師木彌之助の母妹は卯太郎の報知により測らず聞いたる彌之助が横死又兩個とも更に正氣はなき入るばかりを卯太郎が勵り慰めて涙は亡者の爲めでもないからマア氣を靜めて佛前へ香華にても手向けるがよいと勵す辭に母娘は漸く顔を仰げば爲たれど木から落たる猿同然當惑限なき体を卯太郎も道理と思へば百般介抱なしたるが翌日又至りて見れば俄頃に重症に劇變して沒去しゆゑ辰はいよいよ歎きを增し母の死骸又取縋り降り乘てられし身一ッも俱に死なんと喞ち泣くを卯太郎が精悍しく立ち廻り村の甲乙を喚聚へ老母の葬送を營みしが斯く交々よ憂事の起るよつけて向後も如何なる難儀又遭はんかと安き思ひもなき折から某日卯太郎は遽だしく來りて道やう今朝鹿田屋の九郎藏どのが來て内々なからと話說をするには御家老岩崎樣には未だ立腹が竭ませと彌之助母妹共に引致來よとの呼附があつたが聞けば母親も死んざとやら親と兄とに死別れて居る妹を連れて歸るのも無

慈悲な譯ゆゑ乾盈が稍く勸解ては慨たなれども氣が氣でなく其首て熟々思考に所辭和女か當地に居ては目を注けられてみるを見やう其れ〻りは大坂に居る老女の許へ遣げて行のが身の爲めであらう然し女公の一人旅特には若い身の上ゆゑ歸次の器なぞ案じらるれば給好吾もまた大坂へ出縣る用事のあるなれば女房にも話し彼地まで吾が送つてやるほどに明日の夜當地を出立なし本街道は御家老が領分地内が多いから伯州路を採として成たけ人目にかゝぬやう吾が宅から駕に乘り御領地境まで行が宜と殘る方なき信切にた辰は嬉しく卯太郎が辭に屬ひ三個四個の家財を活て母と兄の位牌を肌に身淮備なし纏て翌日卯太郎方に來たり此より駕ゑ乘られて卯太郎が附添ひ黄昏に家を出で夜路を幸ひ伯州路の追分と云ふ札の辻へ指かゝりしは駒勇と彼野晒が扳合せれ登代を渡せ渡さじと挑み逢ふたる最中なるが是より如何なる話說やある开は且繪給ゑ顯そものから次回を讀そて知りたまへ

其廿一

折しも空は雨もよひ月は全く雲に蔽はれ星も光りも失ゑ中に光るゝ熊次と駒勇が鬪ふ刃の火花のみ猛々德は籠を遮らずと立ち塞りて妨げ居たる此へ舁き來るまた一挺の駕はふしを乘せたるなれど其れと知らねば猛々德は之れをお登代が乘つたる駕よと思ひ込へて[illegible]るゑぞ籠夫は駭き突放し脚を速めて行かんとそる此時お登代を乘せたる籠夫は稍く[illegible]たりし故走り出すを最前より窺ひゐたる野晒がソレ遣てはと退趕る駒勇はまた猛々德の禁むる籠ころお登代の乘りたる籠なんめりと思ふまゝ闘がりながら手探りに施が首筋引掴み曳と聲して沒出せば這回は濠の中央へ水音高く陷入つたり籠夫は邪魔の撲さし間にと遇目散に走り行くを駒勇はれ辰と知ねば遊が逃ふぞオイ籠夫と呼はりながら其籠の跡に屬ひ追掛たり恁る噪ぎのありぞと知らず一足後れゑ來蒐りたる那の卯太郎は出會頭ゑばつたり權次に突當ればエヽ面倒なと頬の邊を擬しく擲れて苦と駭き轉るゝ間に野晒はお登代の乘つたる駕を舁ふて何處までもと追行きたり思ひがけなき亂暴者に卯太郎ハ喫驚して怒上ちんとそる手先に何やら觸し物のありしを拾ひあげつゝさぐり見るゑ煙管を添へし懷中持ちの煙草入にてあるなれば何かの証になりもやせんと懷中ゑして之れもまた籠の跡をば追つ蒐け行きし此段落は如何る旦く茲ゑ說明さず話頭轉題河羅幸太夫の未亡人道乃は道ゑ背きし事とは知つゝ岩崎肇の心に從ひしは家の爲めまた一ッには亡夫が仇を搜り出し盜賊の汚名を雪との所存成どれ登代ハ其と測知られば屢々母へ諫めの辭を耳苔蝿とて糟子苛めは疾く當家を遂げよかしと口に道はねど心の謎开も此故を如何ゑといふゑ驛は道乃を口說落し志荒

蕚を遂げしものなれど左右ゑ娘れ登代のありては心娛しからぬ事のみゆゑ早晩れ登代を失濱

はんと竊に道乃へ寢物語をせし事あるにぞ道乃は深く駭くものから陽ハ最とも同意の体に

し責殺さんか毒害せんかなと怖ろしき性根なる如く岩崎とは語ひ居たれど口と意は裏表遇

げ出だせよ疾く走るべしと辛く當りて有しうちは竟ゑれ登代ハ出奔をせしかば稍く駒は落

ねれど故と其失はざりしを遊戯氣に岩崎へ語さた下女れさくへはお登代の行方を知て居や

四十

三十

う左なくば何處ゑあるか搜し來よと難題を言かけ邸ゑはをられざるやう爲慰れども作は

また深き所存もあれば邸を下らず仕居たり頃反弱生中旬も過き一日岩崎は河羅方へ來り抑

當家處分の儀に就ては段々吾より歎願を入漸く家族には御咎なく河窪の家名無事の御沙汰有事よ決たれば地近々吉報の有は必定なり今日は久々石上山の花觀學を思ひ立たれば卿も俱よ伴べし花も例き家名も問幸先の好遊歩なれば嵯とばかりよ勧められ實は知ど案たる家名の無事と聞からに滝n心歎まれて岩崎と共よ打連れたち石上山に向ふたる花見の茶屋へ赴きし殺の話と給仕の譯は筆癖ながら次回に記さん

其廿二

夫れ石上山の櫻花は往古毛利大膳太夫大江朝臣輝元卿が當地を領しありたる頃大和國吉野山より數圍の櫻を遷し植させ之れを培養して年々歳々土地を開いて公衆の觀場とし遂よ小吉野の字あるに至りしなるが遂は該本居等の試ぜられたる歌のやまとごゝろを人間はい朝日よゝほふ山櫻花と云へるに齊一勤王愛國の精神を表さるゝの意なりと聞おぬ感りしほどに文久年間に至りても花咲時は城下は勿論遠近人の群聚りて興じ居れ居る老多し當山に沿ふ一朶の流れを石上川と稱し數線の支流ありて末は石見の海よ入ぬ綿る程に岩崎擧は道乃を伴ひ此川岸よ在る臨花亭と云る料理亭よ上り潜びの遊興なれば酒と供人等は城下内に待たせ置き其身は道乃と只兩人なれど元來人目を厭ふ身ゆゑ鼓と喫きりたる盛敷よ入り花を眺望て興趣は酒肴者し居たりしが擧い太く酩酊して其場に絶ぬほどになり感る休よて飯宅も如何一驚して醉醒せんと枕を取り寄せ横になれば モシ輝擧は身の神と道乃は傍よ脱き棄てある外套を取つて腰の方よ被せ掛る間に早高鼾正体もなく寐へし容子を爲と見すまし密と起あかり床よ置たる亂函の中より把り出す擧の悦盞彈き鎖の金物を外す手さへも懶々ふるひながらも心を鎮め裡より出だす一通の書翰を徴き讀下し打驚きたる顔色よて復操返し讀み直す此時までも熟睡せし擧は不圖眼覺して看れば道乃が此体なるにゆ之れも該き起あかり卒然よ道乃が讀み入る書翰を奪ひ取らんと立かゝれば婦人は見咎られしこと思一はゝ書翰を持つて遁げんとするを逐さず襟髪無手と把り膝下に敷据動がせねば道乃は故と聲震はし。操を破り身を棄て仇し枕を替しゝからは棄よ遠慮い入りなそない面白さうな絶叫文と思つたゆゑよ讀んで居るを貫郎は何んでお留め遊ばそ再ては御心變りにて他よ堪も花邊が御座りまするかと道へば擧は冷笑ひ。一時の眺めに手折し花素より汚穢歎さぬ其の方者懐中の密書を奪ひ遁げんとなすころ不敵なれ此一大事を知るうへは惘然ながらも生し置かれず覺悟致せと云ひ放し傍の刀を抜くより早く切つて蒐れば道乃も屈せず云ふよや及ふ此の密書に記せし如く若殿を害め奉らんとする大悪人特には貞夫孝太夫の仇と知ればなほの事勝負は此方も望む所と準備の懷劍振んとするを小賤な婦人と賜にて蹴倒し肩先一太刀切下荒れば苦とは云へど屈せぬ道乃川岸よ沿ふたる樣よ倚り手に持つ密書を押戴ざき神明佛陀や加護あらば此衆忠義の人々の手は授させたび玉へと心に念ず川中へ投棄てる時吹き起る風辯は忽ち該文を巻あげ去たは吹れろし飛び行く折しも川筋を下り來たりし樵夫の中よは爲子一人と鶴も知命を過ぎしかと思ふ法師の乘りてありしが今風に逸れ鮮ひくぐりし文匕行講の旅僧の金物に落たりけり

其廿三

七町續きとい云へばねに野面に近き城下靈頭萱葺屋根の軒を傳ふ夕顔棚の下涼み男はてゝら

女は二有の其れにはあらねど是もまた誰に遠慮は内緒話し親子は膝を合せながら駒勇は腕
叉き尋思の顔を稍く仰げ妹お作よ對ひて道やう何旦那様が横死なされ其讎さへ知れぬうち
御心からとは云なから後室様はまた岩崎様の御手に懼つて果敢ない御最期御嬢様へ先々月
の末の夜測らず途にて御出逢申し連て皎らうとした折柄野晒權次が後室様の頼みを受たと
途中の乱暴支へられるうち來合した惣は當時御嬢様を乗たる惣と思ふゆゑ吾家へ連て帰つ
たうへ裏より出せば御嬢様よいあらで植木師彌之助の妹のお辰如何した譯かと仔細を聞く
よ兄は恁々の事よりして忠五郎乾分に責殺されまた母親も沒なつたが遺つた此身を御家老
から召捕に來との噂を聞き卯太郎殿とやらが信切に大坂よ居る伯父の嘉作の家まで送つて
行く處と委細は識れたがれ嬢様は權次の方へ攫はれたかと心ならねば直よ飛出し捜索爲た
れと皆暮れ行方の分らないのは何處遠くへ往つた事かと云だんだ踏でも跡の祭り設またお
辰どのを送つて來た卯太郎殿か間違て惣に引添ひ往かれたか夫れなら御身の恙ハなし就に
しても四五日を經たら動靜が知れるで有うと只得お辰どのを吾家よ止め二日三日と過しへ
うち持病の癪に腦まされ起居も不自由よなつたゆゑ惣母やれ辰どのへ介抱うけて辛うと快
癒た日よ和女が來て詳細聞たお家の噪ぎ正直一徹の旦那様は竟よ盗賊の汚名を帯び未だ其
れ耳か後室様ハ發狂故に手討よしたと御家老の御届にて河瀬の御家は全く斷絶同然渾ての
事を支配なさるゝ笹間様は那の大病已の父は孝太夫様を命の親と存命中は口癖にこひ續け
しゆゑ父に代つて其萬分の御恩報じと和女をば御春公に遣り已もまた邸の方へ向けては
臨さへ出さず御家内安全長久と祈るよ甲斐ない道回の一件双方四方の話を聞き熟々枕吟を
すればそるほど疑惑はしいは御家老にて假令規則を破りしにもせよ僅植木師一人を責殺す
とは苛酷成敗また現在盗賊の汚名よて謹慎を命じてある河瀬の後室と密通し何か心に背た
かは知らねど發狂人と云做て場所もあらうに石上の臨花亭にて手討とは何程先殿の御妹公
を奥様にれ貰なされた威光と云へ御藩中の棟梁とも仰がれ玉ふ御家老の御擧動とは思はれ
ず察する處後室様か操を破つたなされ方も深き仔細のありしならんが今となつては死人に
口なく是非もなしとは云ひながら後室様の讎は御家老筋と動靜を捜つたうへでは其筋よし
ては置れまいが何かにつけて肝腎のお嬢様の御行方か知れぬよ於ては御家の爲にもなるま
いから其れが第一心懸りと兄の辭にお作お辰も顔見合し後の話說は次回論亞ぐべし

其廿四

濱の邊荒海

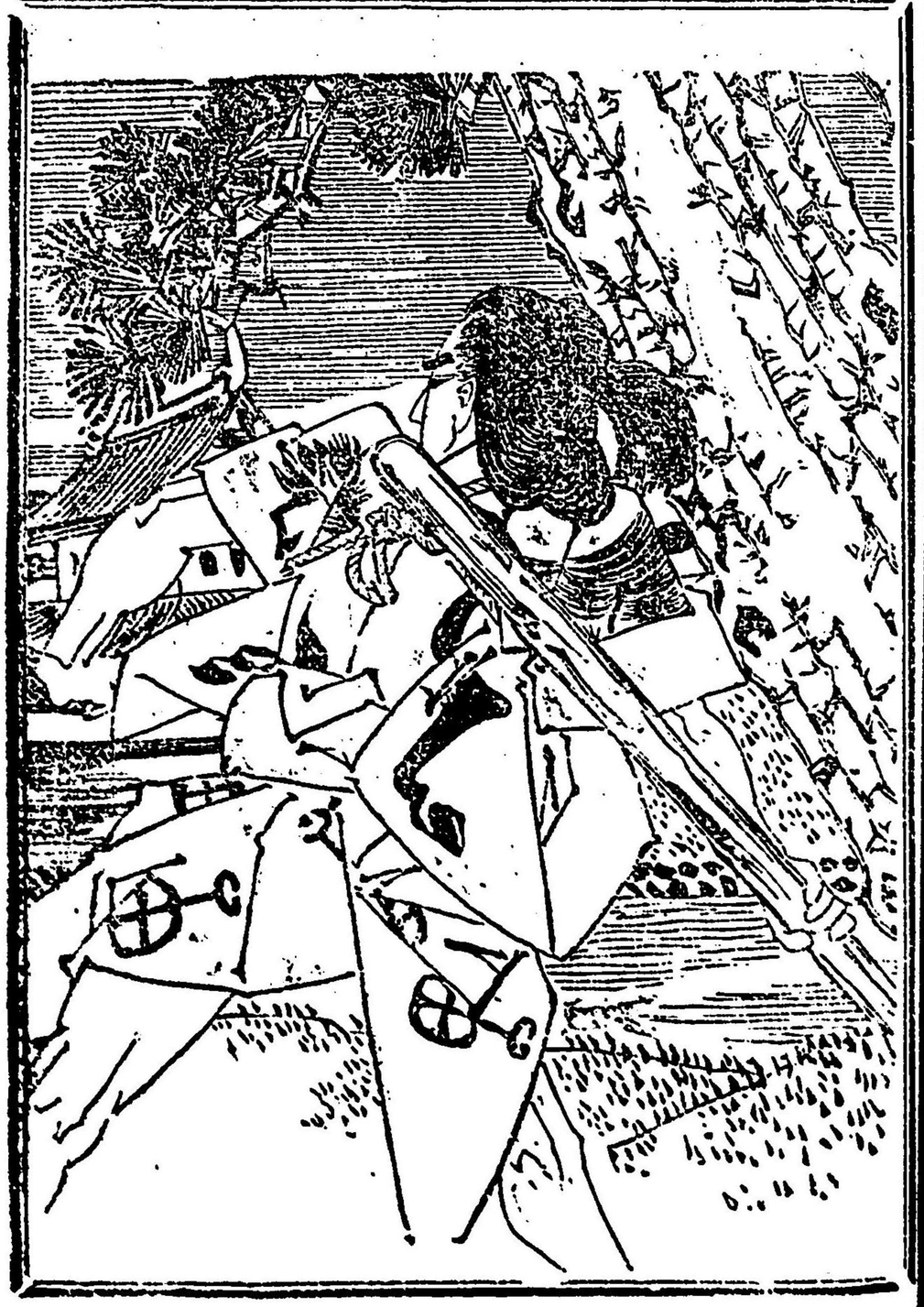
兄の辭に妹れさくは涙を揮ひ道へるやう今更道ふても詮なけれど开も河瀬の御家が斯まで噪
ぎよ至るといふ其顚末を質そ時はれ嬢様が彌之助殿へ戀慕をなされ共れが爲めよお氣も鬱
胸て苦世〳〵と物思はしき顔色ゆゑ設もの事はあつてはと思ひ過した心から道ならぬとは
知りながら其か周旋をせんとしたのを早晩旦那様に見認められ恁々して彌之助を呼出し來
よとの仰をうけ普請小屋へと行途にて測らず酔酊の仲間衆よ据られて難儀の折から彌之助
とのはお嬢様へ意見をせんと小家を脱出し通かゝつて妾を扶け供にお邸へ辰りは爲たれど
當時れ嬢様から弱之助殿へ宛たる御狀を取落した其れば証據で彌之助殿は遂々翌日御家老
様の呼出をうけて鹿田屋が責殺したと後の評判また旦那様は彌之助どのへ何やら密よお尋
ありて奥様は宏めお嬢様へお知らせもなく其夜のうちにれ邸を御立なされたる跡に遣りし

御書簡にては至急に思起つ事ありて京坂筋へ赴くとのみ他よ事故さへ知れぬうち思ひがけなや鯉の松の頭よ於て横死なされ剰つさへ御用金を竊んでれ遁なされた抔と御上の疑ひはれやらず御家は閉門謹慎の歎重なる折も折後家様は何時のほどにか岩崎様との御密會を御諫めなされたれ孃様を襖子苛の責折監卑妾も倶よ御叱ありて二言目よは皈れ下れと以前の御動靜よ引變て人目も愧ぬ御不行跡其れ等を愛に思召してかお孃様は家出ありし其翌日より妾を責め登代の行方を知つて居やう知らずば早く捜して來よと無理難題を仰しやれど何首やら鬱々して御坐るのはお孃様の身をお案事なさるゝお心の裏と曉りしゆゑ假令何様よ仰しやても卑妾はお邸より下りませぬとれ辭を返して耐忍して居しも後家様が御心底また御家老の御擧動か如何も不審と思ふゆゑれ孃様の事も心に懸れど五日七日と輕過し、うち御悼しや後室様は御家老の手よ敢ない御最期遂よは御家も斷絶同然卑妾も只得内へは復れど片時忘ぬ御家の事今兄さんの云んそ通餘りと云ば御家老が我儘氣隨の御處置沒去玉ひし且邪様また奥様の汚名を雪ぎ大きな聲で云はれぬが特に寄つたら謀反人とやらを見聞ばす事のあらうも知れねば那の御家老の心底を聞き出す尋思はあるまいか夫れよ就いて思ふよは今から卑女とれ辰どのは亡御主人の菩提の爲めまた彌之助どの、後世安樂を祈りの爲めに西國の札所を巡り一ッよはお孃様を索出だし御伴して歸り度實は兩人で諜合と貴兄に願み母様の許可をうけてと思ひますから何卒此儀を聽届けてと婦人ながらも忠義に懸つたるおさくの志望を駒勇と母が得心するが否插繪よ推察はあるべけれど且次回の分解を聞け

駒勇は妹とお辰が思ひ起つたる所存を聽き寔に道理ある其辭吾は得心しさしたが何時皈るとも限りなき旅路よ出づる事なれば母の心が酌かねてと道へば老母は首を搖り婦女ながらも武家奉公をさせて置のは斯いふ時よ御用に立つる亡夫の所存お孃様の所在をば索てから西國へとるとは此上もなき宜い覺悟常々香華院へ參詣して説法の際聽いて居る慈航は渡さる乘生もなく慈雲は掩はざる邦國もなし苦を拔き樂を與ふるは佛の慈悲とあるなれば長旅濱とは云へ兩人の身よ恙あるべき樣もなし跡には駒勇が居るなれば心殘さず旅立してお孃様をお供えて伴ひ皈るべし哀別離苦は浮世の常必ず忠義を忘るゝなと宛も深よき母の辭よ駒勇は歡びて許可の出でしうへからは日柄を選みて啓行をせよと嬰て準備を整なはせ左右もの逸るうちまた一月餘を過ぎ秋の初めに靈祭る于蘭盆の時とぞなりにける大悲の誓仰なる門途のまはよき日なりけりとお作れ辰の兩人は同行三人と認めし笈摺着に白脚半杖と杓とへ仕込みし短刀精悍しくも身準備の姿を見るより母親は山川に氣を注けて風雨の日は殊更よ大擔荒をして惱ふなと云ふも憂りし泣顔を咳よ紛らす氣丈の母親駒勇は諄々も設道中にて病に罹らば別人を立て報知て來よれ孃さまを索出だそまでは努々短慮な事をもなと言含めて門送り兩人も宛然堰來る涙を禁めながらよ暇乞去らばさらばの聲を殘し引分れ行く親兄弟之離ぞ世の別れとは後にぞ思ひ知られける話頭分題岩崎筆は書て反逆の一味なたる江戸邸詰の用人湘壁重藏へ宛て八橋計畫の一條よりして彌之助の事及よび孝太夫を謀殺し、、來を文認め近日腹臣の者が出府の砌持たせやらんと思ひ居し折柄石上川の流花亭に於て[illegible]

十五

一の未亡人道乃よ見認められ只得其場に於て道乃を斬殺は爲たれど道乃が袋密書を川へ投け



棄てし爲め最と心安からじ肱股の臣に命じ川下を捜索させしが更に分らず縡れども名に負ふ急流ゆゑ所詮止りあらざるは必定と鄰か安堵いなせしもの、萬一の事もやと思ふの餘り俄頃よ忠れ郎へ内意を含め工事を一層急がせてまた同盟中の一人なる海野主計よ江戸表出張を命じ浦壁重藏と謀り御後見たる嬶翁公また松倉丹下等を失ふべしとの計略を投け立出させ尚も惡事の根を堅め居たる心の裡ころ韜しけれ

其廿六

夫れ人は定業不定業非業不非業のほかに出ず小笹の露草の露迚よは消ゆる命なり樂天の詩に曰く行路の難は水よ在らず山に在らず只人情反覆の間にありと宜なる哉駒勇次郎吉が父次郎兵衛が孝太夫に享し恩儀のあるなればと妹れさくを同家へ奉公住させ其身と母は家に在りても同家の無事を祈し甲斐なく奸臣岩崎肇か爲めに幸太夫れ盗賊の汚名を被り横死を遂げ道乃は貞操を破りたる深き苦肉の巧計も曠しき耳か剩さへ狂人の名を負ひ奪刃の下に斃れ娘お登代は繼母が成存を知らねば自ら家を奔り遂に河窪の家名斷絶の沙汰に及びしい寔よ古人の云ひし如く生死は賢愚邪正によらず顔回は短命よして盗跖い命長しの道理亦是非もなき事なるか妹が乞にまかせつゝれ辰とゝもよ目的なき旅よ出しやりしも踪蹟知れざるお登代を索ん爲めなれば駒勇も折々は城下に至りて彼野晒權次等が立販り來しか如何と穿鑿せしに渠は狸々德と共よ江戸へ出立そるとて當春出立せしまゝ未ざ販らずとの風聲なれば再は彌よれ孃樣を奪て逃しものならん此壓さを母にも告また岩崎が動靜を探偵するに近頃は倍々奢侈に耽り一家中の者も當主富丸君の許へ勤仕するよ先立ち且岩崎の邸へ伺候

するが如き狀ありて甚だしきは岩崎の邸へ耳出仕するを務とするの輩もあるに者ゝ竊ゝこれを憂ふと雖も河羅家の体爲くを見て懼れを懷く者多きが爲め陽に同情を表する程の志士もなければ我意は漸次に增長したるを見聞よつけて駒勇は國家の奸賊主家の怪敵吾一身にてあるなれば突進突進を屠つて其肉を喫はんものをと腕を扼して憤怒はすれども古稀近き母親に憂を見せんも不幸の至りと胸を擦つて居たりしが一日次郎吉は近邊なる明肇の家よ招かれ日の暮るまで雑談し立歸り見るど母のそらねば顯に嘆べと咎もなく只看れゞ側の經机よ珠數に添へたる一通の手紙のありしを不審に思ひ手よ把りあげて書を看るに正しく母が筆の跡にて「過書の事」ヨゝと駭き駒勇は逆に怒たる文たし拔き讀文体は次回よ記さん

其廿七

駒勇は胸躍きながら手よ把りあげし水莖の跡もおぼろの散し書讀下し看る文言い

心いろがれ候まゝあら〳〵書殘し申候治郎兵衛どの死去の後いれ作を河羅の御家へ奉公に差出してよりは萬事よ和子一個が心勞ひ老耄し此母へ孝行を盡されず殊さら河羅の御家騷動の以降は一層心配も彌まし候事と思ひつゝけ此世に用なき老の身あらずは和子の心のまゝよ忠義も立ち亡父い勿論御主人方にも御喜びと推し候ゆゑ度々死なんとは存じ候へども思愛の情斷ち難く生甲斐もなき身を存命をり候ところ此節人々の風聲によれば御家老の我威專横倍々募り民百姓を凌虐壓制の所爲尠からず人々難澁致し候へども誰とて其惡行を諫むる人なきに實に御國の爲めに歎かはしき事に存じ候素より邪よして樂しむは嘸売の火の如く一旦は滅なるもきゆるよ早くまた心ざま正しくして苦しむは泥砂よ濁る水の如く日を經なば原は清きになると申せば非除岩崎殿の權勢あるとも不義の榮利は浮雲の俚諺いつしか亡ひ失玉はん事は目前なるべけれど一日延ぶれば一日の國の憂をます耳ならんと婦人ながらも絶がたく思ひをり候よ速も和子は此事を思ひ起され候と昨夜竊に獨り言を立聽き嬉しさの限りなく候をとぞ萬一母への心殘りありてはと思ひ候まゝ惜からぬ命を棄て和子の忠義なる委細は冥途の夫に告げ悅ばせんと其れを樂しみに今度井戸よ身を投げ相果申候只不便なるは娘れさくにて野を過ぎ山をうち踰て露に宿り風に梳づり狎も習はぬ草枕旅寢の憂の不在の間に母と兄とよ別れなばれた登代樣を伴戻り候とも嘸遺憾に思ひ歎き悲しみ候はんと是耳來來の障に候和子は御國の爲めまた二ッにい御主人方と母の仇と思ひ乘多に代つて身を棄て禍災の根を斷ちなさるべく候申し殘し從事は山々よ候へども本望遂げ遂げざるよ係らず跡より來る和子の身と存じ候まゝ母が所存のみを記つけ置候返々も未練の擧動ありて嘲笑をうけぬやう深よく本望を遂げなさるべく候涙よ墨のよちり勝に候まゝよろしく御判じなされ度い

次郎吉どの

母ゟ

諭訖りて駒勇は思はずワッと男泣雲時は顔も得あげざりしが漸くに涙を揮ひ再は昨夜の綱り言を察し玉ひて身を棄られ此次郎吉が忠義をば立てさせて下さりますかコレ母人聽て岩崎の首を取り其塚を去らず腹を切り直ぐに冥途へ參りまする設また爲損じ捕られでも決して未練な擧動なく潔よく最期を遂げませうとは云へ非業の御身の果是も正しく岩崎の爲す業今よ念慮をはらして呉んと怒氣は忽ち髮を衝き向ふを白眼立つたるは物凄くころ思はれけれ軈て心を取直し母の死骸を非戸より引揚げ近隣の人々をも喚集め法の如く葬送を濟せしが一七の間は我家に引籠り八日目を竢ち佛壇よ備へし位牌に添へ諸道具は殘らず香華院へ預け妹が皈り來し日に渡し呉れよと依賴置き其身は近國の興行よ出掛けると云做し吾家を立ち出で、岩崎を覘ふ便宜を窺ひしに八剛の賀よ登城の歸りを追手門の邊に埋伏して討取んと其日を竢ちて暴擧に逆ぶ其の趣きは給樣にあれど旦く次回の分解を聴くべし

其廿八

思ひ立矢の石見潟濱邊の涙やうたかたの泡と消ゆく覺悟の狀夫忠義よ凝たる意の駒勇手綱の其れならで浴衣のうへに繩襷角力の身ゆゑ刃物よりはと家に有あふ六尺餘り五寸經の杉丸太を右手よ携へ城山なる追手の門に最近き日暮と稱ふ土堤の頭に岩崎遲しと待居たり頃及文久三年八月朔日城中の御櫓よ於て報する明刻の太皷よ連れ諸士は追々登城なし已の刻の太皷を信號に孰れも下城なしたるが常主富丸殿は先つ頃より二竪よ罹らせ玉ひしゆゑ本日の御式には臨ませられず執權岩崎殿公よ代つて一家中の拜賀を受け式濟ぬりなく相濟し付例規によつて在江戸なる御分家鳩翁君へ祝賀の御狀を發せらる岩崎是れを檢閲し聽て御病床よ就き此旨を具陳し下城なせしは御櫓よて未刻の太皷を打出す頃なり恁て轎子の左右には三人の壯士扈從し追手門を出て二三丁を來り日暮の土堤へ投蒐らんとする折から待設けたる駒勇は該杉丸太を眞向に振翳し奸賊岩崎氏を其天に代つて駒勇か汝を此首に誅戮なすなりと云ひつゝ、駕脇の武士を横に薙ぎたる必死の力キャッと叫びて鼻口より出血なして倒るれば驚破涙雜よと殘る兩餘が刀を拔いて切て懸るを駒勇は杉丸太にて丁と受留め鬪へど目的相人の岩崎を取逃してはと思ふものから小圃が速くも注進せしよぞ卒其涙雜者を討留んと岩崎徒黨は姦臣等が追々該塲へ駈着來る恁る中にも岩崎は轎子の戸を開きし目

邊の荒濤

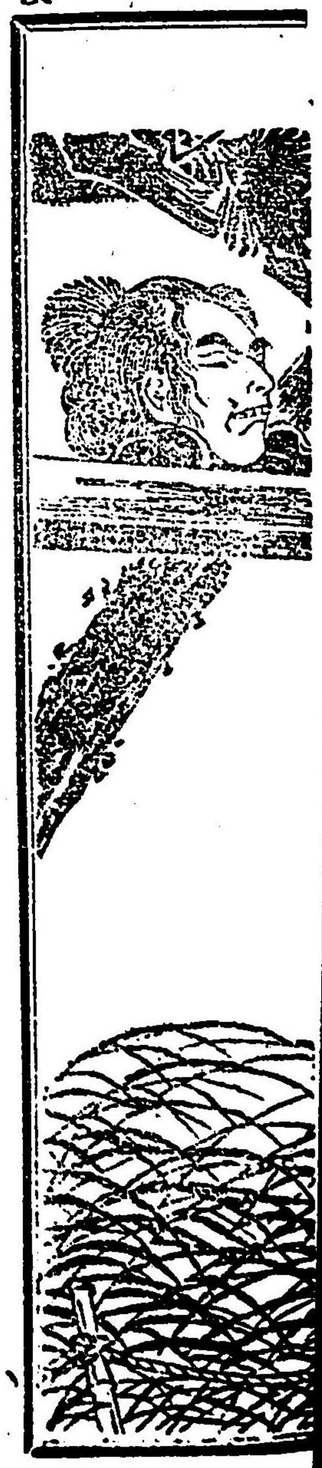
にて外へも出ず泰然と刀の反打寄らば切んと身構なしたる容子を見るより駒勇は假令此塲に切斃さる、共渠を遁がして協ふべきかと數ヶ所の負傷に血は濺津瀬浴衣を染むる韓血の苦痛に撓ます數人を敵手に蓄擊突戰なしたるゆゑ此棒先に觸る者は一人として起る者なし爾れ共敵は大勢なり殊には新手よ入り替はり立替り得物〳〵を携へて立ち向ひ來る事なれば暴に暴たる駒勇も漸次に力弱り行し此段落は如何ならん

其廿九

夫れ日暮の土堤と云へるは前城主松平周防守が別館を設け其結構好を盡し美を飾り之れを眺望者日の暮るを忘る、と云へるより斯は稱ひしとかや然るも當城主入國ありて該館を破毀されしゆゑ今は只其名耳遺れり閑話休題駒勇次郎吉は立向ひ來る武士の刃を奪ひ取り之れを左手よ持ち添へて武藝は知らねど死に物狂ひ一刀なりとも岩崎に切り附けんものを

十七

と思ふものから周圍を取囲人數の爲めに進退維よ谷りしが元來氣丈の駒勇流る、群血を踏



茄を大喝一聲前に立つたる一個の壯士を薙倒し肇が乘つたる駕を目蒐て躍りかゝらんとせる折から後走よ駈つけ來りし海野主計が斯と看るより鎗をしごひて飛蒐つて右手の腋腹骨も徹と刺貫く主計は聞えし鎗術の名人宛も凝氣の次郎吉なれども此一鎗に弱り果て叫と共の場へ倒るれバソレと云ふより大勢が寄り蒐つて鎗の如く切さいなみて命を斷しは無惨といふも餘りあり噫駒勇は一の匹夫なれど其の精神は鐵石の如く忠義の爲めには命を塵埃よりも輕くし今日日暮の土堤の露と消て果敢なく成り行きしは寔よ遺憾べき壯者なり嫌て亂暴者は打果たる旨岩崎へ通じ开も此者は如何なる者かと取調見しに全く河瀬孝大夫の家婢さくの兄駒勇と云へる角力なりと言立しにぞ岩崎は意の裏に再は吾野心を洩れ聞き此擧動に及びしならん斯る奴さへ知ると識りては容易よ油斷はなり難しと私に怖れを懷くものから故と憤怒の体を顯し重々憎くき涙籍かな以後恁る暴卒者の懲戒の爲めなれば渠が首を切つて梟木せよと鶴の一聲誰一人否む者なく唯々諾々竟に駒勇の首を野よ晒し執檀は崎肇へ對し亂暴に及びし科よ依り斯の如く梟首せしむる者也との捨札をさへ添たれど志ある者は駒

勇が擧を近き櫻田の義徒よも劣らぬ適れ日本魂かなと竊に賞讃なし居たり不題同國津和野の町に西林寺と云へる梵刹あり此の住持敎眞は元濱邊なる岩崎氏が父主殿の弟なれど幼年より武道を嫌ひ深く佛門に皈依し十一才の春西林寺の前住敎阿和尙の徒弟となり共れより道心堅固にして鶴の林の茂きをわき鷲の嶺の高きを仰ぎて出離生死の西の道を修する事故と切なるゆゑ遂よは同寺の後住となり道德の譽は倍々高かりけり近時い津和野を立つて近國近鄕を行脚し此ほどより故鄕濱邊に滯留して村々の民を敎化し居たりしが今日しも神谷村よ赴き其歸途城下盡頭の刑場に差かゝり後の話說は次回に記さん

其三十

再說敎眞和尙は近時濱邊の城下に出て專ら人の評判を听くよ自身が爲めには甥なりける岩崎擧が先君の妹花子を妻よ賜りしより其威勢漸次に高く驕奢の意を生じ君家を輕蔑して歷制專橫到らざる所なく志士は竊よ之を憤怒すると雖も亦奈何ともなし術を知らず偶ま諫言を容る、者あれば忽ち苛酷の罪科に處し其家を絕ちえれよ反して阿諛仕ふる者は食祿を與へ金錢を頒ち妻子富貴に處り眷屬衣食に飽くの榮あり爾れば況季の人心咸岩崎が門に綴て作然一國の主よ異らずと喋ふするを見聞よつけ敎眞和尙は只管に嘆じ吾岩崎家は當主の祖先左近將監殿より數代を侍士して君寵も曾ならず況て兄主殿が精勤の功より蜚擧へ忝けなくも妹子を降嫁させ玉ひし其高恩はまた莫大なり然るよ當主は幼稚に在すを奇貨よ斯く人口よ喧炙するまでも我國よ驕り專橫を恣ままするこゝろ癖事なれ吾今慾界の俗塵を離る、身なりと雖も御當家の爲め岩崎の爲め捨置べきよあらざれば擧よ逢ふて肯ぞざるまでも說諭さんと敎眞は有繫血筋の情誼も深く稍く其所存を決せしなれど敎化よ遇あらざるゆゑ一日二日と經過し、に此時月は山の端を出て霽をあざむく秋の夜の風に戰きし芒原の中央に蟲を設け梟し首を看るより敎眞歎息し如何なる者か知らざれど偶得難き人界よ生去ながら身首を異し斯淺ましくも野面に曝され一族の名を汚し未來は地獄の苛責に遭ひ浮む顏とていあらざるべし亦もまた如何なる者なるかと傍へ立寄り携へ持ちし小提燈の明りに透し案濱札を下し見るよ這は什生岩崎擧を討んとして斯る梟首よ處せられしと稍くに聞得たりしかば敎眞は太く駭き是れ素一個の忠義の徒よして必定擧が惡逆を憤怒のあまり擧殺せんと綜邊の此よ至しならんが不幸よして其志望を得ず反て暴卒亂臣の名を被りしこゝろ悼しけれ亡者は宙宇よ迷ふならんが今此敎眞が道ふを聽け岩崎擧が汝を斯る刑よ處せしも縱て其身も此の刑場の露と消長く醜名を世に狠めん其時はまた汝こゝろ眞個の忠義顯れて千載の下よ美名を遺さん盛者必衰會者定離因あれば必ず果あり努々心殘さずに成佛せよと懇切に首よ向ひて荒回向しつ涙を揮ひ立去りし後の話說は次回よ記さん

其三十一

蕩有恁し程に敎眞和尙は翌日を竣ちて急ぎ岩崎の屋敷に到りて面會致し度旨を申入れしに折よくも主個擧は在館にて斯と聞くより玄關まで立出て這は伯父公よは能くこゝろ來ませし誘とばかりに前に立ち案內をすれば敎眞は衣の袖を掻あげながら背後に屬く打通れば且此方へと請じ入し座敷は綱代大井よ屋の裏を裏みて長押床間の風流なる唐木將て造り出し調一座また俗ならずして文珊房具盆栽は勿論琴棋書畫所狹まで飾り立しは恁る遊興の廊と見え

六十二

たり庭前を眺望ば常盤木の間より初紅葉を顯し假山は究て高からねど芝旨丸が須彌山をうつし秋桃は稍く紅ゐして西王母が三千歳を羨ます其他渾ての物好孫れり掬せる非觀美麗看るまつけても敬眞は人の風聲の虛ならざるを漫よ歎じゐる折から衣服を更め岩崎肇は其座へ立出て兩掌を突き伯父公には先頃より津和野を立つて當城下へ杖を曳かせ玉ひし趣きは當家より御附屬として西林寺へ遣し置たる近藤勘助の許より報知來り早速御伺公も仕つるべき筈なれと御旅宿とても判然ならねば意外の無禮は幾重にもけ容赦の程願ひ來るを賠詫ば敬眞容体を正し俗塵の火宅を離れ三界より家なしとそる沙門の俺へ無沙汰の詫に及ぶべきかは其よりは其方ころ改心なして先君と亡父主殿の兩墓前へ御賠詫を申して切腹せよとは伯父公の仰とも覺申ず不肖がけなき伯父敬眞の辭に肇い心怒り。仔細も告ず切腹せよとは伯父公の仰とも覺申ず不肖ながらも一藩の執權職たる岩崎肇君家の御爲ならざる外は容易に命は棄難しと道ふ顏熟々敬眞は打諦視て落涙なし君恩の高きを思へば冠山も數ならず御仁慈の深きを思へは石見の海も比がたし然るよ其方花子の方を降し賜り妻となし郁之助を出生なしてより此降幼主富丸君を蔑らよし容易ならざる企謀あるもうたてき事ともなり熟々其方の行爲を觀察するに浮める雲の危きを知らで人を看るとは其の如く快樂の淫酒の穢れたるよ耽らかして魔業の火坑に陷る事を知らず右人謂る事わり邪智よして貪り且捐むものは隣れる家の貨を算て殘火に寄る虫の如く猿馬を不羈の思よ勞して五慾の海底に沈む事をおもはずと其方が今の一言君家の御爲なりせば命を棄るこゝるべければ其の命を棄國當安穩の道を謀るべし昨日梟し駒勇とやらんが暴舉よ及びし其起因も非除他人は知らじとそるも此敬眞は疾よも知る石上川の臨花亭に散らせし落花涙雨の密書は吾掌に入つたるぞと云はれて駭く岩崎肇須臾辭もなかりけり

其三十二

登時敬眞復度道ふやう。當春津和野より當國へ杖を曳き郡中を經歷るうち石上の川上より樵夫の舩よ便を憑み花を眺望て下る折から彼臨花亭とか呼びなせる酒樓の頭へ來たりし時適に看仰る高樓より飛散りて吾頂きし笠へとゝまる一通の書翰は世よも恐ろしき逆謀の件を認めたる主い確に岩崎肇ィヤサ云はぬ前こう左も右も伯父の口から明白に此の趣きを申し出でなゞ忽ち滅する岩崎の家名其れゆゑ速かよ切腹せよと今勸るは伯父の慈悲爾れども件の密書に對し分疏の道あらず說明もべし汝の所存よ一點の曇だよなくは非除世人の惡評ありとも伯父が代て辨解せんまた分疏立難くば切腹なして君父の墓前へ悔悟の意を表するころ眞個の武士といふべけれ返答如何よと敬眞が說き言詞に岩崎は默念として居たりしが元來奸佞邪智の肇佶と尋思を決せしか宛慨然と首を仰げ。密書御掌に入しとあれば今更左右に陳そるは甚ざ臭性に候へば只仰を拜受し父の墓前よ於て深よく切腹仕つるべし伯父公よは死後の儀を宜敬御執計ひ下さるべしまた今生の御暇乞勞々登城なし富丸君へ拜顏を願ひ不忠の御賠詫申し上げ奉つらんと如何よも既往の懺悔なしたる勵辭に見ゆれば敬眞は喜悅なし其心底を決せしは國家の爲めよ賀そべきなり岩崎家の儀は敬眞が身に負擔して相續に慈なきやう哀訴せん努々所存を變そる勿れと涙とゝもに說き諭し切腹の日を定めなば城下本町なる吾旅宿百足屋金助方へ報知來よと其期を約して立ゐかれば玄關前なる式臺よ

で見送る肇は太息吐き軈て座敷に歸り來たる眞夫の動靜を伺ひて次の間に在りし妻花子は其の場へ立ち出て傍へそり寄り。思ひかけなき伯父公が密書を拾ひ玉ひしとは眞個の事ゴて候ふかと道へば肇は打点頭句如何にも容易ならざる密書を當春石上へ花見の際流れの川へ落したる其仔細といふは愧かしながら箇樣〳〵なりと河邊の未亡人道乃をば斬殺したる彼の休爲を物語れば花子も太く駭きて然る大切の密書を所持し御意見ありしは道理ながら其御說諭に伏し郎君には御切腹ある御所存なるか何遍は愚なる尋問かな斯まで企謀し我本望非除伯父公の諫言あるとも容易に變心なすべきか何其れでも只今父君の墓前ゴ於て相果ると潔く御返詞ありしにあらずや句夫れゴ苦肉の謀計を施すべき者所存なるゆゑ伯父を欺き歸せしなり句而てまた郎君の御所存は句アナ音高し謀ゴ〳〵と制しながらも四下を看廻し花子の耳ゴ口さし寄せ雲時叫き居たりけり

其三十三

有恁しほどゴ岩崎の妻花子い肇より何事か密意を言含られ翌朝疾く起て從者一人を召連れ微行に敎其が旅宿なる百足屋金助方ゴ赴き竊に對面の儀を言入れしゴ敎其い何事やらんと法衣ゴ着替坐敷に請し今は甥肇の妻とは云へ正しく前君左近將監殿の令妹なりと思へば其待遇ぶ厚かりしが花子は稍く聲を低め妾今日御旅宿へ推參せしは伯公の公へ密々聞ねあげ願度事ありてなり开は緯吏しく稟さずとも知食す如く御當主富丸君ゴは未だ御幼少ゴて在ませ爲め公儀向の事は御分家たる鳩翁公が御代理遊ばされまた本國の事は所天肇が不肖ながらも御名代を仕つりありたるが御聞及びありしかは知らねども富丸君には先頃より御石

例ゴ渡らせ玉ふゆゑ諸士の心勞大方ならず典藥の銘々も寢夜詰切り御用藥を勸め進らすれど今日に至るまでも更ゴ効なく白すも如何の事なれど御性來聰明ゴ在すと申しわぐる程なれば太く妾も氣遲しく共れと申すも血縁の恩愛一日も速く御本順に趣かせ進らせんと思ふより此ほど御容体を窺ひに昇殿致せしに親しく御座へ召させられ熟々御容子を看奉つるに如何にも餘ほどの御衰弱なれど御所爲は更に平生ゴ異り玉はず爾れども夜ゴ入れば必ず御惱烈しくして甚だしき時は物に狂はせ玉ふかと思ふばかりと御侍女衆の噂を聽き妾倩々察するに這は全く物怪の祟ならんと然る擧動の有るや無しやと取調しに先つ頃御庭前を御遊歩の折ふし最と年經たる一疋の禁蛙か御園の池に飛入らんとするを見認め玉ひアヒを射よとの君命にて扈從奉りし戶塚民彌が御殿ゴありし半丹を將て蛙の眞中を射たりし故蛙は其場ゴ落命なしゝが不思議や蛙の紙口より一條の白氣立昇りしが忽ち富丸公の御身に纏し荒ぶ見るや直に君には物に怖じ玉ふ御景色ゴて直に御寢所へ入玉ひ其よりしての御不例なりと承まはつて考ふるに全く其蛙ころ口碑に傳る彼御園の池の主にして數百年を經たるならんに君が益なき御一言にて命を落せし處より祟りをなすと存ずるなれば所詮藥餌の力にては御快方ある樣もなし只道德堅固の賢閣が行力修法によりて物怪を退散なさに如はなしと思惟する折から伯父の公の當地ゴ杖を曳き玉ひしと聽いて嬉しく御旅宿を親ひ知りて參りしなり何卒君の御爲めに御修法ありて惡魔退散の祈禱を願ひ申すなりと胸の刀を押かくし

六十六

夫れ君子をば欺むくべし誣ゆべからずと賢者のいひけん寔よ然り岩崎肇は妻花子に謀略を
さづけ當主富丸君の病氣は物怪の祟りなりと教眞へ告げさせ此の陰祷退散の祈禱を言入れ
しに教眞は肚の裏よて思ふやう吾嚮に甥肇が反逆は其子郁之助を當家の嗣子とし權政を恣
まゝにそべしとの所存より出でしと思へば妻子にも同腹ならんと推せしに昨日肇へ說諭せ
し切腹の事をも知らざると見え故々當主の御病氣御快復の祈禱を依賴よ來られしこそ全く
二心なきに極つたれ斯知るうへは富丸君の御病氣平癒の修法を行ひ其[illegible]しからで御全
快あつたる後甥肇が助命を願ひ退隱させんと有肇は血緣の愛着に集等夫婦が奸計に陷いれ
らるゝとは知らず竟に花子の辭を信じ異儀なく依賴を承諾なし濱邊の城が御園内なる池よ
年經る蛙の棲みしは最も口碑に云ひ傳ふる處と雖も當國の領主へ對し耐る業を爲そとは以
の外なり元來何程の怪蛙なりとも奚ぞ正法に敵そる事のなるべきかは仰の如く退散の修法
をなさば忽地に御平癒あるは必定なり爾りながら吾本寺よ於て執行ては易けれど路を距
し事なればまた三日四日を費さん其れよりは貴公の一室を拜借なして修法をべし憚りなが
ら歸邸のうへ肇殿へも其子細を御語ありて御準備ありたし善は急げと申すなれば明日より
祈禱の檀に上り一週間を以て滿願とすべし努々貴家よも御愼みありて血を看る事を忌み玉
へかしと倘百般に修法の用心を說き聞かせしゆゑ仕濟たりと花子は心よ[illegible]こぶものから色
にも顯さず歸て歸邸をなしたるうへ此趣きを肇へ語り齊策充分になりと教眞が指示の如
く檀を飾き準備萬端整ひし折から翌日に至り教眞は法衣を正しく入來たれば肇夫婦は出向
ひ設けの一室へ請じ入るれば教眞は更め肇に向ひ昨日花子まで傳し如く一七日の祈禱訖る

六までは堅く血を見る事を忌なれば足下も克々身を慎み必ず短慮あるべからずと其れと云は十八ねど切腹を禁むる伯父が仁慈の辭も肇は心に冷笑へど面にも見せず拜承の樣子をなして居たりけり恁て敎眞が一室に入り檀に上るを竢ち豫て吩附置たるよか鹿田屋の乾分九郎藏をはじめ四五人の乾分等は此一室を悉皆く釘づけにして恰も瘋癲人を拘禁しが如く出づる事さへ慨はずしたる肇夫婦が所存の裏は若殿の病氣平癒の修法を云ひ立て一室に入れ終に敎眞を餓死させて惡事露顯の根を絶んとなしたるにて窓に恐ろしき所存なるが宛も堅固にして道德賢しき敎眞なれど斯く姦策の術中に陷れられしは甚と痛むべき事ならずや

其三十五

單表西林寺の侍士に近藤勘助と云ふ者あり元は岩崎主殿（肇の父）の用人たりし近藤勘右衛門の一子なるが幼年の頃より多病にして所詮武家奉公は成り難しと父は出家を遂させんにて當時主殿の舍弟敎眞が西林寺の後住となりしを幸ひ同寺へ委ね遣つたるは勘助が十八歲の頃なるが然るゑ勘助は性質正直なれども左右に輕躁ゑして學ゑ就けども記憶に乏しく自已より年少なる雛僧們が眸に進み昇ると雖もまた之を遺憾とも思はず師ゑ督責るゝも更に意とせず恁ては僧侶の勤行は覺束なしと恰好侍士の暇を乞て下し者有たるを將て其後役となし召使居たるが勘助は却てそれを甘じ立働く事も精悍しけれど遂ゑ其まゝ下男們の取締をゞさせたりける有恁て後住職敎眞が濱邊地方へ杖を曳きし後二月餘經ちたる頃岩崎方より尺牘を以て敎眞和尚の身上に付き相談ずべき事あれば汝早々出張すべしと告げ來たりしゆゑ何事やらんと勘助は早速濱邊ゑ來りて岩崎邸へ赴きしゑ花子は夫れと聞くよりも

聽て一室へ招き入れ聲を低めて道へる樣。其方を故々呼寄せたる用事と云は伯父敎眞との儀は先頃より若殿の御病氣御平癒祈禱の爲め當邸内の一室ゑ於て御修法中なるが既ゑ一ヶ月餘を經ると雖も一滴の水一粒の飯だに食し玉いず斷食ありて檀上を下玉はれど其氣丈は常に替らぬ誦經の聲然れども折々勘助を呼べよと沙汰爲玉ふにぞ俄に其方を呼び寄せしなり夜ゑ入りなば一間の襖ゑ穿ちし穴ゑより其方は機嫌を伺ふべしまた此藥は若殿より下し賜る神藥なれば水ゑ混じて差あぐべし是等の事は家内にて取扱かふ者も多くおるなれど御修法にかゝらせ玉ふ以前に決して他人の來るを禁ずと堅く戒め置玉ひし事なるゆゑ故々其方を呼びしなり如何に御氣丈にもせよ一月餘りの斷食嘸疲勞ありしなるべし此藥をさへ進せなば假令一年二年の斷食ありとも身に障る事はなし去りながら此藥を若殿より下し賜りしと云ひて平生の氣質恐れありとて服用なきかも測られねば遂は其方が津和野より持來りしと申あげ是非とも用ゐるやうゑ申進めるころ爲めならめと云ひつゝ差出せ紗包を渡せば勘助ふし戴き若殿樣の病氣平癒の修法ある趣きは先つ頃の報知にて疾く知りしが御斷食とは思ひかけず仰の如く今夜御伺ひ申し上より賜る此御藥を其れと云いず進せんと欺かるゝとは露知らず正直一途の勘助が纏て自已が休息所へ立歸りたる後の話說は如何ならん

其三十六

而說近藤勘助は花子の手より受取し該紗包の一藥を水に混ぜて器ゑ入れ日沒なば敎眞に飲丸せしめんと待居たりしが其性忽卒の男ゆゑ該藥の入し器を過つて取落せしに水は流れて樣

を遮ひ咲亂れたる秋草の花に滴れば這は什生忽ち萎み枯葉となりし粹の不思議に駭く勘助合点ゆかずと器を把りあげ復度傍なる白菊の花に滴れば是も同じく萎んで枯しぼみ色を失ふ体なるよぞ正しく毒の含まし藥と曉りしものから不審を起し爾るよても何が故に斯る物をば飲ませよかしと御新造樣の吩咐なりしか何にもせよ心懸りは主人の身の上と思へば其日の沒るを竢ち聞き置たる奥の一間の修法の檀へ近づき見るに嘗の如く一寧の穴のあり し故維なんめりと内を覗けど護麻の煙りの朦朧たるのみ裡なる敎眞の有無さへ定かならねば聲をかけんとする折から一室の内より勘助〳〵と呼ばはるにぞ嬉しや御無事で在せしかと穴の邊へ身を寄れど再度敎愼の聲音にて否とよ吾は岩崎夫婦が惡逆無道の奸計に陷り終に命は斷つたれど國を念ひ君を愛よる其一念の鬼となつて汝の來る日を竢しゑ此守靈の裡よは國家の大事に係るべき甚と大切の密書あれば今より汝此家を扱出で江戸表よ赴き在勤の家老松倉丹下よ手渡しすべし甲夜汝に毒藥を與へて吾を殺さんと謀し舉夫婦は國家を奪はんとする逆臣なり吾一念の冥鬼となつて此にあるを故生居ると心得て汝を呼びしも自から渠等が惡事を露顯させんと神明佛陀の妙智力所謂天の配剤なり汗も吾れ舉が毒計に罹りし事を識りたるは當邸へ望み來て修法に就きし共日よあれど最早助かるべうもなきを語り渠等夫婦が天誅に加はる日まで當殿の息災無事を祈んゑめ身を犧牲に一七日の修法を竢り舌を斷ち絶命なせど此密書を松倉丹下へ渡さんゑめ未だ存命居る体に冥鬼となつて故らよ汝を此へ呼び寄せしは此儀を告げんゑなるぞや諄々吾意に背くなく忠義の道を忘るゝな卒とゞかりよ穴の裡より差出したる守靈を勘助手疾受取りて偖は貴殿は然る奸計に罹り

七十二

玉ひ最早此世に亡御身にて候ふか始めて知りし當家の旦那また新造の逆縁貴君に事を進せんと思ふが爲めゝ私を遥々呼なされしい他人の手にては水一滴貴君が呑飲なさらぬゆゑ死んで御坐るを御存命と思ひ詰ての計略が反て其身を亡滅玉ふ原となりしも天罰ならめ主人節とは申しながら御國の爲にい替難ければ是より直に江戸へ赴き此守袋を持参なし松倉へ訴へ出で貴君の御怨みはらし申さんとは云ながら御悼しいと歎けば歌具聲荒く不覺の歎きに腰々なして見認められなば一大事疾々せずやと云ふうちも漸次〳〵と聲細りぱつと燃立つ陰火の光りゝ思はず裡を覗き看れば血ゝ染む顔ゝは瞋りをふくみ合掌のまゝ檀上へ畏と倒れし景狀は今は全く呼吸を閉ぢ閻浮久しくなりしなるべし拘助は稍うに涙を禁め身準備なし精悍しくも塀を乘り踰ゑ同家を脱出し江戸屋敷を志投てぞ趣きける

共三十七

武藏國と下總の間を流るゝ隅田川と稱し昔はいざ知らず架たる橋ゝ兩國と名のみ存して今はしも江戸第一の繁華の地西と東へ往來の絶間隙なき彌生の空人の出盛る未刻下り廣小路なる見世物小屋の屏所より年未だ若き女の順禮甲乙看廻し立出でゝ物珍らしさに迂濶〳〵そるうちゐ作さんを見失ふたが國とは違ふて大層な此賑しい人中ゆゑ何程捜しても見當らずコリヤ奈何したら宜からうと彷徨折から元柳橋の方より一歩は高く一歩は低く鼓元さへも定まらず兵兵なから來蹠る武士に思はず磯と衝突ば酒ゝ酔たる癖として肱に角立て目を瞋し看れば乞食の分際で兩刀挾ひ身共ゝ對し無禮をなすは憎くい奴と威文高なる權幕に彼順禮は大地ゝ手を突連れの者を見失ひました故索探そゝ心を奪れ旦那様の御臨を夢ゝも存ぜずッイ疎忽を致ました其平御免下さりませと道ども武士は倒な肯ず否々堪忍は相成ぬ察する處其方は此雜沓の中を働く那の掏盗とか中す者であらう婦女と思ひ油斷をさせ素町人の眼を瞑ませかは知らねども兩刀帶せし身共の品を奪んなどとは大膽千萬詫人の爲めなれば手討に致そと刀の柄に手を掛れば女はいよ〳〵駭きて衝突しは卑女が如何にも惡う御座りまそれど決して貴官の品物を盗まうと致そ者では御坐りませぬ御覽の如く此笠に記せし卑女の國所石州濱邊の城下在父母に別れて姉妹も西國路から遥々順禮をして菩提を吊ふ者昨日當地へ着いしたれど西も東も分りませぬゆゑ知己の者が兩國ゝ居るのを便りゝ索て來る道此賑しい往來の中にて何時の程にか伴の姉を見失うての當惑に心配をしてをりまする折柄なれば盗をする掏盗とやらでは御坐りませぬ情願ば免し下さりませと賠詫ど更ゝ肯入れずかさに掛つて罵りながら咄差刀を抜かんとする此時武士の背後より人押分けて立出しは姿風俗も人目立つ華美にはあれど華美ならで縹致も年も二九からぬ今柳橋の歌妓に聲價高き志女吉と云ふ酬娜者なるが手討にすると立噪ぐ件の武士を押禁め誰かと思へば伊東さん此兒を切るとは紫烟らしい其樣な串戯は廢にして妾と一緒に青柳さんへハテ人立がして見つ共よくないコレ順禮の嬢跡は妾が引受るから此樣はずと早く〳〵お出と地獄で佛の仲裁に女は歡ひ志女吉を伏拜みつゝ立ち去りし後の話説は次回に記さん

濱邊の荒海

共三十八

七氣ゝいらぬ風もあらうゝ柳かな其糸蹴の橋同朋町の中央に表へ掲けし提燈い小紋代と記三せし藝妓屋の内には母とも思しき者が火鉢の傍ゝ差俯向きし藝妓ゝ對ひ膝角立て。コレ小

登代先刻から此樣ゴ口を酸パくして饒舌て居るのに返事の無のは不承知なのかへ、餘んま り不承知だなぞと大きな口は利かれまい今更云はずといゝ事だけれと和女が居るか も知れないから云つて聞かせるが全体和女い西舎者然も江戸からは二百里餘の石州とか云 ふクヤ〳〵育ち以前妾が津和野樣のお邸奉公の頃懇意ゴした野間館次と云ふ男が吉原へ遊 れて行き娼妓ゴ寵ると話た玉の如女を見るゴ綺麗なり妾なり廓へ傳るは殺生と隣の志女吉 さんの母さんに相談して野陋の方を金で仕切り宅へい連れて歸つたものゝ旦ても暮ても泣 てばかり樣子を听けば邪の人に欺されたと云つて碌々ゴ妾の躾もうけぬゆゑ果は妾さへ業 が熱へ郭へと思つたのを志女吉さんが禁めた後和女ゴ逆見をして呉たので稍と坐敷に出 は爲たれど厭な詭言を八釜四釜に稍う此ごろ一人前の江戸藝妓らしくなつたのは誰の庇護 だ志女吉姉さんの引立てと此母が苦勞ぢやゞヨ其れも是れも宜旦那持たせて妾も左團扇樂 をしやうと思へばころ那の志女吉さんの旦那松倉秀雄樣と御朋輩の伊東甚之助樣が世話をしてやらうと仰しやるものを酢の蒟蒻の 家老樣其秀雄樣と御朋輩の伊東甚之助樣が世話をしてやらうと仰しやるものを酢の蒟蒻の と得心せぬは餘んまり氣儘が過ぎやうぜ和女も石州生れだから伊東さんのお氣にさへ愜つ たなら未だ獨身の若旦那御新造なり奥樣になれるは和女の腕次第故郷へ歸りも出來やうか ら嫌と云つて御心ゴ隨ひなコレ泣て居ちやァ判らない其樣に地烈たい强情者だヨと煙管で 擽を叩き立て眼に角立て罵るは何處も同じ藝妓屋の旦那樣と知られけりこの時廊子一番を 隔し奥ては一閥武士が獨酌なしてありけるが聽て其場へ立ち出でゝ小登代の傍に坐を占め ながら。コリヤ小登代如何致したものダ去年梅川ゴて不圖面會した砌好女ざと思つたゆ

ゑ松倉生の愛妓なる志女吉ゴ尋問へば孫分の小登代と云つて石州生れと聞いて一層念が增 し是非とも吾に周旋せよと度々志女吉へは頼めども風ゴ桐の其日迄り只得妾母へ直づけに 此相談を爲かけたのだ今も老母がいふ通り不肖ながらも濱邊家の用人頭伊東猛が長男廻坐 勤めの此甚之助君女が應といふ時は母俱共ゴ案樂ゴ暮させやうといふ所存十二や十三の未 聞女ではなしコリヤ慾を知慾と知としなざれ聽ぱ顔を仰げ母さんなり貴官なり御深切なお 言詞ですが妾は如何も其ればかりは何フムスリヤ是れほどに申しても何伊東樣のれ心ゴは 濱かぬと云ふのか何況んでも身妾は厭で御座んす何ヱ、いけしぶとい然う吐かしやモウ了 邊簡がと立ちかゝる折から表の格子を披け何母さんまた十八番かヲ何オヤ志女吉姉さんサア

の　ヤア此方へ

荒濤

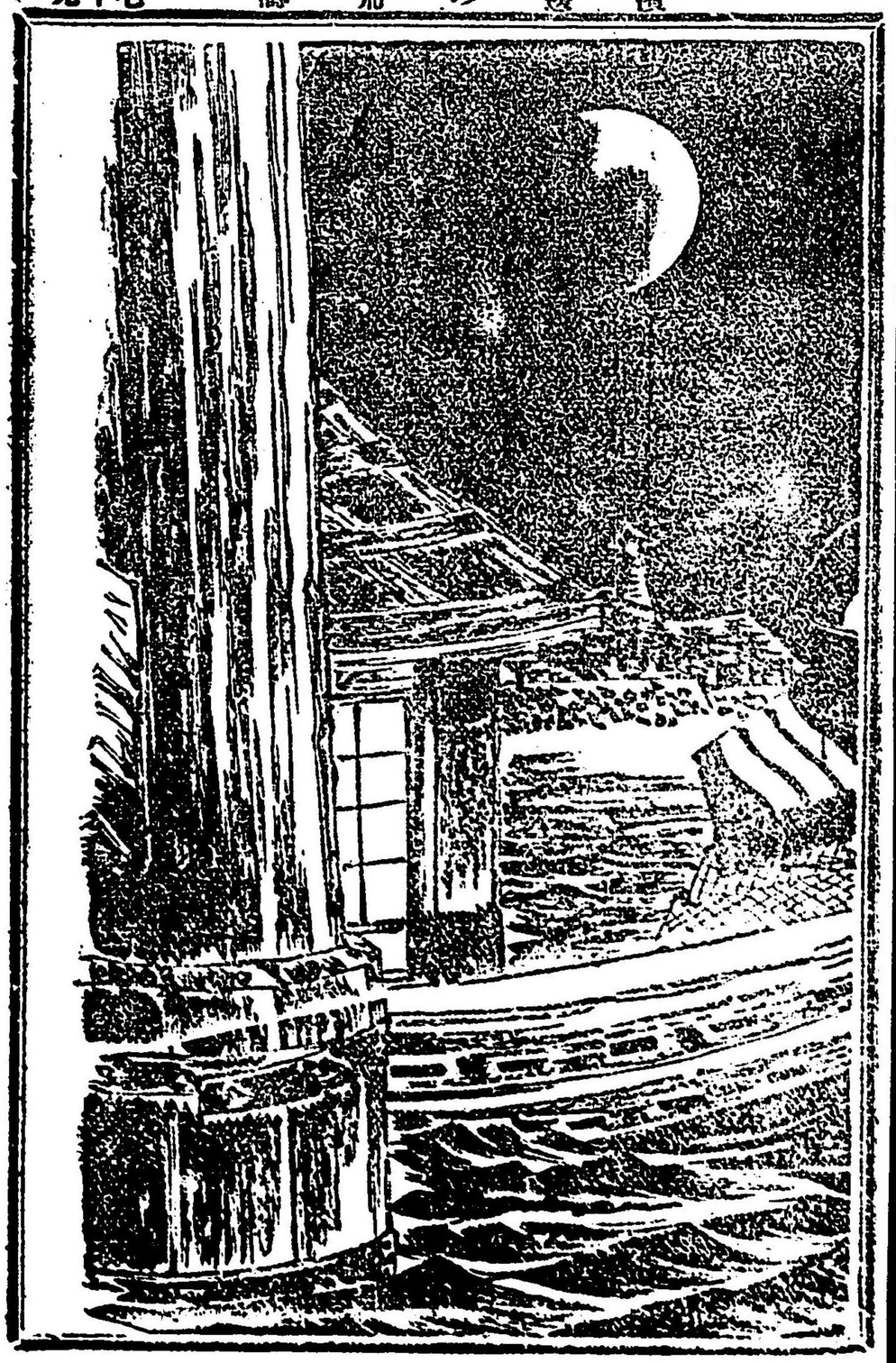
其三十九

東両國に名も高き青柳樓の供部家に仲間体の一個の男と對ひ合ふたる破落戸体の男は煙 草を薫らしながら「何爲で奈何達ふかは知れねェから悪い事は出來無ェと云が實にお前に 江戸の地で出會さうとは思はなかつた然して今い岩崎の邸にれ前は居無ェのか「深い樣子 を知ら無ェから然う思ふのも無理ぢやァ無ェが實はお前が河羅の娘ふ登代の野晒の權次と 丶もゴ櫻つて往つた跡で憫然や那の道乃は岩崎の旦那の手に擺り敢ない最期を遂げたゆゑ 河羅の家も斷絶同樣また駒勇は旦那が登城の帰りゴ亂暴しかけたなれば討留められて獄門 となり吾はまた旦那から内意をうけて江戸邸へ仲間奉公ゴ住み込んだは自然旦那の腎がお

つたら直ぐゴ知らせる隱密方首尾よく邸へ抱ゑられたうへ今ぢやァ松倉丹下と云ふ岩崎樣

は抵抗な旦那の家ゑ仲間奉公耳を追つ立て探ぐつて居れど未だ金儲けゑ成さうな注進口も目つから無ェが今日も來へ來てゐる若旦那の秀雄と云ふは親父と違ひ隙かあつたら遊興が好で柳橋の志女吉と云ふ藝妓に馴染屢々と通つて來る處から偶には吾が供ゑ立ち親父のばつをば合せてやるので近頃は大信仰サ此動靜なら何んでも今に宜儲け口を聞くであらう孫ゑお國からはまた近頃岩崎の旦那の同志と听た海野主計樣が出府をしたから孰れ已等も相應な御用の出來るに極て居るが然してお前は何處に居ると問れて德は頭ゑ手を置「爲られてオイソレと饒舌も何だか極が惡いがお前も知つて居る通り岩崎の旦那から頼まれ權次と、もゑ河筌の娘を引攫へに出かけた夜測ず駒勇が邪の娘を連れて帰るを見認けたゆゑ途に待ちうけ喧嘩を爲かけ攫つて行うとする處へ何處へ行のか是れもまた來蒐る駕ゑ三人が躊躇うちゑふ登代が乘つた駕の走るを追つかけて權次と吾は駈出したが駒勇は今一の駕挺をお登代と思つたか其跡を追ひ往つたゆゑ此方は充分思ふ坪尾張の熱田か岡崎當りへ賣こかさうと協談したれど玉が宜から吉原へと權次がいふのて遥々と江戸迄共に出掛た後以前權次が懇意だといふ藥研堀の熊婆アお勘に頼み賣らうとしたを面を見てから吾の方へ引取度との掛合ゑ一時も早く手放して肩を脫けやうとお勘婆アへ賣渡して其金を山分にして野晒は直ぐ故郷へ歸つたが吾は綽号の猛々野郎朝から晩まで歇つゝけ其うへ部家へ入り込んで好の賭奕にまた元の杢阿彌となり詮方なし今ぢやア兩國近邊を破落戸てゐて當家へは折々出入をして居るがお前ゑ這ふたア不思議な緣と話說に餘念なき折から次の一室に着替をせし藝妓は耳を聳て、兩人の話話を聞き居たり

當下仲間は手に把りし猪口をしたみて德へ獻し「其れちやア權次は帰つたのか吾が國をば出る頃にやア未だ屋舗へは面出ししねェが孰れ何處で引攫り帰りを忘れて居るのだらうが然うして邪の河筌の娘は其後何處へ嵌られたか「熊鷲と云ふ渾名のある婆アの來ゆゑ金函を岩のと寐かせちやア置めへが吾も少々其婆アゑ不義理な事が重つて居るので些とも身居を跨は爲無ェが何んでも娘は此土地から藝妓ゑなつたと云ふ事サ汝も餘つほど迂濶ちやア無へか何程跡腹の惱ねェ玉だと云て何處から何と云ふ藝妓になつて居と云位は穿鑿をして置かいゝや其れやア然と汝も是から心懸ると宜金儲の口があるが何と一口乘ら無ェか「金儲けなら何事でも決して厭たア云はねへから奈何いう譯だか聞かしなせへ大きな聲ぢやア云へ無へが曾て鹿田屋の乾兒ゑなり岩崎の旦那の手先になつて御用を勤る汝だから儲けを分て云つて聞かせるが實は旦那の伯父ゑ當る津和野西休寺の住職敬眞とやらが旦那へ何か荒意見をして邸の内にて蔵禮中勘助と云ふ若黨が國から和尚を訪ゑ來て當夜和尚を殺し國許を出奔したが設江戸邸へでも出かけて來て餘計な事を饒舌時は旦那い勿論吾等まで何んな濤難義ゑなるかも知れ無ェ汝も所々を彷徨から設石州者と聞たなら穿鑿をして吾等の方へ直ぐに報知ゑ來るがいゝ其年齡は恁々なり其容貌は云々と岩崎方より告げ來たへし仔細を聞り嚇さて萬一其奴を引捕へ強情張やアき切つて跡腹搦め無ニ樣にすりや旦那の方から帶を諦た褒美の金が有のたから努ずぬからぬ樣にしろと云折柄ゑ次の室から當樓の下婢が聲七十七をかけ「勝平さん旦那は是かられ船で向島邊へ入らッしやいませからお前さんは先へお邸



へれ歸りなすつて毎もの樣に賴むと仰しやいました然うして是は志女吉さんから賜り途て煙草でもお買下さいとの事ですと差出だしたる捻り紙の内は何程か知られぬども勝平は受取つて今夜も何うせ櫻田の上屋敷へは歸宅なからう茅間の汚中屋敷に御泊込みと親旦那へ其首は吾等がばつをしませうか光どん志女吉さんへ宜しうと猛々德へ眼で知らせ兩人齊一身を起し準備をなして歸り行きし話題轉頭奥にいまた松倉秀雄い貴皆まで遊興なして照る月を看よ船を泛べんと裏手に繫し家根船へ乘うつれば逸り出る兩人の藝妓い志女吉と今一人は小登代なるが志女吉は小登代の耳へ口を寄せつゝ何やら私語小登代ばかりを船に入れて左樣ならばと懸聲を船頭は心得てもやいを解いて漕出しけり

其四十一

月もよし語も首尾をまつの邊漕上り行く家根船の裡には秀雄が低聲まて偖は卿は河羅の息女登代にてありけるか然う承まはれば何處やらに見覺ゑのある樣なれど父丹下が江戸詰合を申し附られ家族を纏めて出府したるは丁度十年跡なれば確ま熟知なし難し爾りながら先頃より石州生れと云ふ事は志女吉よりも聞きしかど果敢なく横死を遂げられし孝太夫殿の娘とは知る事なければ今日までの無禮を許し玉へかし爾りなから卿の薄命繼母の爲めに家出をしたるは其れぞ繼母が厚き慈悲にて全く姦臣岩崎の謀みの底を探らんとの深き所存のありしならんが其事さへも成就せで渠が毒手に罹られしは今日志女吉が仲間より聞きしによつて始めて知れり孝太夫と云ひまた繼母まて盜賊不義の汚名を被り剩さへ非命ま死せしは之も前世の約束ならん幸ひにも卿世に存命ゐるなれば父母の怨をはらして河羅の家名を興すが肝要ぞや當表ま於ては岩崎の野心ある風聞は曾て聞けど孰れも確証を得たるまわらねば容易に糺彈もなし難く然るに近時同僚たる伊東甚之助が翠動に不審の廉の多きのみか頻に率へ親密の往復ありと聞き込みしゆゑ志女吉ま申含め渠が卿へ懇慕を奇貨周旋なして奥底を探らんものと存じゝなれど命ま かけても甚之助に靡かぬ卿が決心なりと志女吉が吾への物語其れゆゑ實は今日卿を說諭のうへにて甚之助が周旋せんと青柳より聘きし折も恰好に吾仲間の勝平が岩崎よりの犬なりし事また卿が母公の最期駒勇とやらんが不慮の横死特には伯父を殺害せし勘助とやらが行方を索るまでの先ま卿を句引せし程々德事までも具に志女吉が窃聞て吾へ云々と告げたるにぞ直ぐ引捕へて取糺さんと思ひはしたれど熟考すの高の知れたる仲間や下郎を押へて証據立せば反て大事となりもやせん其れよりは卿を說き色に事寄せ甚之助が率に同意の奸計を探り出そころ良策ならめと故と志女をば青柳に荒殘し大醉の体ま て船を出ださせ卿へ說諭と思ひの外卿の口から素性を明し御家の爲めに身を汚し甚之助の心に隨がはんと先を越したる其言詞は察する處志女吉より疾くにも委細を聞かれしかと問へば小登代は顏をあげ玆ま說き出譚は次回に

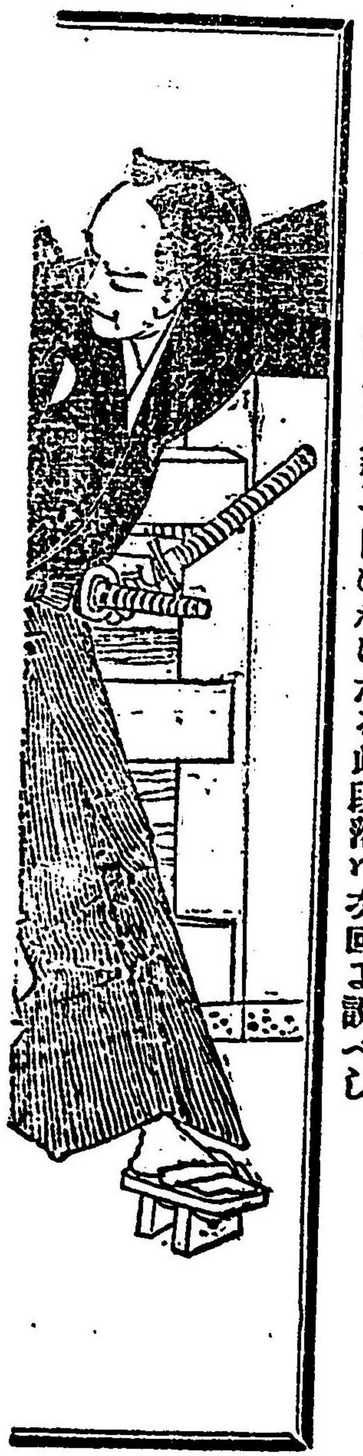
其四十二

れ登代の小登代は聲を低うし「卑妾が身の經歷は汗も此營業になる始め志女吉さんを姐と賴み披露をしたる其時ま實は恁々云々と眞個を明して姐さんへお賴み申して置ましたれど母が横死といふ事は露聊かも存ぜぬゆゑ素性ばかりは誰殿にも努ず明して下さいます十八なと諄々賴んで置きましたが今日測らずも青柳ま て姐さんが窃聞ま詳細知れた家の騒動風

壁に逃はず岩崎が謀反の底を探究んと貞女を破り後を慕ひ身妾へ詳く當り玉ひし母も敵なく弟が爲めよ御最期ありしうへからは身妾も河内の娘身を棄て岩崎へ荷擔の奴を探り出だし父母の汚名を雪んと心を定め志女吉さんに仔細を告げしよ姐さんも實は旦那は今夜お前よ譯を頼むと仰しやつて遽に催す上手行他聞を憚る大事の話說をするのは爺が屈竟と勸めよ隨ひ魂かしい此身の素性をお明し申すも平生忠義の浮親子とは爺が知てをりませたゆゑたゞ申して母の仇岩崎が惡事の証據を取押へたなら父の仇も直ぐよ知れるで御座りませう仍つては貴官の仰をまた吏甚之助の心に慧がひ色で詳し唯なる証據を取つて見せませうと云へば秀雄は大よ感ひ共れでころ亡父母の汚名を雪ぐ策なれ斯度々に岩崎の惡事露顯の結端をひらけば驚て惡人誅に伏し御家の榮を見るは目前只岩崎は先君の御妹を貰ひうけ妻となし居る事なれば疎忽の手向ひなし難し吾々親子また御後見の鳩翁公にも御心勞なり卿が這回の機能にて首尾能伊東が所存を探らは渠よ一味の海野主計を俱に捕縛し糺問なすべし努す油斷致されなと尚も囑き居たるうち船は疾くも向島なる植半の樓橋へ着にけり小樓代は秀雄を誘ひて先づ樓上の座敷よ通り酒殽を命ぜて再びまた酒宴を開きし其の坐敷一間の襖を密と閉けてやをら入來る船頭が祝義の禮を述なから前後を看迴り語り出す仔細は抑も如何なる事か次回にくわしく說出すべし

其四十三

腰を屈めて入來りし舟頭は兩手を突き「れ喚もなきに御座敷へ失禮にも參りましたは頂戴致した御祝儀の御禮代よお兩人樣へ申し上度事があつて只計りよては御分知も御ざりませまいが何をお包し申ませう私しも石州生れ而も濱邊の御城下靈頃よ當日暮しの小百姓卯太郎と申す獨身者畑仕事の片手間よ植木師よもなりまするゆゑ今回御家老が御新築の祝御別邸の人夫になり出懸る筈でゆざりましたが生憎病氣にかゝつたゆゑ拒絶たのはいまで思へば私しが身の大僕倖同じ植木師の彌之助は人夫となつて行し爲めと之れより當話妻の二以下共の十四の編まで記載せし如く彼の彌之助が御別館新築の普請小家を抜出だせし事を濱落度とし受負人鹿田屋忠五郎に責殺されまた彌之助の亡靈が妹へ横死を告たる事同人の母おくらの死去岩崎が妹までにも其罪を科せんとそるの立腹ある事を傳へ聞き大坂なるから邊くの弟嘉作の許へ妹れ辰を伴ひ行かんとそる途札の辻に於て怒を取逆へ追ッかけ行し事由を語聞かせば小登代は傍より聲をかけて「成ほど其夜妾もまた駒勇よ誘はれ人喰ふ厭へば の 駕に乘り渠が住居へ急がんと投蒐つたる札の辻野晒とかいふ惡漢が妾を奪ひ連れ行かんと 駕を止めて飛暴浪藉遂に妾は惡漢の手に奪はれて今の身のうへ「其後樣子は松の中にて旦 荒 那樣への御物語を測らず聽いた此卯太郎夜私が手よ入つたは今も所謂する此煙草入共ま 濱 ゝ拾つて駕を追ふたが何う行途を間違たやら思に怒よい追ッ着かず設ずがゝりもと煙草入を檢め見しに裡にあつたる手紙の宛名は確とは知れねど今夜岩崎樣からの御書にて娘の を市櫻へるから必ず吾が内へ來よ首尾能玉さへ手に入つたなら[illegible]れ江戸[illegible]ぎ出し女郎よ賣て二ッ山と認めありし一通ゆゑ再はれたつを連れて行くのを早く[illegible]の[illegible]通し 八十三 か何それば可憐や爰より遠き江戸まで往て苦勞をすべし私も一旦は乘りか[illegible]清甲斐なく此まゝれたつに逃はぬ時は深切ごかし仰々に勾引たるものであらゝ[illegible]



八十四

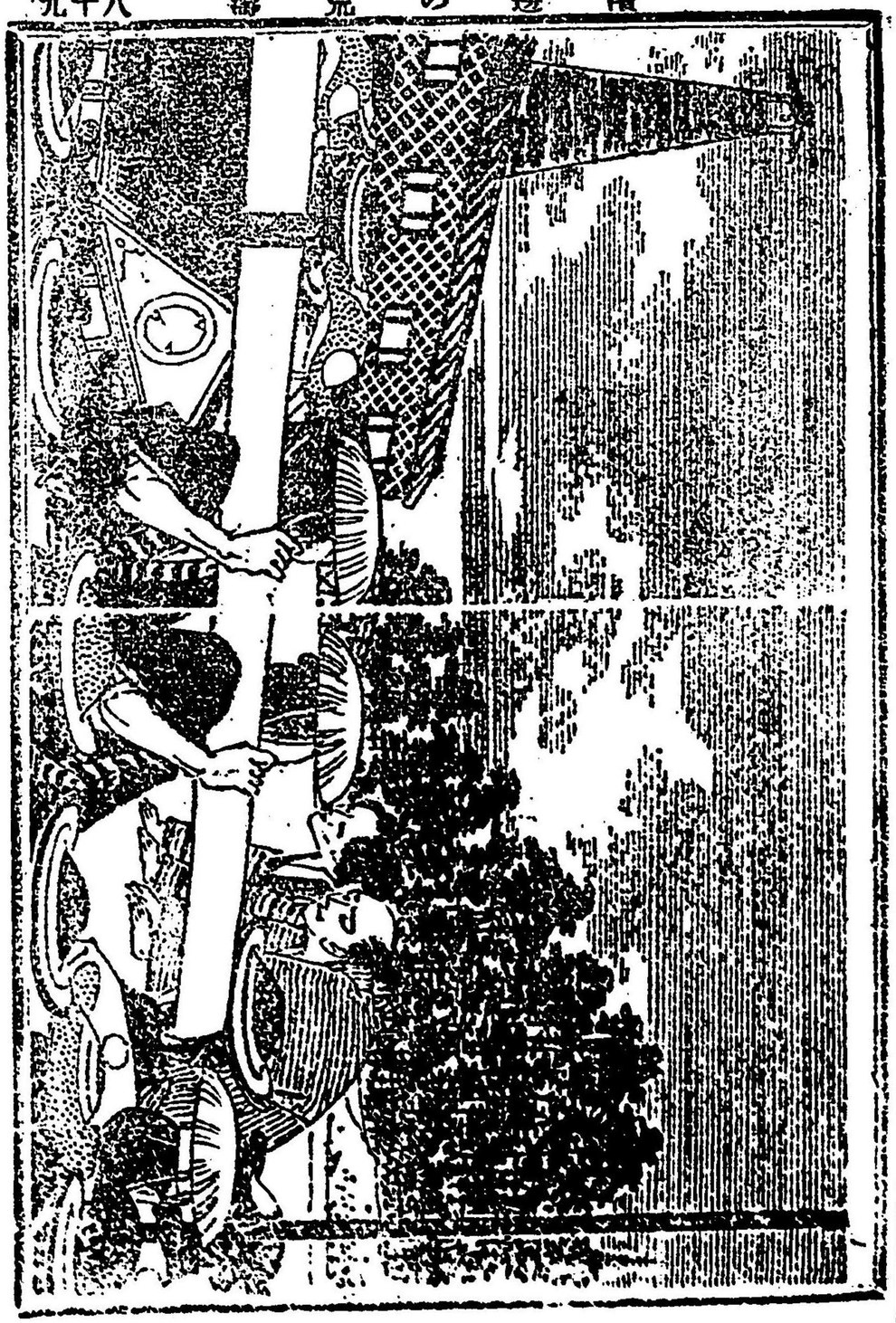
憾なれば非除力は及ばずともおたつを苦界へ沈めさせては化なれた両人へ濟まぬ譯此手紙の文言で見るときは必ず江戸ゑ居るであらうと例の娘とある文い卿と知られればたつの事と思ひ詰たる想像より大坂へも立寄らず直ぐ此江戸へ參りましたが如何探ても更ゑ分らず聊か所有た貯への金さへ悉皆消ひ費し只得口入の宿を頼み手馴た業の植木師へ暫時倚はれてをりましたうら柳橋の日野屋の内へ傭れた後宗旨遊ひな此營業を致しまそるも國に居るころ暇さへあれば沖方へ漁に出るのを好み船漕く業をば知つたる虎爾れとも索る其人ゑ邂逅ぬれば旦夕に心を勞してをりましたが先ごろ伊豆屋のれ客をば高縄邊まで迎ひの仕事で永代橋をば下る折から雨はもてとも影を射す月の光りに川中を看れば正しく婦女の死骸身投と知れば棄置れず船を漕つけ腕をとり引揚げ見るに未た死んで間のない事か胸のほとりに暖まりのある容子ゆゑ直ぐ橋際へ船を看け同船夫を走らせ醫者を招き此時始めて婦女の顔をよく〳〵見まそればモシ索るれたつで御坐りましたといふに秀雄もれ登代も驚き而て其れよりは如何せしかと兩人齊一問ひかけたる此段落い次回ゑ說べし

登下卯太郎復道ふ樣「思ひがけなきふたつの死故に私しも大喰藉白殺介物を致し」ゆゑ稍く正氣に復しましたので客の迎ひは同船夫に担み直ぐふたつをば最寄の知己の家に送れ行て爾て仔細はと問ひましたよ渠も測らぬ耳曾よ嬉し涙よ暮れながら語るを聞けば彼の噪ぎに卿樣と取違へて駒勇どのが宅へ連れ行き定めて私しが來るであらうと二日三日と禁められし折からおさくどのが來て河羅の後室樣は御家老の爲めよ敢なく御最期を遂げられしと聞くに彌よ駭きし駒勇なりれさくどのは確に仇は岩崎と知れてはあれど下賤身で容易な事も云へまいから是非とも卿を索出して協議のうへたさくどのと俱に順禮姿となり西國筋から諸國を經巡り先ごろ稍く此東都へ上つた當日兩國にておさくどのを見失ひ彷徨折から生醉の武家よ出逢つて既での事手討よなろうとした處を美華な姐さんよ救けられ其場は免して貰うたが西も東も知らぬ地よておさくどのよ離れし事ゆゑ是から向を何うしやうと案じ過ごした女氣から目途なき町を呻吟うち日は暮果て氣も鬱り寧死ぬのが增しであらうと永代橋から飛び込んだと詳細樣子が知れさしたゆゑれさくどのと云ふ卿の御家よ仕た女中も此江戸に來てゐる事とは分りましたが何分何處よ居らるゝ事やら殊には卿の河羅のお嬢樣よてありしとは今日承まはるまで私しも知らねば話申しもせねどふたつどのは馬喰町の知己の許へ預けておき專られさくどのゝ所在をば索がしてはをれど今よ知れと雨れど話せば一ツ國一ツ事件の紛れから自然と茲よ集まつて來るのも全く岩崎樣の罪をば大て憎み玉ひ惡事露顯とかいふ事でありませう今におさくどのゝ所在が知れたら久しぶよて主家來の盡きぬ話說よ松田樣の惡人退治に肝要な御手續きもありませうとれもふたあまり無遠慮にも此の御座敷へ參りました罪はれ免し下さりませと一伍一什を卯太郎が語ると聞いて欣ぶ秀雄就中お登代はおさくの事を聞くに一層暮かしく殊よは彌之助が妹と聞けば是非とも逢ふて何くれと訪問ひたき事もありと嬉し涙の樣子を見てとり秀雄は同人よ打向ひ聞けば聞く程溺命なる其人々が江戸の地へ聚り來るも御家を思ふ忠義の精神によるなるべしは是より船を兩國よ歸し小登代は其れたつどやらに面會なして國の事情を聞き糾したうへ諸々も伊東の事を賴むなりと辭て同家を立ち出でゝ兩國投て下りけり話說復題近藤勘助は敢邊兵が遺命をうけ守鶴を所持し濱邊の城下を去り夜を日に繼きて江戸表へ志投せしが道州路に於て測らずも大病に罹り身體自由ならざるのみか言語を發せる事だに難く心惱れさせの人も同然嘆しく客舍に滯留なせしが翌月の下旬に至り稍快方よ赴きしゆゑ道回は路傍に銃荒るゝとも江戸の屋敷へ着するまでは一歩も脚を止むまじと心を決し程もなく東海道を下り〳〵品川近く名に響く鈴が森へと投かゝりしは夜の子刻に近き頃なり此時森の屋所にてアレヨ〳〵と聲するは正しく婦人の叫ぶなれば合點行かじと勘助は思はず脚を止けり

其四十五

夜は更たれどさへ渡る月に四下を佶度看れい海邊兵近き發へ一倆の婦人を押轉がし二三人の暴漢か手折り脚把り今既に强姦なさんとそる体なれば勘助は大に駭き憎くき賊の卑動かな大事ゆ抱ゆる身よてはあれども目前婦人が危急の場合打棄通るは無慈悲の業りと思へば少しも猶豫もず腰に帶たる旅刀の柄よ手をかけ逸散よ走り行きて聲高く涙鏡者メと云ひな

からゝ引ぬいたる刀の光よ夢中よなつたる暴漢は仰天なして捉たる婦人を手放し逃出だせば勘助は五六間追蒐け置て跡へ戻り亂れし姿をかいつくらふ婦人の傍へ立寄りて女中、ヨ悪漢は退ひ斥けたり彌れども茲に長居せば又彼者等が大勢にて出懸て來んも測られず少しも早く余と丶もに家ある宿まで來たられよ此場の樣子身のうへは其うへ所がんと怨がし立つれは婦人は左右の辭さへ嬉し涙にかきくれながら勘助の跡よ屬ひ連て品川の驛に入りしに子刻過ぎゆゑ各戸も起きたる氣色なけれども了得は五十三驛の筆はじめなる土地柄だけよ表賣酒屋は店をもしまはで開いてあるを幸ひと勘助は該家よ入り店の間の奥の方に日座を占て婦人よ向ひ余は至急の要を帶て江戸まで赴く者なるが卿の難儀を見かけしゆえ惡漢輩は追ッ散し無難に茲まで伴ふたり此末卿の行方まて送り届けて進たけれど今いふ如き急ぎの身なれば卿は茲に夜明けを待ち其後出立するところよけれ心焦く中よて問ふよも及ばれど升も卿は何國の人か看れば笈摺を被らるゝからは順禮よ廻るならんが如何なる事よて今夜の如き災難よ遭ひしか語られよと茲と深切なる勘助の詞に婦人は涙を揮ひ命の親とも申すべき貴郎の事ゆゑ身の素性を瀛まず お話致しませう卑妾い石州濱邊の城下駒場とヤを相摸取の妹にて名をばお作と稱者なるが少し索る人の有て同じ土地の娘と丶もよ西國路より遥々の海山を踰え月日をかさね稍々今日東都へ着き母方の親族の者が両國邊よあり主をるゆへ其れを便りよ出懸けし道よて伴の娘を見失ひ甲處乙處と搜し主しても何處へ往たやら皆くれ知れず只得親族の其家に落着たうへ索んと其處まで行きしに親族の者も今は江戸にはあらずして賴みの綱も忽ち絶れ途方に暮てをり主したを傍よ居た恵丁が虹さん誰かを



捜すのかと尋られたよ力を得て實は年齢云々の伴と娘を見失ふて當惑しますと語しに其娘なら先刻から此邊等を呻吟て居たが恰好吾等の仲間が見認め今其家へ連れて往たからマア安心をするがよいと道はれて卑女も嬉しさの中にも早う逢度と思ふ心を察してやふ事も是から其宅へ用事があつて出かける道だかられ前も一緒よ來るがよい何うせ拙いで行く空駕に乘て行かうと深切な言は謀計のある事と知らねば浮架と其駕へ乘つたは全く卑女が油斷何方から何方を廻つたやら更に知らねど夜に入つて前刻の所へ駕をおろすと信号と見込てまた一個悪漢が來て引捉へ伴の娘に逢わせてやるから其禮心で三人の云ふ事を聞けと押へつけ泣けど叫べど詮方も竟に手込めに遭ひまそる處を地獄で佛の貴郎の御救け此御禮は中々に口では申し切れませぬ其よつけても案じられるは伴の娘の身のうへにて設悪漢よ欺かれ妾の様な災難に遭ひはせぬかと今となりては吾身の上より彌まして心がゝりでなりませぬと道ふさへ聲を曇らせて咽ち歎けば勘助は世には不思議な事もある者何を驚さう余もまた卿と同じ石州濱邊仔細あつて近年は同じ國なる津和野にあれど其駒勇の事も知つて居るが然うして卿は本國を何時出立をせられしかと尋にれ作は國を立つたる時日を語れば勘助は打黙頭て復問ひ出を其趣きと此給の譯は次回よ記さん

其四十六

勘助は復お作に向ひ其頃出國したとあれば兄公の最期は知らずよやと問へばれ作は打驚き何兄さんが死よましたとは云へば勘助黙頭オヽ喫驚は道理だ其仔細は箇様〳〵其勘評は云々なりと岩崎舉を討んとして望を遂げず横死をなし首級を野邊に曝されしまでの一伍一

什を物語れば餘りの事よ涙も出でず宛然氣抜けの如くなりしを勘助ば慰めて然うして卿が索るといふ其人はまた如何なる者か包まず仔細を語られたなら不肖ながら微力よなつて俱々索てあげませうと道はれてお作は稍うに顔を仰げつゝ堰き來る涙を拂ひもあへず道へるやう其御深切なるれ辭よあまへ申そも如何の譯なれど兄が横死を聞くうへは其實をれ話申しまそると是より河羅の家の事變れ登代が行方探索の爲め諸國を巡る趣きを藏さず陳ぶれば勘助も再は然うかと驚きて然うきくからい余が身を明して卿よ語るべしと西沐寺敬眞が現在甥の岩崎の毒手に懼り最期を遂けたる事また其遺命により密書を所持して江戸邸へ上る道遠州にて病氣に懼りし途末を低聲ながらも具に話し此うへは卿も俱に江戸邸へ赴き御後見たる嶋翁公か爾なくば松倉丹下様へ余が訴へ出ると同事よ河羅様の冤の汚名を歎願なのすころ宜からめと慫慂にお作い最と嬉しく伴の娘は今申を彌之助と云ふ者の妹ゆゑ一同に荒居たなら欣びませうよ行方しれねば是非もなしと打離るれば勘助は其娘の事も御家老の松倉様へ願つた後卿が索る河羅のお嬢とゝもに捜索して軈で對面も出來るなるべし不案内なる土地の事ゆゑ且卿が落着先の出來たるうへにて余もまだ盡力なさんと頼もしき辭に萬事を委ぬる折から一番鶏のうたふ聲に卒とばかりに勘助は茶價を與へ該家を立ち出で拂曉頃に西の久保なる上屋敷の邊へ着たりしがおさくは勘助へ心注けていよやう江戸屋敷には嶋翁公を始め奉り松倉様といふ忠義の御方が御坐るなれば岩崎方の悪人はあるべき様には思はれど邪智には長しか國家老殿も一味の誑かありて貴郎の事を聞き知つて國へ内通する時は如何なる計謀をするかも知れず迂濶よ御屋敷へ推參よりは嶋翁公がお邸より御上屋敷へ

の御越を道にて待受け直々に御駕へお願申さば方が大丈夫だと思まそが貴郎は何と思召すと云われて勘助確と手をうち成るほど是は宜い處へ氣が注いた其意見は疎ひ鳩翁公へ直訴を爲やうと謀し合せ一通の書面を認め同翁が其自邸より西の久保なる上屋敷へ參拘の途筋芝赤羽根の邊りにて轎戸に向かひて竟ゴ直訴をしたりしが鳩翁公は其の書面を披閲ありて扈從の士を招き何ゴやら下知を傳へられ勘助れさくの両人を其の自邸へ連れ行かさせ他出を禁じ置き癒て上屋敷へ赴むかれ歸邸の翌日腹心田邊又太郎を以て両人を尋問さるる其趣きは旦く捜給に顯し次回に分解そるを聴べし

其四十七

却説田邊又太郎は鳩翁公の命を受け勘助れ作の両人を評定所の内室へ招き人拂ひのうへ直訴の趣意を糺せしゴ勘助は旦其身の素性を陳べ其より西林寺教眞の履歴を詰り岩崎肇の爲めに横死の顛末其靈死せずして古主の安危を憂ひ勘助を聘きしを肇夫婦は是を知らを教眞ゴ毒藥を與へんとせしが誤つて庭前へ器を倒し草花枯凋みし事また教眞の遺命により其場より逐電したるまでの有枝有葉を上申しまた昨夜鉛ケ森に於てれさくを扶け其素性を聞き識りしゆゑ俱々直訴に及びし趣きを述べ訖り爐て教眞より受取り來りし該守靈を指出だせばれさくは河窪家に在し日の事變より今日までの經歴を具に言上したりしにぞ又太郎は逐一ゴ聽き取り是を筆記し彼守靈の紐とく〳〵と把り出だしたる一通ころ石ゴ川にて教眞が拾ひし密書と知られたる又太郎は諏度毎に且憤り且歎し辭徐に両人に道へる樣教眞法師が主家の爲めに此密書を其方に手渡しするまで冥目せす惡奸を欺かれしは了得に岩崎主殿殿の舍弟なり其血統にてありながら君恩を忘却し國家を横領せんと謀る肇が所存ぞ惡むべきまた其方が能く主人の命を奉じ遠路を訴へ出でたるは諄々も感心なり追て御沙汰のあるまでは他人ゴ接するを禁じ外出を留めらるゝなれば暫らくのうち窮屈を耐て命を待つこうよけれ雅さくとやらんも追つて尋問ふべき事もあれば勘助と俱ゴ休息をべし今申し立たる孝太夫の娘登代の所在も猶御後見へ伺ひの後ゴ取計ひ佶度捜索なし遣はそべしと仁恤も厚き又太郎が辭に両個は歡ひの眉を開きて退出し田邊の指圖ありたるか邸内の監察詰所へ両人を入れ男女の事なればとて夜い別室に臥さしめ最と鄭重ゴ待遇されたり恁て又太郎は尋問の趣きを具に鳩翁公へ上申し彼の密書を差出だせしゴ同公も大に駭き玉ひ肇が挙動不審なりとは曾て丹下と申し談じ居る事なれど斯る大事を巧計べき者とは今まで知らざりき此上い丹下と協議を遂げ速かに處分すべしと翌日上屋敷へ參られ別室に於て丹下と密談數刻なりしが如何なる事ゴか至急の着手もなく荏苒日子を經過し居たり此時は是松倉秀雄が跟てより伊東甚之助の心底を探らんと密に父丹下ゴも語り居たる折なれば丹下は此事を鳩翁公ゴ吾げ願くば伊東海野の南人が惡事の種を聞き出だし是を捕へて証人に備へ而して肇を捕縛すべし其れまでは秀雄へも勘助れさくの両人の事を藏み置くこう宜からめと西氏の問ゴ決議なし爾るゴても若殿の御身氣遣しければとて御用人上席荒木寅之助を河窪方の両人へ屈竟の部下三十名を附屬せしめ幕府よりの命ゴより海岸防禦を名とし出立させたり恁る折なれば問くれさくへ其後何等の沙汰もなく日々の徒然を愛ひしに既ゴ前號中にも記載せし如く小登代のお登代は卯太郎ゴ案内せられて彌之助が妹お辰にも面會なし國の動靜またお

さくと、もに諸國を經歷て當地へ來たりし一伍一什を聞く人も語るも涙のみなるが此うへい俱々よれさくの所在を索べしと互よ憂きを慰めて小登代は其れより松倉秀雄へ約せし如く伊東を蕩しいよ〳〵一個の密書を得る其赴きい給樣に讓り次回へ續いて分解すべし

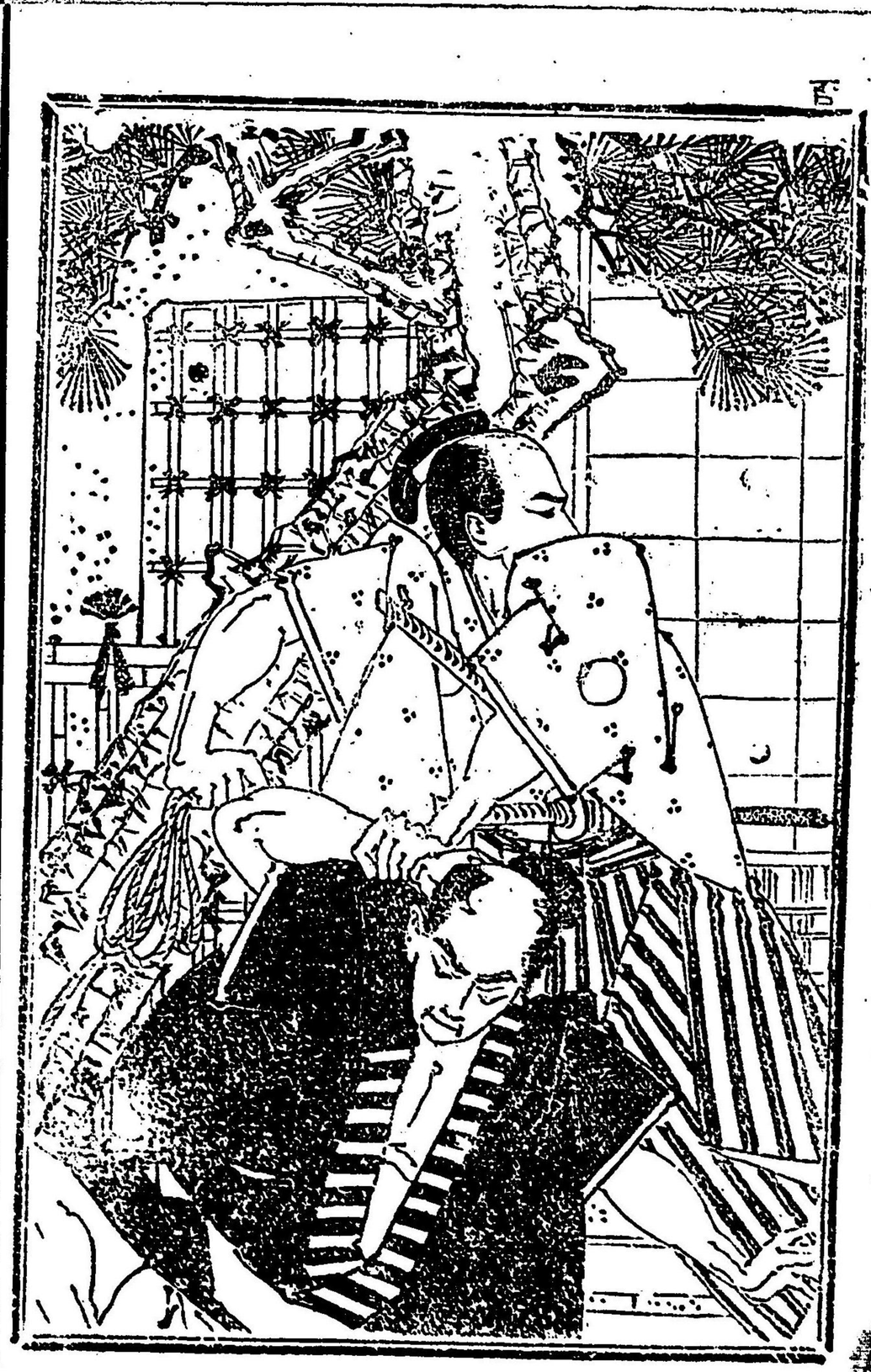
其四十八

有恁しかば藝妓小登代は國の爲めまた家の爲め父母の耻辱を雪がんよは身を捨てゝこゝろ浮む瀬あらめと尋思を定め甚之助へ送りし文は心急にもゐらぬ情をこまゝ〳〵と書認めたる事なれは伊東は之を讀むよりも虛言なりとは爭か思はむ存よりも一際立派に着飾りて同國の或茶亭に來り早速小登代を聘きしよ此方も一層華美に粧ひ纏て同亭に赴きて毎にもゐらぬ媚を呈し先つ頃よりかずならぬ妾よ嬉しい仰せ言有難過ぎて眞實とも思ゐぬほどにて貴郎の意を測りかねしい卿の坐興の慰みものになさるであらうと故と强面申しは爲れど志女吉姐さんへ細々と仰せのありしが眞個なれば卑妾もしみ〳〵嬉しさ故れ目にかゝつて御禮も申し此末ともに御情を蒙る所存で御座りますから二世も三世も替らぬといふ御報言を聞かせて下さい其が卑妾の願ひでそよと身を寄り添ふて口說立つれば甚之助の精神は完然恍惚として吾を忘れ小登代の肩に手をかけながら今さら已よ誓言とは餘りに疑ぐり過るでないか和女ゆゑなら命まで棄る覺期でおる小可然し安心せぬとゐらば何んな誓言誓紙でも望まかせて認めやらん然うして和女の望は何う云や。卑妾が願ひの誓言は其樣な物では御座りませぬ貴郎の御身に大切とをもふて御座る品物を妾にお預けくださりませ妾の方でも大切と思ふ品をは貴郎の方へお渡し申して置きますから別に是ぞと云ひませぬど貴郎

か平生紙囊の裡を大切ゑなされまするのが那の裏ゑは何品か大切の品があると思へば其れを預けて下さりませと道へば伊東は打黙頭成るほど紙囊の裡ゑあるは最と大切の書類なり然し和女に持つたりとて何の益ゑもならぬ品其れよりは小刀が秘藏なしたる此印籠お締は珊瑚の八分珠。否々其んな品物では正可の時ゑ金にしやうと藝妓根性の卑しい盟ひと人に嗤笑れるも厭ですから卑妾の方ゑ益はなくとも貴郎の爲めに大切な品をば預けて下さいなと望むは毎ゑ紙囊の裡に納し一通ころ仔細あらめと思ふよりの所望と知らねば甚之助は爾まで預けて呉よとあるなら預けはすれど大切の書類にあれば和女限り決して他見は無用なるぞハテ誓言に預つた大切な品を他人に見せる其樣な呆氣た卑妾でも御在ませんから安心して。如何樣其れも一理あり然うして和女が預ける品は。卑妾が置は此守裡ゑは岩戸の觀音の像母の記念の笹鶴錦今日まで肌身を離し ふゆゑ卑妾ゑ代つて是からは貴郎が大切ゑ持つて下さい。成るほど曾て志女吉から聞いた和女が秘藏笹鶴錦の守囊とやら如何ゑも承知致した此うへはしつぽりと枕列べて心の紐を解け始めた後互の品を盟代りゑ取替さ れ消も入り度心地なれども早九分九厘手ゑ入りし密書を取得ぬ事ありては秀雄へ堅く保証し辭も立たずと氣を取直し屠所の羊の其れならねど思はぬ人ゑ誘はれ屏風の裡へ入りたるは最と憐むべき事なから幷も河窪が横死彌之助が非業の死も固是ふ登代が彌之助へ懇慕なせしゑ起因し事にて今恁る惡漢の爲めに身を汚がさるゝも全く志操の堅固ならざりし報なるべし

其四十九

往古より英雄豪傑と稱さるゝものそら大事に臨みて綷を誤るは多く女色の上にあれば況てや凡俗の徒の色海に惑溺るは枚擧するに遑あらず寔に慎むべし戒むべし再説伊東甚之助は其身門閥の家ゑ生れて分外の秩祿を給ひ何不足なき身にてありながら海野主計が奪舌に説伏せられ淺慮ゑも奸臣岩崎肇の逆謀ゑ同意し御後見鳩翁侯また忠臣松倉丹下を失はんとの謀計より丹下の悴秀雄を連れ出し放蕩者の名を附し旦丹下ゑ渠を勘當させんとの所存なりしゑ反つて小登代が色香に迷ひ海野と謀りし大事さへ放擲なして煩惱の犬武士となりたるゆゑ遇くも正義の松倉が敏き眼に看破され小登代に含めし計策の其色情に精神奪はれ曾て岩崎肇より頼み來りし一通を堅く封ぢて懷中し上には神秘の二字を記して天滿宮の守護の札なりと云ひ觸せしを誓言代りに疑ひもせで小登代ゑ渡し頃日の望を遂げたりし其嬉しさに更闌まで酒を過し再た枕に就き前後も知らず臥したるが何やら騒がしき音の耳に入り眠を覺せば夜は頓ゑ明け日は既に三尺を昇り只看れば松倉秀雄は捕縄手に持ち立つてをりまた庭ゑは見なれぬ男が松倉の仲間勝平を縛し居たり伊東は綷の意外ゑ驚き起きあがらんとする處に秀雄は立寄り利腕把り逆臣岩崎へ同意の一個伊東甚之助を召捕の爲め御後見の命を受け松倉秀雄向らたり尋常に蠅羅られよと道はれて胸旦打喫げと故と面ゑ憤怒を顯し遥い心得ぬ捕方喚はり不肖なれども伊東甚之助容易ゑ縄目の恥辱は受けじまた岩崎ゑ逆臣とは一切不審の言狀かなと詰れば秀雄は呵々と打笑ひ此期に迄び彼是と陳じ立てころ無益なれ爾りながら一應は惡事露顯の仔細を告げんと是より拘助ふさくか出府し鳩翁侯へ訴へ出



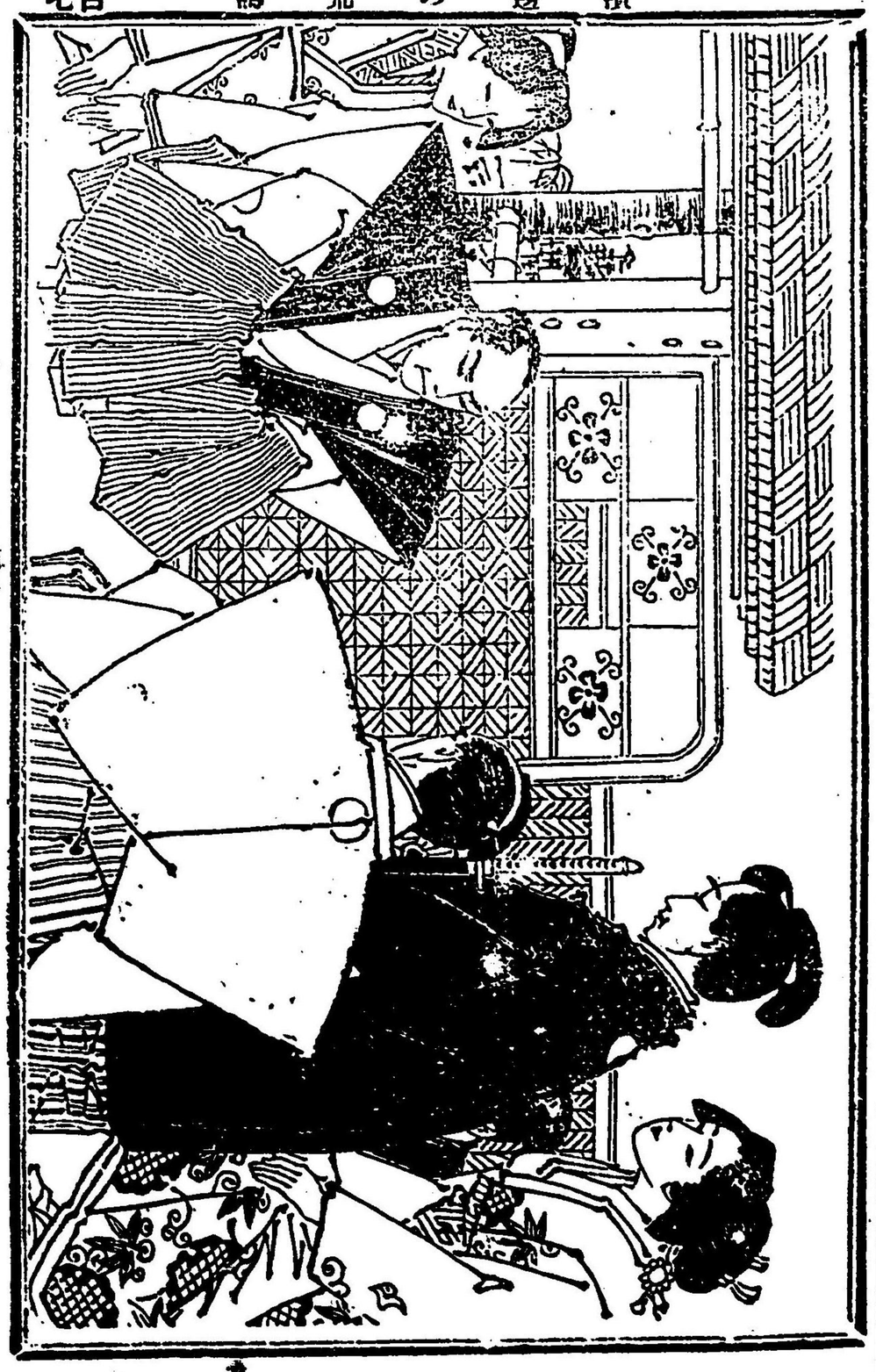
でし事よた小登代は河窪孝太夫の娘にして志女吉と諜合せ曾て伊東の心底を探らん爲め竟に肌を汚玄神秘と云へる守護札を奪ひ之れを撿め岩崎よりの輕狆を手に入れし事また松倉の下僕勝平は岩崎よりの間諜と知りたる事其他船頭卯太郎及び駒勇の妹れ辰の薄命また狸々徳と勝平の物語を志女吉が洩れ聞きしより遂に此に計策を施したる顛末を具に述ぶれば庭にありし見馴ぬ武士も伊東に向ひ吾ころ只今松倉樣よりお咄有し助助なれ海野を始め江戸屋敷にある岩崎一味の人々は殘らず縛に就きたれば只尋常に繩をうけ上の浮沙をふ待なされと道ふ折から一室を出づる小登代も伊東へ密謀の底を探らん其爲めに枕を替し受取りたる一通は直ぐに松倉へ手渡しなしさてこそ足下の惡事を知りたるなりと說き立つれば甚之助は今更に返と辭もあらざれば竟に繩をぞかゝりける恁て此連累一同は芽町の中屋敷へ繫ぎ置き追つて國許へ護送の手續きに鳩翁侯丹下秀雄等へ此處分に付偽議を整し速かに國許へ向け岩崎を捕縛し奸賊の根を斷つべしと鳩翁侯自躬出立の事に決し其準備專らなるに付秀雄は一日小登代おさくお辰勘介卯太郎等を聚へ絕て久しき面會をさせ甲談乙語する其晉景狀くだ〳〵しければ記さず恁て此人々も証人なればとて鳩翁侯の一行と〻もに國許へ發する事となり小登代の抱主へは松倉より充分の手當金を遣し難て江戸表を出立したるは文久三年十一月上旬の事なりき

其五十

話頭後題石州濱邊なる岩崎肇は妻花子と諜合せ津和野より近藤勘介を喚び寄せ伯父敬眞へ毒藥を服させ自滅させんとしたりしに其計策の當否は知られど敬眞は檀上の遠に死んでをりまた勘介は何處へ行きしか影だに見ゑず萬一毒藥を服ませしと僞り訴人に出でし事もやと肇は心を勞すれども花子は更に怖るゝ色なく斯は我夫の御氣質にもわらぬ仰首かな性根痴鈍の那の勘介何しに然る心の注くべきかは行方知れそになつたるは全く妾に吩咐られ數異坊へ服しめたる藥の爲めに苦ひを看て自分い郎君や妾へ對し分疎なさに遂電した分別なしの擧動なれば決して御心配には及びますまいと云へど肇は曷からず伯父が常々肌身を離さず吾へ諫めの証とせし密書の守囊のあらざるは設も伯父より渠に渡し江戸邸へ態さしかも測られねば努々油斷はなすべからず此うへは中止したる御殿の工事を取急ぎ綜を一樂に行ふべしまた江戸邸の動靜い海野主計へ探偵そべしと申し送らん且先ごろ內意を合め同地へ遣りし勝平は目今松倉の下僕となり居るなれば萬一鳩翁侯を始め松倉等が吾を疑ふ事あらば早速注進なす筈ゆゑ爾まで勞そるほどよはあられど蟻の穴より堤の壞倒れ忽せよはなし難しと了得好智に長たる岩崎俄頃に鹿田屋忠五郎を呼び寄せ復度新御殿の工事に取懸らせ晉て功司し架橋の機械を窃かに協議なし以前よりは人數を數百人增し晝夜を分たず建築せしが素より金に糸目なき工事であれば斯ばかりの大事業なれど二月餘にして遂に竣功なしたるゆゑ岩崎の欣ひ大方ならず此時までも心懸りなる彼の勘介の所在は知れねと江戸邸なる同志の者より何等の動靜も報じ來さぬい別に異條のなかりしなるべし殊に先ごろ海野より鳩翁松倉父子ともに自滅させるは瞬間と申し來りし事さへあれば然まで勞〻ん事もなし新殿落成のうへは日を撰み富丸君を請し術中に陷いれ味方に就かぬ奴原は即坐に命を斷たんと腹心同志の輩を集へ渾ての諜合を定めしが玆に一ッの故障といふは此ほど郷命に

より海岸防禦の爲め出張したる荒木寅之助並河帶刀の両人が日々富丸君の御機嫌現ひとして伺候ならざるものなれば旦當日は両人を遣けしむるの計策を施こさんと倘も惡事を談合なし同志の者は退出したり偖其中ユ彼の鹿田屋忠五郎と同人の乾分鶴藏の両人は這回新築落成の功を賞し物とらするとて留め置き饗て卒夫等が身躬給仕し嘉肴珍味の饗應をなし全く我大望の成就なさんとするも其方等功の莫大なれば子々孫々に至るまで此恩は忘却すまゑと甘き辭を両人は眞個と思へば打歡びしたゝか酒食をなしたる折から聊かならと夫婦より褒美なりとて差出だせし黄金の包ユ彌よ目はくれ達に夫婦に謝辭を述べ誘罷らんと忠五郎は該金包を押戴きしユ這は幸も如何ユ苦と叫ひて夥たしく血を吐き倒れ苦しむ其形狀を看るよりも驚き怪ふ鶴藏も忽ち五臓惱亂して同玄く嘗をわげながら吐血する事忠五郎に同じく七顛八倒苦しみ廻り虚空を掴み死したるは惡事ユ與して其惡人の毒手に罹り空しく死す呼是天罰と謂まくのみ兩個の死骸を瞥りと看て花子はホヽと打頬笑み小賢しとても了得は町人思ひの外な脆い奴吾夫是てまふ一ッの憂の雲は撥ひましたと道へば拳も打點頭衆多の者ユ乾分とかまた元締とか稱ざるゝ忠五郎ゆゑ大事をば口外するとは思はねと下郎は口に善惡なしと世俗に申し大事の前の小事と思へば悶然ながら斯してしまへば且安心此外工事ユ掛りし者は若殿御遊覽の濟までは宅へ歸さず城内へ一個も殘らず留め置きたれば工事の秘密は知る者なしイデ此うへは日をトし富丸殿を釣出ださんアヤ心地よや嬉しやと夫婦迭ユ囁き居たるは大惡無道の男女なりき

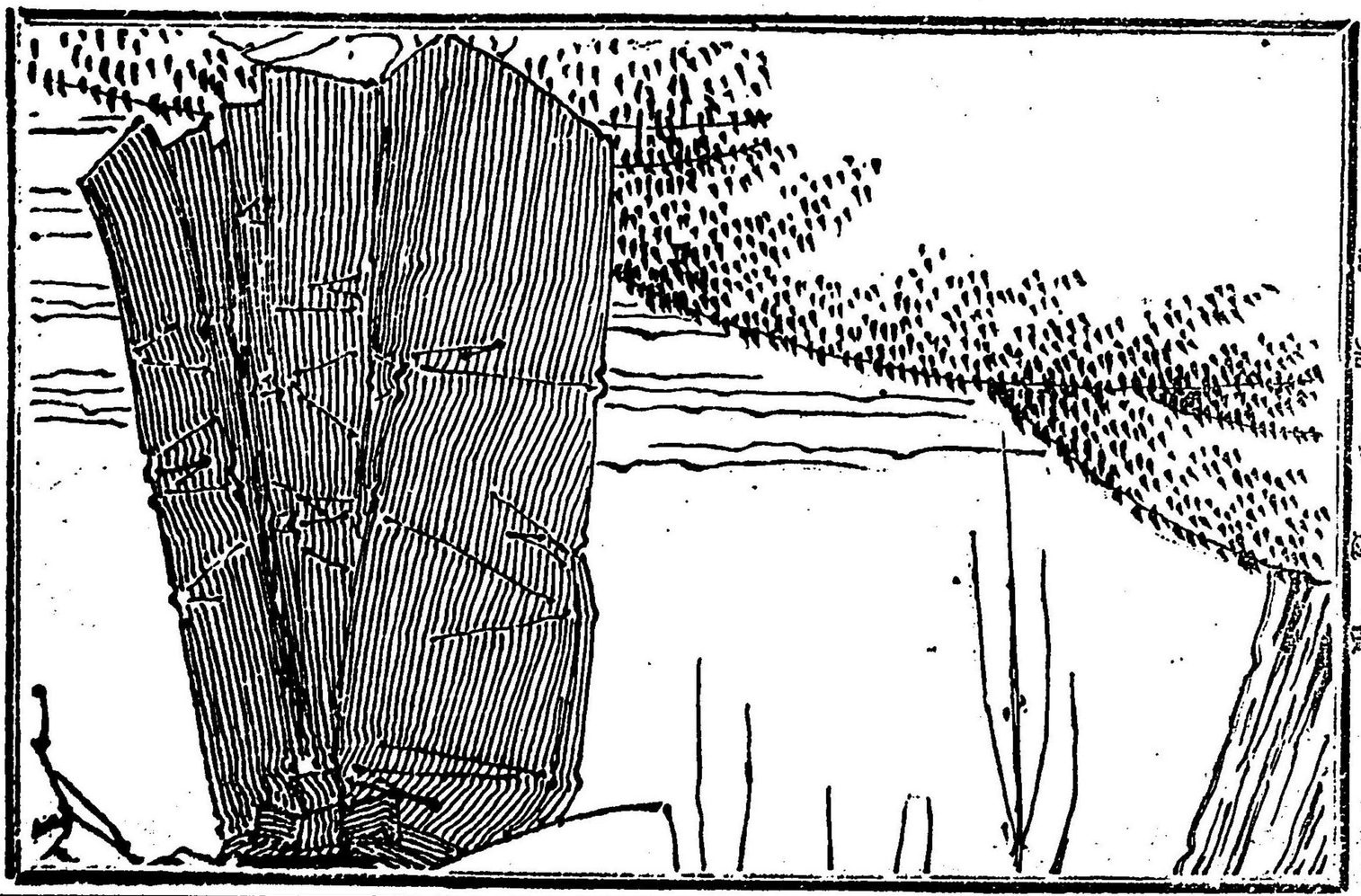
こゝに、また、はぎはといやしき單表岩崎孝の邸より發育る、少年の男女あり這い同藩奥津邊外記と云へる者の遺子にして兄は道太郎と稱び十五歳なり妹の名は妙と云ひ當年十四なり俱に其性怜悧なる上君に仕ふるに忠を以し友に交際に義を以てするの道を辨へ父外記が病死の後は母方の縁故により岩崎の邸に引き取られ教育をうけ居たるが曾て肇夫婦の擧動に不審の事もあるなれど敢て幼年ゆゑに奈何なる事とも心注ざりしに妙女は今日しも忠五郎熊藏の兩人が毒殺されし處を隙窺しより其驚きは大方ならず升も何ゆゑに此漢を斯る慘酷なる成敗ありしなるかと驚に動靜を立聽て始めて知りし逆意の顚末胸潰るゝまで仰天の思ひは同じ道太郎も今日大勢の集會は如何なる事か聽かまほしと給仕に出で、其れとなく窺ひ知りし新御殿の巧も深き池の面に架けたる橋より富丸君を弑し奉らん協議なるよろ這は島からぬ御大事早速上へ注進せんと惱る心をまた倩々思ひ顧せば此事を訴人なしたる其時は岩崎夫婦は忽ちに重き處刑に羅るなるべし爾ありし後は世の人が アレ見よ奥津邊道太郎は思人夫婦の訴人して手柄顔に誇居るは小面の憎き少年かな厭へずともまだ外に思慮あるべきにと後指さゝるもまたはずかしく父が御疾死ありし後は生の親にも優たる大恩人の岩崎夫婦如何よ御上の大事なりとて吾口よりして罪人に落すは義理を思はぬ仕方只あつて此まゝ捨置とさは御上の御身に係いる大事左にも右にも忠義を立て双方全たき事を計らは命を棄つるの外はあらぬと稍くに決心なし快々として吾部屋に皈れば妹は茲にありて兄が物憂き顔色を看るより其と推せしか四下に窺ひ膝を寄せ毎に髮りし御容子は殿や尊兄も今日の密議を「偖は御身も聽き識りしか喫驚入つたる逆意の逐一只歎息の外はなし恁まで謀みし事なれば恁幼年の吾等



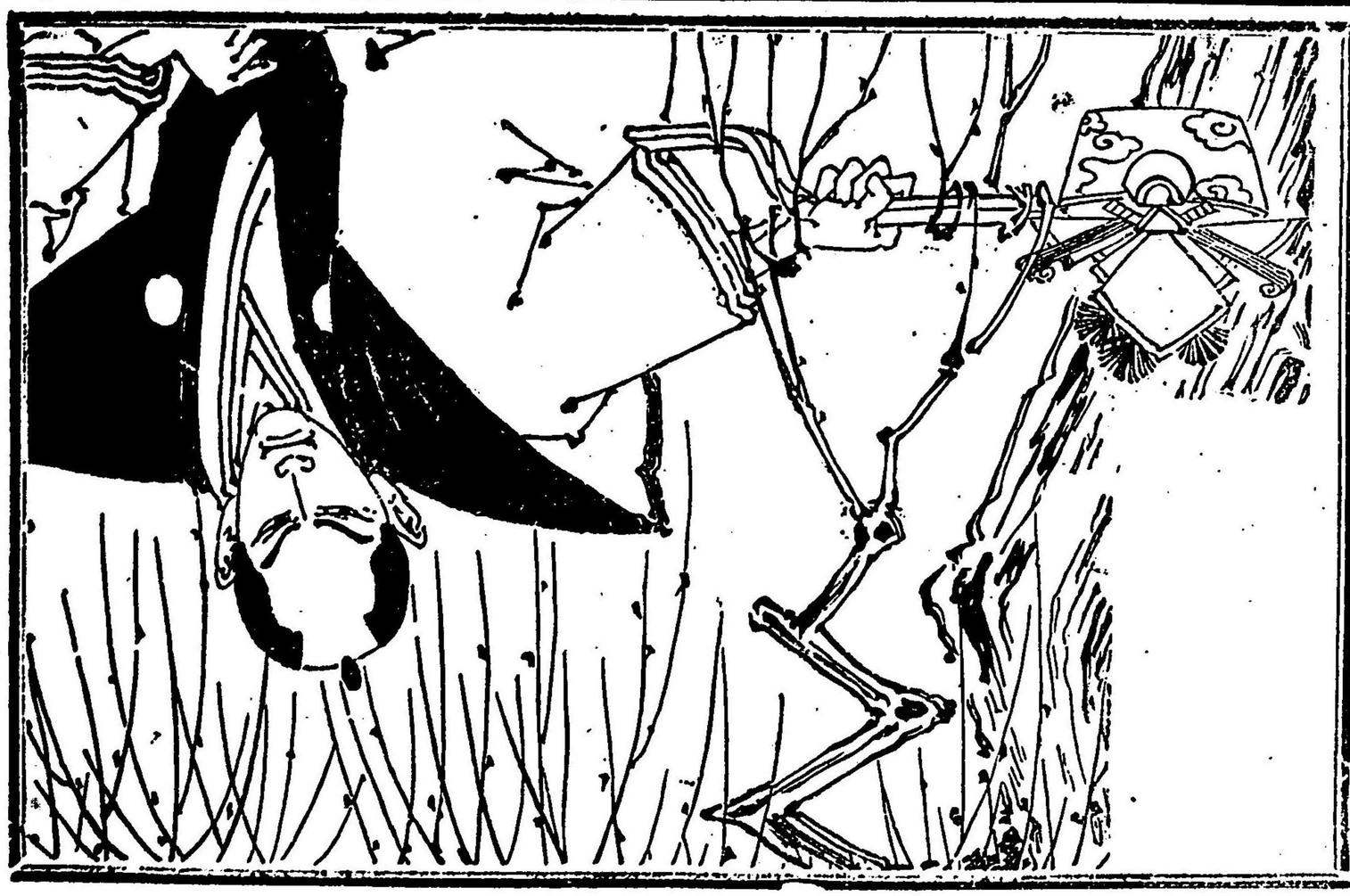
如きが諫言なりとも今更に思ひ止まる人にもあらじ耐ればとて訴人して恩ある夫婦ゴ罪を被せんは素より快よからぬ業なり特には父が御遺言ゴ吾が亡後は岩崎を父と思ふて仕へよと仰せは耳朶ゴ存りあれば何條訴へ出でらるべき只あつて默して止む時は上の御身の大事ゆゑ忠義を立つるは一命を棄つるに如かずと覺期は極めぬ耐は生存父母は勿論吾亡跡を出はれよと道ひつゝ膝にはら〳〵と落る涙の露霰妙女は聲を呑らしながら今日ゴで知らぬ御夫婦が世ゴ恐ろしき大惡謀濱邊の家の礎とも云はるゝ御身てありながら斯く浅ましき企謀は全く天魔の魅入しなるべし妾も最前両個の者を毒殺ありし動靜を見て直ぐにお諫言申さんと思ひはしたれど愁ひに大事を識りしと登兄の身ゴまで及ぶ難義のありもやせんかと思ひかへして來る廊下でまたも聽いたる惡事の逐一所詮諫めを容るゝともお採用あるとは思はねば妾も死する覺期なれど其死するにも大死と云はれぬやうに忠義が立たく聊か浮む妾が計策尊兄のお氣ゴは協ふまじきか野夫にも功の者とか云へば聽容れ給へと深よき妹が耐に道太郎は能くこころ覺期を致れたれ爾も然までの決心なれば吾は障れる雲とてなし面て其浮みし計策とは如何なる事かと問ひかくれば妙女は何も膝そり寄せ何か秘密囁きしゴ道太郎は打點頭其れぞ眞個ゴ良策なり努す油斷したさぶなと諫し合しゝ計策は亦もまた如何なる事やらん後に至らば自然知るべし

其五十二

爾る程に岩崎肇は濱邊なる新御殿苑園ともゴ工事落成の旅きを言上し來る十五日を以て富丸君の親臨を乞ひたりけり抑も此新殿の建造爲体を記さんゴ先南半邊に大なる池を穿り其四圍にハ盡く奇花異草を栽また該池にハ八ツ橋を架け池ゴ沿ては鶯蕉も長堤を築き堤上には百歩に一亭五十歩に一舍あり両邊ゴは花米だ咲かねど桃櫻梅柳の類列ひ樹池中に靄漾ふ小舟は龍舟鳳舸とも見ゆべき風のまに〳〵左行き右行きそるうちを夥の鴛鴦の相戯ふれて趕に似たり北半邊ゴは一灣を穿りて海水を之ゴ注ぎ入れ灣中に築立し山は蓬萊に擬へ擣做したり樓臺は危ふきまで峻く登れば海外をも望むべく思はれたり偖南北の仲間ゴ大濱殿を造り其苑墻の瓦は輝耀きて瑠璃もて葺けるかと訝り壁は黄密にて紫脂もて泥しかと疑がはる庭園に疊層ねたる怪石は嶙々峋々として見て眼も最と奇く窮舍に結搆たる奇材異料邊は其狀一帶の錦繡を曝し萬の物一として善ならざるはなく美ならざるはなし寔に仙界も斯のやあらんと觀客眼を驚かし閑者耳を聳ざるはなし斯る宏大壯盛なる新殿を建築し數萬圓の金を浪費したるは這回の大望成就の後已が別館となさん肇が所存なりき此工事中曾ても記荒せし八ッ橋の第三枚目に機械をなし富丸君が橋上に歩を進められし時橋下より土堤の中へ傳はりし針鋼を引くときは忽ち機械の螺旋脱けて主は池中へ陷入るなり此以前ゴ池中の上邊より毒水を流し落たる人の一口にても其水の咽喉に入れば即坐に命を斷つ俗にいふ雨天灣秤の謀略なれば富丸君の陷入られしを見て救はんとして飛入りし者のあるとても所詮助かるやうもなき深き巧計と知られたり恁て當日は彼江戸邸より來たりし荒木並河の両人を遊けしめん爲め遽に河岸に於て大砲試發の命を傳へ両人は同塲へ臨ひべしと命を蒙しかと荒木一人同塲ゴ向へど並河は富丸君の下知ゴて當日の供奉に列したり陸て辰の刻ゴ本丸を御出門ありて程なく斯御殿へ着賀ありしかば肇夫婦は御門前に於て來迎し御先導は奥津邊



五十一 聊齋志異



五十

道太郎なり正殿に於て暫時休憩ありて卒開及ぶ物數奇の華が盼咐の華園の体をば觀物すべしと座を起ち玉まひ深き計謀のあるぞとは神ならぬ身の知べうもあらねば徐々苑囿に出て玉ふを御先導の道太郎は富丸主の後より扈從し來る妹妙女ゑ急と眼配せしつ南半邊の池ゑ架けたる八ッ橋の本に投かゝりぬ旰、富丸君の命脈は風前の燈火よりもなほ危く果して謀計の罠に落るや否始く次回の分解を竢つべし話頭轉短岩崎は富丸君が苑囿に誘れしを看るより猶て准備の毒水を長柄の銚子の裡ゑ入れ手に提へて池邊りの枯柳の下ゑ隱がくれしながら今や池中へ毒水を流さんとする此時怪しやさつと吹來る一陣の風は忽ち身に染みわたり五體ぶるくみて働き得ず是は如何にと思ふ折から柳の邊へ曖昧と立顯はれし異形の姿ゑ了得の拏も愕然して只茫然たるばかりなり

其五十三

綜の奇怪ゑ岩崎は吾にもあらで銚子を持ちし其手を看れば這は什生に何の程よか枯柳の枝より垂れたる糸が利腕の部を啞と結んでをり彌よ不思議と思ふ折から宛も捲かれたる聲音ゑてアナ嬉しや奸賊の謀計も最早是れまでなりよろこばしやと云ふかと思へばまた呵々と打笑ふて眼前に立顯はれし異形の姿は消て跡なく曖昧たる影さへ見えずなつたるが此時拏は全くの正氣ゑ復さば憤然として岩崎拏とも云はるゝ武士が妖怪變化か障碍の爲めゑ大事を怠り仕損じて末代までの笑種なり非除障碍をなさばなせ并も何程の事かは有んと云つゝ銚子の毒水を池中へ流し遷さんとするに銚子の中には一滴の水ざになく恰も拭ひとりし如くなれば拏も復度驚きしが急度心を取り直しまた室に入り毒水を調合なして居たりけり

有る程に富丸君は道太郎に導かれ玉ひ徐々苑囿より出て玉へば御背後よりは道太郎の妹妙女並河常乃が嗣添参らせ道太郎い苑囿れ理なる築山よ指さゑ邪れころは遥茨、方丈、凉亭として彼の海中の三神山に擬へたるものよて候ふなれ此池の面は往昔の三河國にありと聞きし在吾の君がかち衣きつゝ馴にしと詠み玉ひし八ッ橋の舊跡を摸して候ふ升も此工事い壮若の盛りの候よ工を竣へなば草花の御眺も一層なるべしと肇も心を勞したる趣きに候へども工事の者よ故障ありて暫時中止をなしたるゆゑ意外に落成遲々なして暖国なからも冬なれば池の面に群れ遊ぶをし鳥の外にい早咲の山茶花牡丹の眺のみ爾れども今日は空晴れて小春日和の海の面遠き帆船近き漁船之れ等を御覧はまた興あり苑囿の御遊は是ほどよして正殿の樓客へ成らせ玉へと申しあぐれば妙女も傍より只今道太郎が言上奉りし如く庭の面をば御歩行よりは樓よ登りて海上を御眺望遊ばさるゝころ御一興ならめと勧め申すは八ッ橋を渡らせ玉はぬやうと両人が禁むる胸を識り玉はねば富丸君は黙頭玉ひ如何さま今日の好天氣に海面の眺望も一層なゝべし爾れどろ肇が心を勞しゝ此八ッ橋を渡らずては何やら遺憾き心地せらる余は在吾の中將の如き歌人ならねど此まゝよ席を轉んは無風雅なり本渡るべし道太郎案内をせよと曰ふにぞ奥津邊いはつと計り今は心を決しつゝ其身は先前に立ち大よ妹の妙を歩行せ其れより一間計りを離れて富丸君が歩をすゝめ玉ふ如くおし上手より第一枚目の橋の鈌へ投かゝりしに他人の眼よは注かねども怪しや側の燈籠の下よ潜たる巌石い忽ち人の形と變し富丸君よ打向ひ頭に首を掉る体なれど帯刀は勿論道太郎兄弟の眼よも注かず一個富丸君の眼よ注まりしゆゑ素より柔弱なる性なれば打驚きて苦と云ひつゝ

雨の袖よて眼を掩ひ行途をとゝまり立ち玉ひぬ

他眼に毫も見えねども唯富丸君一個には橋の鈌の巌石が人の形と變ずつつ頷を掉りて行先を止むる如くよ思はるれば富丸君い歩を駐めて袖將て顔を掩ひ玉ふを動靜知らねば帯刀は君よは如何遊ばされしかと問へば稍く掩ふたる袖をかい除け四下を看玉ひ余は性得蛙を最み嵩けるものゝよ厭ふなるが邪れ看よ橋の鈌なる石の形ちの自然ち蛙の姿に見ゑたるゆゑ思はず顔を掩ひしなり氣分も最と悪ければ庭面の散歩い後にして道太郎の云へるに順ひ樓よ昇りて休息すべしと踵を轉し玉ふ折から嚮道進らせし奥津邊兄妹は此橋の二枚目にありしが今富丸君の引返し玉ふを見て兄は妹に道へるやう妙女ヨ君は御安寨よ樓に向はせ玉ふなれば非除他策のあるとても帯刀殿が扈従し奉り守護なすからは氣遣なし只懸念しさい此橋なり今や我々兄妹が忠義の爲めに命を絶ち後の患を攘くべし覺期をせよと云ひながら空と駈け行きて豫て聞く第三枚目なる橋板の裏なる梶を扳けば過たず機械の橋は中央より折れて両個は池の中へ水音高く陷入つたり此時彼の裏中に隠れて機械の針鍼を引かんと待ち擁へたる徒黨の漢は此爲体に打ち駭く思ひは同じ岩崎肇も迦彼方の樹蔭に黙詠如何にと窺ひをりしに目前せし人は陷もせで奥津邊兄妹が梶を外し自身地中へ投しゝゆゑ其仰天も宵ならず偖は疾よも兄妹は吾が大望を漏れ聞きて恁る障碍をなしたるか憎さも憎しと氣憤百愈吾れを忘れて向ふの方より橋を渡りて四枚目の中央方りへ来たりしが真れむべしゝ妹は五池中に陥て計略の毒を含みし事なれば水底にて煩悶し忽ち顔色変じつゝ呼吸に絶ゆし此

駭は稍く波よ浮みぬ恁樣事よ富丸君の御駭きより帶刀は偖ころ仔細のある別殿油斷ならず
と富丸君の御手を把つて守護なしつゝ側の石へ投つけし火藥の仕掛けは忽ちに轟と音して
焔々と立登りたる信號の狼火スハ殿樣の御身の上氣遣しきぞと門前よ覗ひゐたる荒木を始
め江戸表より差廻されし人數は一同よ苑園の傍へ最と嚴重に居列んだり東道樂は謀略の仕
損じたるを遺憾よ思へど故と素知らぬ顏色にて御前間近く兩掌を突き少年輩が測らぬ珠忽
に御興を覺を耳ならず見苦しき体を御覽よ入れ恐縮の外は御座なく候ふ何卒寛典の御沙
汰ありて席を更め樓上に於て御息憩の程を願奉まつるソレ黑川生御執成をと巧計の聲聞も
苦にせぬ丈夫爾れども黑川は油斷なく君の御意を疑ひしに富丸君も先刻より深く恐怖を懷
き玉へは今日ハ此ま、歸城もべしと仰の下より黑川が御供揃と令するにぞ彼の屈强れ壯士
們が護衛し奉り城内へ行列速く歸らせ玉へば擧夫婦は宛然に掌中の珠を取られし心地すれ
ど只得門前まで奉送し快々として席に皈れば今日聚りし一味の者は就れも精悍しく身滿體
なし駈出ださんとする体なるゆゑ這は各々には何事なるかと問へば一同聲を揃へ何事なる
かとは家老の辭ばとも覺えを謀計露顯なしたるうへハ追かけて富丸を刺殺じ手向ふ奴們切
つて棄て絆を一擧に決べし遇々そる時では御座るまいと血氣に惱るを岩崎はまて姑くと
押禁めし後の話說は次回へ記さん

其、五　十五

壯士の惱るを押禁めて擧は徐に道へるやう今日の巧計の畵餅觀しは奥津邊兄妹が小賢う事
動よよればなり爾れども此後富丸を亡ふ計謀は何程もあれば今嚴重に守護なし歸るを遺憾

け行きて暴舉に及ぶは誠も無の得たるものにあらざるべし奥津邊兄妹の横死は全く過ちと思ふならん首尾よかりしと喜ひて御前を下り長廊下を四五間帰り來りし折から思ひがけなき左右の襖を押披け突と立顯れし兩人の壯士は岩崎が前後を固み壁をかけ。岩崎拳へ御糺問の筋あり陣屋の調所まで參るべしとの上意也と道ば一個は聲を亞き拒み立てして願はずば縄かけ來よとの最合なるぞと不意に出でたる体爲に拳も偖はと驚きしが毫も怖るゝ色はなく上意とあれば謹んで何處へなりとも參らんが當國の藩士中に見知ぬ顔の足下衆斯る場席へ進入したるは上士以上の者なるべし夫共中士の身分の者か且姓名を聞かざれば同道致し筋はなしと道はれて兩人は打點頭御廣間へ近く來りし余儕殊には未だ一面識だに致し〻事なき岩崎拳疑惑は左こう有べけれ余ば江戸邸定府の士大久保行之助の子息愼一郎小山伊織の長男伴左衛門なりと聞くより拳は心よ驚き大久保小山兩人は鳩翁侯の肱股の臣にて曾て本家よりの附添人なるが如何なる事にて毎の程歸國したるか訝しやと思へど此場で問ひもならねば胸を定めて兩人と〻もに糺所へぞもまた今更に詮なければ道太郎兄妹の死を憫みはせで太く惡み死骸を路外へ棄せさて指令を御待あれと自若たる態に壯士も躊躇出を制を止まりし發議を今せ國藩制なし〻に冬々自邸へ立歸りぬ怎て翌日岩崎拳は前日の富丸君の拜謁を賜ひ別殿の工事に敵てい一層の心勞過分なりと浮沙汰ありしかば拳は面目身よ餘り有難き冒を受し心の裡に思ふやう怎る上意のあるべりは八ッ橋の密談心注きしよりあらざるべし

切の顔を怠しゝと思ひ居たるは寔よ淺間しき極なれど誰とて諫る者なかりき折から拳の伴なして登城なしたる件間が遽だしく立歸りて旦那樣には今日は登城の上殿樣へのぼ拜謁濟み御退殿の砌に表御間の筋ありとて其まゝ調所へ御廻しとなり只今縄にかゝり玉ひしよし又御徒士の衆に同も揚屋へ入れられ我々耳は携なしと申し渡されたるが承まはる處にては江戸表より御鍵見鳩翁樣が昨夜御入國ありて何か御糺問がはじまるとの事よて昨日新御殿へ御給仕に手傳よ御陪なりし方々は追々縄にかゝり御城内へ引致よなりましたゆゑ急き此段御注進を仕つり申す尚も旦那樣の御身の御動靜聞き糺して參るべしと云ひ捨て引返し〻ゆゑ花子の驚き一方ならず偖ころ惡事は露顯したれ特には鳩翁侯が密の入國今朝より到つて不意に着手をしたるからは充分手廻しあつたる事にて最早免る道はあら者此うへい縄目の恥辱をうけんより妾も左近將監の妹なり郁之助を差殺し潔よく自害をせんと覚て覚期をなしたるにか幼兒を抱きて樓に登るに茲は佛室よ繃ひありて楷子を外せば他の人の昇るべき樣もあらず花子は驚て佛室に向ひ回向をなして準備の短刀片手に持ち郁之助を膝の傍へ坐して顏つれ〴〵と瞰遣りながら涙よ曇る眼をしばたゝきて开も何事を云ひ聞かすか次なる回答を看て知らん

其五十六

登時花子は都之助の顏打瞰遣り涙ながら。爾は正しく前の濱邊の城主左近將監殿の甥とは生ながら從弟同士なる富丸の臣下となさんは、朽惜しく何卒濱邊の家名を亡相續させんと思ふ丸ふより汝公とゝもに富丸を滅はんとしゝ謀計も遂に露顯となりたるなり素より幼稚の郁の

富丸是まで殺害するの折は度々なれど變死させては家中の疑惑反て爾の代となつて二心を懷く者あらんと其れや是やを思ひ過し新に造りし別殿の梁に架したる八ッ橋の碎けて死しなば其時こそ工事の者の不注意を咎めて普請に干渉し大夫を殘らず死刑となし恩を讎に血筋を云ひ立て直ぐに爾を城内へ乘り込せんと金謀し渾ての策合も鴨の背と吹遊ふたる夫婦が大望哀八は縄目に懼りしとあれば今にも母子を捕へんと逃捕の向ふは必定ゆゑ妾も左近將監の妹息はしき縄に懼らんより爾を刺して妾もまた此場で自害なすべかし親子は一世と聞くなれば是が今生の顏の看をさめ爾るにても果報拙き爾がうへにてありけるよと膝に抱あげ顏をあて氣丈の婦人も恩愛の別れの涙はら〳〵と禁め兼てぞ見ゆる折から慌しき人の聞必定逃捕と氣を取り直し泣き入る吾子を膝にて壓へ口に稱名右手には短刀胸を定めて眼を閉ち咄嗟都之助が咽喉の傍を刺とし たる後の方よりヤレ須臾と聲をかけ花子の利腕腕と把るを驚き看れば思ひがけなき鳩翁侯にてありけるゆゑハッと計りに仰天の膝のゆるみに壓へられし都之助をば突と寄りて抱き取りしは帶刀なり其時鳩翁侯は花子に向ひ血線は私事爾は正しく國家の罪人恁る事にてもあらんかと自身に馬を向けたるなるが四方の楷子を嚴ち此樓へ登り居たるは自殺の覺期と推しゆゑに裏手より楷子をかけて登り來しが案に違はぬ此場の体輕からぬ罪を犯しながら自殺せんとは重々不届また愛盛彼る都之助に刺さんなどゝは無分別左にも右にも鳩翁が計らふ胸もあるなれば必ずともに死に急がれな尋子とも〳〵我邸に整して御沙汰を待ころよけれ輩とゝもに獄裏に繋ぎ糺問なすべき筈なれど富丸君より花子ころ正しく伯母君の事なれば鳩翁よきに計ふべしと仁惠館れる上意に

より獄に繋がず吾自邸へ拘監筈にてあるなれば諸々不所存なる事ありて上意に悖る事なかれと嶽と仁慈ある鳩翁侯の辭に花子は死にもならずまた手向ひも出來ざるにぞ但默念たる計なりしが疾も早くと鳩翁侯の指令に心樹黒川は準備の轎戸舁入れさせ母子別々乘遷らせ自身これを護衛なし鳩翁侯の自邸なる下の町へ急がせける恁て鳩翁侯は岩崎の召備は夫々の宿へ引下らせ邸内へは守護の者を置き且先ごろ工事に關係して城内に止め置き外出を禁ぜられゐる人夫數百人を引出し抑も鹿田屋忠五郎より雇入れられ工事落成の後御酒を下邊さるゝと云ひ騙し殘らずを城内へ入れ其まゝ留め置かれしまでの顛末を口供に連印させ鳩翁侯自許の事情充分に探索の行届きしゆゑ恁て十一月三十日に至り參を調所へ喚び出し鳩翁侯自身に糺問さるゝ其趣きは且繕樣に顯すものから次回に記さん

其五十七

荒政麁乱彈所の正面には御徒見鳩翁侯出席有列座の諸士は荒木虎之介並河帶刀田邊又太郎其他岩崎が爲に謹慎或に蟄居杯申し付られし當家譜代の忠臣等鳩翁侯入國のうへ其謹を解れ出勤せし人々等なり恁て岩崎參を拘留所より引出し一段低き縁側へ据たり參は先頃登城の儀取押となり當日一應の尋問ありしと雖も存ぜぬ知らぬと主張し更に伏そる休なき故充分に證據を示し招丁させんと今日まで何等の沙汰もなかりしなれど爾る計故のありしは知らず畢竟斯く糺彈の遷延するは證據の無に苦みて困却なすと變たり今日は鳩翁侯に糺彈なもこと聞けば一々論破し坊主首に閉口させて呉んずと怖るゝ色なく揚々と縄客の中へ登しゐたり少時ありて田邊又太郎は席を進ませ參に向ひ先頃一應尋問に及びしかと國家を横領せ

んとするの企謀なしと陳じたるが如何ゝも汝が横領するの企謀なくとも恐れ多くも御當主を弑し奉り一子新之助を御養子と稱し乗込ませんと夫婦共謀なしたるうへ同志を募め徒黨を與し之反逆の悪然たる者にて今更喋々陳ずるゝは及ばず眞直に伏罪仕つれと道へば肇は片頬に笑み這い仰々しき御尋問かな岩崎肇い御當家の譜代先祖代々分外なる秩祿を頂戴し特に小可へは恐れ多くも御先代の令妹を降嫁し玉ふの光榮を帶び家門の繁盛を極めし身にして何を不足に野心の企謀あるべき樣も候はず之ぞ全く肇夫婦を妬む輩の讒言にして經告なしたる事なるべし爾るを態々御後見が御入國ありての乱彈は近時恐れ入つて塵りまするとと自若としたる答辯を鳩翁侯は鵜取りて徐ろに肇へ打向ひ前左近將監殿の寵を蒙り父主殿死去の後は幼年ながら執政の上席となり剰さへ君妹降嫁の光榮を蒙むる其莫大なる恩を忘れ野心の企謀なすやうなしとい寃に陳もあるべき事なりき耐れとも通れぬ罪跡の顯然たれば口賢しく抗辯なすとも天理といふ鏡にかけて照す時は肯て陳ずる道あらんや今一々は尋問する證據に向つて盡く說破なすべき辯論あらば陰通なしたる鳩翁が今日よりして後見を辭し國政渾て汝に委ねんソレ又太郎讒間かせよと下知に田邊は畏まり側へに置し手文庫より把り出だしたる數通の書類を披き讀下すは第一に肇か石上川にて道乃に奪はれし手紙第二に近藤勘介が口訴狀第三ゝ河原の下女おさくの口供第四に愛妾師彌之助の妹お長及び同職卯太郎の手續書第五に岩崎が若黨勝平猛々德の口狀第六ゝ柳橋の藝妓志女吉河組の娘登代事小登代が口狀第七ゝ伊東甚之介の口供第八ゝ海野主計の口供第九ゝ松倉秀雄が探索の手續書第十鳩翁侯入國以降捕縛され肇に一味の者の口供及び工事方數百人の口供等

なり此十通の證據書類に對し辯解の道あらば陳述べしと最嚴重に讀み聞かせば肇も斯て探索の行屆きしとは思ひがけねば何んと辯解すべき樣なく但無念と差俯向居なす汗を流より垂るゝ計りの風情なれば鳩翁侯は辭を柔け「ヤヨ肇汝は遠き伊達家の甲斐近くは仙石家の左京の徹を踏む覺期にてもあらざるべけれど一朝謀計露顯なしなば猶て覺期もあるべきに今となつて未練にも抗辯なすは卑怯なるべし女ながらも汝の妻は了得に左近將監殿の妹ほどありて罪の顚末を逐一ゝ余まて自首なし沙汰を待ちぬ其れゝ汝は毎までも手數をかけて伏罪せざるは大丈夫とも思ふ辯者もあらんか飽まで上へ抗抵し祖先へ不幸と思ハざる不忠不孝の身となるは所も亦汝が決心なるかと深き仁惠の含蓄たる其一言ゝ岩崎は思はずハッと首を低げ骨をひしがれ身體ゝ非陰鉛の禁獄湯を濃がるゝとも伏罪せず獄裡ゝ斃れん決の心なりしが妻が自白をしゝと云ひ殊には侯が今の一言拷問よりも骨々ゝ徹へて恐れ入りまする此上は逐一招了するまでもなし天の免さは吾罪惡速かに處分あるべし偏に願ふは妻子等へ但寛典の沙汰をばと蒙遇不敵の岩崎肇もホロリと翻す一滴の涙のうちは奈何ならん千萬無慮の含蓄なるべし

其五十八

鳩翁侯が權謀の一言とは知らず妻花子が自白しゝとの事を聞き且は家名の廢絶を悼び仁惠の辭ゝ岩崎肇は抗辯なすべき氣勢も挫け遂に服罪したりしかば當日詮議を了り復度同人は獄に下らしめ當日よりして庶人の取扱ひをなさしめ是より分の協議を尽しゝに就れも天地に容れざるの大罪人なれば速に行なふころ至當ならめとの議論湧出それぞ鳩翁侯は之を

百二十五

容れず未だ其忘しを遂たるにもあらず特には前君の寵淺からざりしを以て宜しく一等を減ずるこゝろ有代の厚德なるべけれど竟に首謀岩崎肇は獄門に處する旨を評決し罪狀を沒へ月番の閣老へ上申に及ひけり恁て同人の妻花子い同領本登嶋へ流罪に決し一子都之介は其罪を問ずして嶋翁侯の請願より是を津和野四休寺へ送り僧となし近親指介は更に中士分へ取立られ若干の秩祿を賜ひ松倉秀雄が媒介となり彌之助の妹たつを妻に迎へし由道は迥に後の話說なれど因みに記せまた河羅の娘登代へは更へ父の家名相續を命せられ昔の如く家祿を賜り之れには同藩中の其甲に對とし其能駒勇の忠を賞し祭料として巨多の金數を賜り同家はれさくが相續し其他岩崎一味の者は夫々罪を糺して輕重へ處し善人へは相當の恩典あり濱邊の家門聲固の基礎を定めし折から江戸表より肇の死刑を許可されしを以て獄より引出し刑場の下へ曳くも刃の露と消て首級は野外へ梟さるゝ身となりしは爾に出て、爾へ飯る惡業茲に報ひしなれど之れを視んとて聚ひし者は先ごろ家門榮え宛も權威を逞しうせし岩崎肇が身の果なるかと其應報の免かれ難きを詳して已を戒めたりと雖此獄全く終しい文久三年十二月の末なりと聞伝し然るに如何なる譯ありしか同藩へ於ては此事件を深く秘し設領内の民にして他人へ渡らぬ者あるときは嚴刑に處せらるゝの規則を示しゆ伝知人迎は稀なりしが本年は彌之助が三十三回忌に當るを以て同村の有志者が謀り同人は勿論駒勇等の爲めに大法會を修行し又人口に喧炙する此事歴の實說を編を長く香花院へ存し置かんとの計畫より或人に其の顚末を物語りしを傳へ聞くまゝ筆にうつして恁長々しく記載はしつれど憚る所ありて藩名は省きあれば聊かもの足らぬ心地もあるべけれど所は條例のあるありてなりと偏へ御推讀あらん事を希がふ耳、

濱邊の荒濤

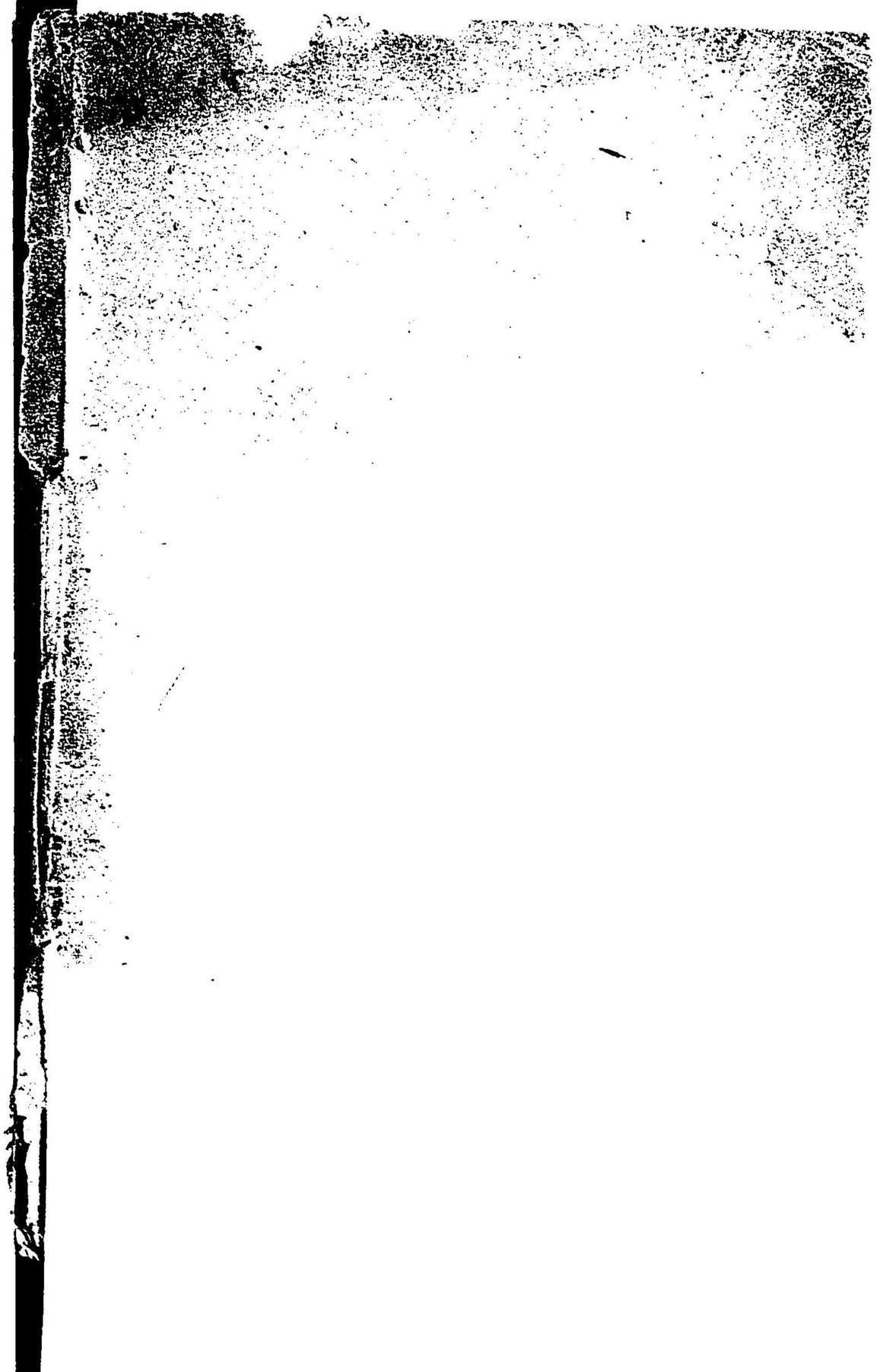
濱邊の荒濤 終

明治三十二年六月十一日印刷
同年六月十一日出版

定價金五十錢

發行者　日吉堂　菅谷與吉
神田區元岩井町三十七番地

印刷者　龍雲堂　大塚沃美
神田區柳原河岸第十一号地

發賣所

上田屋　榮三郎　内藤加我
大川屋　錠吉　井上勝五郎
辻岡屋　文助　明進堂
山口屋　藤兵衛　木屋宗次
鶴聲社　近江屋四
春陽堂　共和堂